# 遊戯王～ＣＬＯＳＳ　ＨＥＲＯ～

龍南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王～ＣＬＯＳＳ　ＨＥＲＯ～

【Ｎコード】
Ｎ９３２１Ｕ

【作者名】
龍南

【あらすじ】
・・・ここはどこだ？俺は死んだはずでは？ってここ見たことあるなと思ったら５Ｄ，ｓの世界かよ！っていうことは俺は転生者！？これからどうすりゃいいんだよ。

遊戯王５Ｄ，ｓの二次創作小説です。主人公はオリキャラですがそれ以外のオリキャラは基本的にださないつもりです。ある程度でてくるとは思いますが。主人公のデッキはＨＥＲＯデッキです。なのでシンクロは使いません。ただ物語が進むと使うかもしれません。

素人文章で読みにくいと思いますが読んでいただけると幸せです。

# 第1話　転生！5D，sの世界へ！（前書き）

はじめまして。龍南と申します。自信はありませんが読んでいただけたら幸せです。

# 第1話　転生！5D，sの世界へ！

???side

「・・・ん、ここは？」

目をあけてみたら見慣れない天井があった。ってあれ？俺死んだんじゃなかったっけ？

その時、

「あっ・・・気がついたのね。」

っと声が聞こえた。そこには前髪を結んだ少女がいた。ってこの娘見覚えがあるぞ。って

「（この娘5D，sの主要キャラの龍可じゃん！）」

え！？どういうこと？じゃあここは5D，sの世界！？

「どうしたの？」

「え・・・あ、ここはどこ？」

「ここはトップスの最上階よ。あなた玄関の前で倒れてたのよ。」

やっぱり。ここはネオ童実野シティ。そして俺は5D，sの世界に転生されたということか。理由はよくわからないがそれはそれでうれしいな。

「あ、自己紹介がまだだったわね。私は龍可よ。よろしくね。」

「こちらこそよろしく。俺は・・・。」

こっちの世界じゃ名前は何だろう？

「どうしたの？」

「・・・ねぇ、何か荷物なかった？」

「あぁ、ここにあるよ。」

ということで荷物をみてみた。ってほとんどカードじゃん！

ええっと名前がわかるものはないかな・・・・・あった。これはＩＤカード？まぁいいや名前は・・・。

「えっとこっちの世界でも名前は変わってないんだ。」

「こっちの世界？」

「あ・・・。」

やばっ、つい声にだして言っちゃった。どうしよう・・・。

「あー。起きてたんだ。」

ん？男の子の声？この声おそらくは。

「あ、俺は龍亞。龍可とは双子なんだ。」

「俺は山岸駆。よろしく。」

「ところでこっちの世界って？」

「こっちの世界？」

「うん。この人が言ってたから。」

隠し通すことはできなさそうだな。諦めて話そう。けど信じてもらえるかな。

「こっちの世界とはここととは違う世界のことだよ。」

「「ここととは違う世界？」」

それから俺がこの世界に来た前のことを2人に話した。

ここで、読者のみなさんにも俺のことを話そうと思う。

俺は現実世界では17歳の高校生3年生だ。こっちでは12歳になっているが。でもただの高3じゃない。俺はハッカーだ。正義のね。中2ぐらいからやりはじめていろいろなところにハッキングした。ある日、変なサイトをみつけてハッキングしてみたらテロの計画表見たいなものを見つけた。やばいと思ってテロ対策の警察で仕事をしていた父さんに話した。最初はハッキングしていたことにこっぴどくしかられたけど、その資料のおかげでテロは未然に防ぐことが

できた。だが、そのせいで俺はテロリストに狙われるようになった。そして、そのテロリストは俺の学校を襲ってきた。そこで撃たれ死んだ・・・・・はずだった。で、気が付いたらここにいて、冒頭のような状況なわけだ。

2人はかなり驚いていた。まぁそうだろうな。普通ならありえないもんな。

「それって本当のことだよね。」

「そうだよ。この状況で嘘ついても仕方ないでしょ。まぁ信じてもらえなくてもいいけど。」

「私は信じるわ。」

え・・・？

「なんで信じてもらえるの？」

「だってカードの精霊が良い人だって言ってるから。」

カードの精霊か。そういえばる龍可は精霊が見えるんだったな。ってあれ・・・？

「信じてもらえないと思うけど私はカードの精霊が見えるの。」

「あぁ、龍可の後ろにいるクリボンのこと？」

「え？あなたクリボンが見えるの？」

俺もびっくりだよ。精霊が見えるなんて。それにしても龍可は嬉しそうだな。

「ねぇ、駆はデュエルするの？」

「あぁ、一応するよ。」

「じゃあデュエルしようよ。いっつも龍可ばっかりでつまんないからさ。」

「失礼しちゃう。龍亜だって弱いじゃん。」

あはは、仲がいいなこの2人。さすが双子だな。さて、デッキはあるかな。・・・・・ないか。このカードの山から作れってことか。

「こっちの世界にきたばっかりでデッキがないからデッキつくったらいいよ。」

「本当？じゃあ早く作ろう。」

「ちょっと待って龍亞。まず荷物の整理とかさせて。」

原作と変わらず元気だなぁ龍亞は。

『クリクリー』

ん？今なんか声がしたような。って

「まさかハネクリボー？」

『クリクリー』

まさかハネクリボーが俺の精霊とは・・・。俺は十代か！

「そのハネクリボーが駆の精霊？」

龍可も気づいたか。

「たぶんそうだと思う。」

「かわいいなぁ。」

本当にうれしそうだな。

「そういえばさっきの話を聞く限りなら駆は住むところあるの？」

「あ・・・。」

すっかり忘れてたよ。てか俺の住むところなんてあるのか？

「どうしよう。」

「だったらここに居てよ。」

「え・・・？」

それは助かる話だけど。

「いいの？」

「もちろんよ。ねぇ龍亞。」

「うん。大歓迎だよ。」

「じゃあ両親は？」

「私達の両親は今は仕事で出かけていて帰ってこないの。だから心配しなくていいわ。」

これも原作通りか。

「だったらお言葉にあまえさせてもらおうかな。」

「よかった。これからよろしくね。」

「うん。」

「準備はいい？」

「いつでもいいよ。」

あの後荷物整理をしてからデッキを組み、これから庭で龍亞とのデュエルだ。

「じゃあいくよ。」

「「決闘！」」

## 第1話　転生！5D，sの世界へ！（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。
つぎは駆と龍亞のデュエルです。
これからがんばりますので続きも読んでくれたら嬉しいです。

## 主人公設定

名前：山岸　駆

年齢：１２歳（中１）

身長：龍亜よりちょっと上

外見：ドラゴンボールの孫悟飯みたいな感じ

備考：この小説の主人公。現実世界でのテロにより死んだはずが、いつのまにか５Ｄ，ｓの世界に転生されていた。今は龍亞、龍可の家に居候させてもらっている。現実世界でいじめられていたのでいじめは極端に嫌う。カードの精霊が見える。現実世界で長男だったためが面倒見がよい。性格は真面目で頭が良い。特技はハッキング。使用デッキはＥ・ＨＥＲＯにハネクリボーが入ったいわゆる十代みたいなデッキ。ただ漫画版ででてきたＭ・ＨＥＲＯ、Ｖ・ＨＥＲＯの融合モンスターも使う。

## 主人公設定（後書き）

主人公の設定はこんなかんじです。

## 第2話　駆の初デュエル！ｖｓ龍亞（前書き）

予告通り駆ｖｓ龍亞です。

デュエルシーンを描くのは初めてなので、いたらないところがあると思いますが、よろしくお願いします。

あと、お気に入り登録してくださったみなさんありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

では、本文をどうぞ。

## 第2話　駆の初デュエル！ｖｓ龍亞

駆ｓｉｄｅ

「「決闘！」」

駆　ＬＰ４０００
龍亞　ＬＰ４０００

「俺のターン、ドロー！シャッキーン！」

先行はとられたか。それにしても楽しそうだなぁ。

「俺はＤ・ラジカッセンを攻撃表示で召喚！チャッキーン！」

ＡＴＫ／１２００

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド。さぁ、駆のターンだよ。」

「ああ、俺のターン、ドロー。」

さぁて、いきますか。

「手札から融合を発動。」

「いきなり！？」

そんなに驚くことかな？

「手札のフェザーマンとバーストレディを融合。」

フェザーマンとバーストレディが渦に吸い込まれる。

「E・HEROフレイム・ウィングマンを融合召喚。」

ATK／2100

「さらにE・HEROザ・ヒートを召喚。」

ATK／1600

「ザ・ヒートは自分フィールド上に表側表示で存在するE・HEROと名のついたモンスターの数×200ポイント攻撃力がアップする。」

ATK／1600→2000

「いきなり攻撃力が2000と2100のモンスター！？」

「すごい・・・。」

「バトル！フレイム・ウィングマンでラジカッセンを攻撃。」

「待ってました！罠カードオープン。ディフォーム！」

ラジカッセンが守備表示になり、フレイム・ウィングマンの攻撃がはじかれた。

「ディフォームは自分フィールド上のディフォーマーが攻撃対象に

なった時、攻撃モンスター1体の攻撃を無効にして攻撃対象に選択されたディフォーマーの表示形式を変更するんだ。」

ＡＴＫ／１２００→ＤＥＦ／４００

「だったらザ・ヒートでラジカッセンに攻撃！」

「Ｄ・ラジカッセンの効果発動！ラジカッセンが守備表示のとき、自分フィールド上のディフォーマーが攻撃対象に選択された時、１ターンに１度だけ戦闘を無効にできるんだ。」

そういえばそんな効果あったなぁ。

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

「よ～し、俺のターン、ドロー！俺はＤ・モバホンを召喚。」

ＡＴＫ／１００

「モバホンは攻撃表示のときダイヤルの１～６で止まった数字の分だけデッキからカードをめくり、その中にレベル４以下のディフォーマーがいたら特殊召喚できるんだ。ダイヤル～・オン！」

モバホンのダイヤルは３で止まった。

「３枚の中には・・・あった。俺はＤ・ラジオンを召喚。」

ＡＴＫ／１０００

やっかいなモンスターがきたな。

「ラジオンが攻撃表示のとき、ラジオンがフィールド上に表側表示でいる限り、自分フィールド上のディフォーマーの攻撃力は８００ポイントアップするんだ。」

ＡＴＫ／１００→９００
ＡＴＫ／１０００→１８００

「さらにラジカッセンを攻撃表示に変更。」

ＤＥＦ／４００→ＡＴＫ／１２００→２０００

「さらに手札から装備魔法黒いペンダントをラジオンに装備。この装備魔法の効果でラジオンの攻撃力はさらに５００ポイントアップ。」

ＡＴＫ／１８００→２３００

まずいなこの状況は。

「バトル！ラジオンでフレイム・ウィングマンに攻撃！」

「くっ！」

駆　ＬＰ４０００→３８００

「でもただじゃやられない。罠カードヒーローシグナルを発動。自分のモンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキまたは手札からＬｖ４以下のＥ・ＨＥＲＯを特殊召喚できる。俺はデッキからＥ・ＨＥＲＯフォレストマンを守備表示で召喚。」

ＤＥＦ／２０００

「ちぇっ、これじゃ残りのモンスターは倒せないじゃん。俺はこれでターンエンドだよ。」

この状況はまずいねぇ。はやくなんとかしないと。

「俺のターン、スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。デッキまたは墓地から融合のカードを１枚手札に加える。俺はデッキから融合を手札に加える。」

とはいえここは耐えるしかないね。モバホンだけでも倒しておくか。

「バトル、ザ・ヒートでモバホンに攻撃。」

「うぁっ！」

龍亞　ＬＰ４０００→２９００

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン！俺はＤ・ボードンを召喚。」

ＡＴＫ／５００→１３００

「ボードンが攻撃表示のとき自分フィールド上のディフォーマーは相手プレイヤーに直接攻撃ができる。」

まずい、これで全部のモンスターの攻撃を受けたら俺の負けだ。

「バトル！ラジオンでダイレクトアタック！」

でも・・・。

「迂闊だよ、龍亞。リバースカードオープン。聖なるバリアミラーフォース！これで龍亞のモンスターは全滅だよ。」

「うわっ。」

ラジオンの攻撃はミラーフォースにはじかれて龍亞のモンスターは全滅した。

「う・・・、俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン、スタンバイフェイズ時フォレストマンの効果でデッキから融合を手札に加える。」

このターンで決めれるかな。あのリバースカード次第だね。除去するカードはないし。

「手札から融合回収を発動。墓地のバーストレディと融合を手札に戻す。そしてバーストレディを召喚。」

ＡＴＫ／１２００

「Ｅ・ＨＥＲＯと名のついたモンスターが増えたことによりザ・ヒートの攻撃力がさらにアップ。」

ＡＴＫ／２０００→２２００

「バトル。ザ・ヒートでダイレクトアタック。」

「罠カードオープン攻撃の無力化！戦闘を無効にしバトルフェイズを終了させるよ。」

防がれたか。そうこなくちゃ。

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン、ドロー・・・！きた～！俺はＤ・スコープンを召喚！」

ＡＴＫ／８００

「スコープンが攻撃表示のとき１ターンに１度手札からＬｖ４以下のディフォーマーを特殊召喚できるんだ。俺は手札からＤ・ビデオンを特殊召喚！」

ＡＴＫ／１０００

「俺はＬｖ４のビデオンにＬｖ３のスコープンをチューニング！」

来るね、龍亞のエースモンスターが。

「世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！シンクロ召喚！愛と正義の使者パワー・ツール・ドラゴン！」

ＡＴＫ／２３００

遂にでてきたか。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！１ターンに１度装備魔法を１枚ランダムに手札に加えることができるんだ。パワーサーチ！。」

デュエルディスクがランダムにカードを１枚選び出す。

「きたー！俺は装備魔法ダブルツールＤ＆Ｃをパワーツールドラゴンに装備！このカードは自分のターンのみ装備モンスターの攻撃力を１０００ポイントアップされる。」

ＡＴＫ／２３００→３３００

「バトル！パワー・ツール・ドラゴンでザ・ヒートに攻撃！この時ダブルツールＤ＆Ｃの効果も発動！装備モンスターが攻撃する時、攻撃対象モンスターの効果は無効化される。」

「な！」

ＡＴＫ／２２００→１６００

「クラフティブレイク！」

駆　ＬＰ３８００→２１００

「どうだ！これでもう俺の勝ちじゃん！」

「龍亞調子のりすぎ。とにかくターンエンド？」

「うん、エンドエンド。」

パワーツールドラゴンＡＴＫ／３３００→２３００

「じゃあいくよ。俺のターン、ドロー。」

よし！このターンで終わらせる。

「俺は手札から融合を発動！場のフォレストマンと手札のバブルマンを融合、Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺｅｒｏを融合召喚。」

ＡＴＫ／２５００

「攻撃力２５００！？」

「バトル！Ｚｅｒｏでパワーツールに攻撃。フリージングアッドモーメント！」

龍亞ＬＰ２９００→２７００

「くっ！でもパワーツールドラゴンは装備された装備魔法を墓地に送ることで破壊をまぬがれる。」

「でもこれでパワーツールに装備されている装備魔法はなくなった！リバースカードオープン！速攻魔法マスクチェンジ。」

「「マスクチェンジ？」」

「マスクチェンジは自分フィールド上のＨＥＲＯと名のついたモンスターを墓地に送り、墓地に送ったモンスターと同じ属性のＭ・Ｈ

ＥＲＯと名のついたモンスターを１体エクストラデッキから特殊召喚する。あらわれろＭ・ＨＥＲＯヴェイパー！」

ＡＴＫ／２４００

「さらに墓地に送ったアブソルートＺｅｒｏの効果！Ｚｅｒｏがフィールド上を離れた時、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する。」

「あ！パワーツールドラゴンが。」

「これで龍亞のフィールド上には何もない。ヴェイパーとバーストレディでダイレクトアタック！」

「うわぁぁー！」

龍亞　ＬＰ０

ふぅ～、危なかった。良かった勝てて。

「うぅ、負けちゃった。」

「でも、龍亞も強いじゃん。まだまだ強くなれると思うよ。」

「本当！？よーし！もっと強くなっていつか駆を倒してやる！」

「もう龍亞ったら。でも駆強いのね。」

「龍可もやる？」

俺とすれば龍可がどんなデッキか見てみたいんだよね。

「ん～、普段はあんまりやらないけど今日はやるわ。」

「じゃあ、早速やろうか。」

「うん。」

こうして双子との２連戦２試合目ｖｓ龍可が幕をあける。

## 第２話　駆の初デュエル！ｖｓ龍亞（後書き）

どうだったでしょうか。

次は駆ｖｓ龍可です。龍可のデッキどうしよう・・・。

では、更新頑張ります。何か間違いがあったら教えてください。感想も待ってます。

## 第3話　天才少女の実力（前書き）

予告通り駆ｖｓ　龍可です。

龍可のデッキが原作とは違うのでご注意下さい。

それでは本文をどうぞ。

## 第3話　天才少女の実力

駆side

「「決闘！」」

駆　ＬＰ４０００
龍可　ＬＰ４０００

龍亞との決闘から数分後、俺が龍可とやりたいということもあり今から龍可との決闘です。ありゃ、今回は俺が先行ですか。

「俺のターン！」

さて、龍可のデッキがどういうデッキかわからない以上このターンは様子見だな。

「Ｅ・ＨＥＲＯワイルドマンを守備表示で召喚。」

野蛮人みたいな男が現れ、守備態勢になった。

ＤＥＦ／１６００

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

「私のターン。」

さぁ、どんな戦術でくる。

「私はフィールド魔法古の森を発動するわ。ここで争うことは許されない！」

あたりがいっきに森に変化した。

「古の森の効果でワイルドマンは攻撃表示になるわ。」

ＤＥＦ／１６００→ＡＴＫ／１５００

「私はマシュマロンを守備表示で召喚するわ。」

ＤＥＦ／５００

戦闘で破壊されないモンスターか。やっかいだな。

「カードを3枚伏せてターンエンド。」

いきなり3枚も伏せたか。何を仕掛けてるんだか。

「俺のターン。」

ここは迂闊に攻撃はできない。守りに専念しよう。

「Ｅ・ＨＥＲＯクレイマンを守備表示で召喚。」

いかにも頑丈そうなヒーローが現れた。

ＤＥＦ／２０００

「そしてワイルドマンを守備表示に変更。」

ＡＴＫ／１５００→ＤＥＦ／１６００

「これでターンエンド。」

「エンドフェイズに永続罠シモッチの副作用を発動するわ。」

げ、あのカードは。

「私のターン、私は手札から魔法カードソウルテイカーを発動するわ。このカードは相手モンスター１体を破壊し、相手は１０００ポイント回復するカードよ。でも回復する効果はシモッチの副作用で逆になる。私はクレイマンを破壊するわ。」

クレイマンが破壊された・・・。

駆　ＬＰ４０００→３０００

「さらに魔法カード成金ゴブリンを発動するわ。私はカードを１枚ドローし、相手は１０００ポイント回復する。けど・・・。」

「わかってる。言わなくていい。」

駆　ＬＰ３０００→２０００

「私はこれでターンを終了するわ。」

「俺のターン。」

よし！いいカードを引いた。

「俺は速攻魔法サイクロンを発動。シモッチの副作用を破壊！」

「そんな。」

まだ３枚伏せられてるけどここは攻める！

「手札から魔法カード戦士の生還を発動。墓地の戦士族モンスター１体を手札に加える。俺はクレイマンを手札に加える。そして融合を発動。手札のクレイマンとスパークマンを融合しＥ・ＨＥＲＯサンダージャイアントを融合召喚。」

雷を身にまとったＨＥＲＯが現れた。

ＡＴＫ／２４００

「サンダージャイアントの効果発動。１ターンに１度手札を１枚捨てることで元々の攻撃力がこのカードの攻撃力より低いモンスター１体を破壊する。俺はマシュマロンを破壊する。」

「きゃあ。」

これで龍可の場にモンスターはいなくなった。伏せカードが気になるし古の森もあるけどここは・・・。

「ワイルドマンを攻撃表示に変更。」

ＤＥＦ／１６００→ＡＴＫ／１５００

「バトル！サンダージャイアントでダイレクトアタック。ボルテッ

クサンダー！」

「リバースカードオープン、攻撃の無力化。」

やっぱりそう簡単にとおさせてはくれないか。

「俺はこれでターンエンド。」

「私のターン、手札から魔法カード天空の宝札を発動。手札から天使族・光属性モンスターを除外してカードを2枚ドローする。私は手札の大天使クリスティアを除外し2枚ドローするわ。」

クリスティア！？まさか龍可のデッキってシモッチバーンと天使が組み合わさってるデッキ！？たちが悪すぎるよ。

「私はコーリング・ノヴァを守備表示で召喚。そしてフィールド魔法天空の聖域を発動。これでターンエンド。」

森が消え、変な城が現れた。

ＤＥＦ／８００

「俺のターン。」

サンダージャイアントの効果でコーリング・ノヴァを破壊したいところだが、この手札は使いたくない。しょうがないか。

「バトル！ワイルドマンでコーリング・ノヴァを攻撃。ワイルドスラッシュ！」

ワイルドマンがコーリング・ノヴァを切り裂いた。

「コーリング・ノヴァの効果で英知の代行者マーキュリーを特殊召喚。」

ＤＥＦ／１７００

なんだこいつは？ともかく何故このタイミングでだした？まだサンダージャイアントの攻撃が残ってるのに。

「サンダージャイアントでマーキュリーに攻撃。ボルテックサンダー！」

「罠カード炸裂装甲を発動するわ。」

「げ、サンダージャイアントが。」

サンダージャイアントが破壊された。ワイルドマンだけじゃ次のターンまでもつかわからない。仕方がないこの手札はまだ使いたくなかったけど。

「手札からミラクルフュージョンを発動。墓地のクレイマンとスパークマンを除外し融合！Ｅ・ＨＥＲＯＴｈｅシャイニングを融合召喚！」

説明しにくい光のヒーローが現れた。

ＡＴＫ／２６００

シャイニングの攻撃力は除外されているＥ・ＨＥＲＯの数１体につ

き３００ポイント攻撃力がアップする。除外されているＥ・ＨＥＲＯは２体。よって攻撃力が６００ぽいんとアップ！」

ＡＴＫ／２６００→３２００

「これでターンを終了する。」

「私のターン。」

これなら持ちこたえられるはず。

「スタンバイフェイズにマーキュリーの効果発動。相手のエンドフェイズに手札が０枚だった場合、カードをさらに１枚ドローする。」

なっ、あいつってそんな効果持ってたの！？

「マーキュリーをリリース、天空騎士パーシアスをアドバンス召喚。」

天使か騎士かわからないやつがでてきた。

「バトル、パーシアスでシャイニングに攻撃。」

え？パーシアスより攻撃力の高いシャイニングに攻撃！？まさか手札にあれが・・・。

「ダメージステップに手札からオネストを捨てパーシアスの攻撃力をシャイニングの攻撃力分アップさせます。」

やっぱり。

ＡＴＫ／１９００→５１００

駆　ＬＰ２０００→１００

「罠カードオープンヒーローシグナル。モンスターが戦闘によって破壊されたときデッキからＬｖ４以下のＥ・ＨＥＲＯを特殊召喚できる。俺はＥ・ＨＥＲＯフォレストマンを守備表示で特殊召喚。」

体半分が木になっている男が現れた。

ＤＥＦ／２０００

「さらにシャイニングの効果発動。このカードがフィールド上から墓地に送られた時、除外されているＥ・ＨＥＲＯを2体まで手札に加えることができる。俺はクレイマンとスパークマンを手札に加える。」

「私もパーシアスの効果発動。このカードが戦闘ダメージを与えたときカードを1枚ドローする。これでターンを終了するわ。」

まずい。俺のライフはあと１００。たいして龍可のライフは４０００のまま。こっから逆転できるのか？でも、やるしかない。

「俺のターン！」

よし！これなら。

「スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。デッキから融合を手札に加える。そして融合を発動。手札のクレイマンとネクロ

ダークマンを融合。Ｅ・ＨＥＲＯエスクリダオを融合召喚。」

今度は闇を身にまとったＨＥＲＯが現れた。

ＡＴＫ／２５００

「エスクリダオの攻撃力は墓地のＥ・ＨＥＲＯ１体につき１００ポイント攻撃力がアップする。墓地のＥ・ＨＥＲＯは４体よって４００ポイント攻撃力がアップする。」

ＡＴＫ／２５００→２９００

「罠カードオープン激流葬。」

「なっ。」

フィールド上のモンスターがすべて流されていった。

「くそっ、なら俺はＥ・ＨＥＲＯスパークマンを召喚。」

なんとも説明しづらい光のＨＥＲＯが現れた。

ＡＴＫ／１６００

「バトル！スパークマンでダイレクトアタック。スパークフラッシュ！」

「きゃあ。」

龍可　ＬＰ４０００→２４００

やっと龍可のライフを削れた。でも次のターンを耐えれるかな。

「俺はこれでターンを終了する。」

「私のターン。私は次元合成師を召喚。」

銀色の服を身にまとった男が現れた。

ＡＴＫ／１３００

「次元合成師の効果発動。１ターンに１度デッキの１番上のカードを除外し、攻撃力をエンドフェイズまで５００ポイントアップさせる。」

ＡＴＫ／１３００→１８００

「バトル、次元合成師でスパークマンを攻撃。」

駆　ＬＰ１００→０

負けたか、さすがは天才少女ってところかな。

「強いね龍可。」

「ありがとう。そういう駆も強いね。」

「そう？今のデュエル龍可が主導権握りっぱなしのうえにダメージ与えれたのが最後のダイレクトアタックのみだったんだよ。」

「でも、エスクリダオを召喚されたときは正直あせったわ。激流葬がなければ負けてたもん。でも楽しかった。」

「俺も楽しかった。またしてくれる？」

「喜んで。」

「その前に俺もしたい！」

「龍亞もまたやろうね。」

「うん。」

「じゃあそろそろお昼にしましょう。」

「そうだね、腹もへってきたし。」

こうしてこの世界での生活が始まった。しかし、龍可が原作より強いのは気のせいか？

## 第3話　天才少女の実力（後書き）

いかがでしたか。龍可の口調に自信がないんですが・・・。

龍可が一応メインヒロインなのでもうちょっと強くしようということで変えてみました。

でもちょっと強くなりすぎたような気がします。

それでは何かいたらないことがありましたらご指摘お願いします。

感想も待ってます。

## 第４話　大会準備　原作崩壊！？（前書き）

今回はデュエルはありません。そしていろいろと話が飛びます。

それではどうぞ。

## 第４話　大会準備　原作崩壊！？

駆ｓｉｄｅ

この世界に来てから１カ月がたった。その間、たった２日だけだったけど龍可たちの両親が帰ってきた。両親は最初は驚いてたけど、すぐに認めてもらえた。つまりここに住んでもいいことになった。理由としては２人がなついているからと、龍可たちの話を聞く限り悪そうな人じゃないからしい。その代わりに２人の世話係を頼まれた。俺とすれば住めるところがあるだけで十分なので快く引き受けた。

そして今は龍可と２人で家にいる。龍亞は友達の天兵という人と一緒に遊びに行っている。で、龍可とデュエルしているのだが。

「はぁ、また負けた。」

そう。龍可が強いんです。今まで１１勝２０敗と大きく負け越してるんです。だってクリスティアだされたら融合が使えなくなるので相性が悪いんです。ちなみに龍亞との対戦は１３勝２敗と大きく勝ち越している。そして龍可と龍亞の対戦は俺が見た限りでは龍可の８戦全勝といっつも龍可が勝っている。

「でも激戦だったじゃない。」

「あはは、でも楽しかった。」

「私も、駆とやるとすっごく楽しい。」

龍可に笑顔がこぼれる。そういえば原作で龍可のこんな顔あんまり見てないなぁ。

「5時か。そろそろご飯つくらなきゃ。」

「あ、今日は私も手伝うわ。」

ご飯はたいてい俺が作るけど、龍可も今日みたいに手伝ってくれたり1人で作ることもある。龍可も料理がうまいからね。

そうしてご飯が出来上がったころ龍亜が帰ってきた。

「ただいま～。2人に手紙が届いてるよ。なんかの大会の招待状みたいだけど。」

「え？」

俺にも？おそらくはあの大会のことだろうけど。手紙を開いてみると案の定。

「「フォーチュン・カップ？」」

フォーチュン・カップの招待状だった。龍可はともかくどうして俺にまできてるんだろう。ま、参加するけどね。

「優勝者はキングと対戦できるんだ～。いいなぁ。おれもでたい！」

残念ながら龍亞は招待されてないんだよね。でもおそらく・・・。

「駄目よ龍亞。これは私と駆に来てるんだから。」

「え？もしかして龍可出るの？」

「うん。たまには参加してもいいかなって。それに駆と一緒だし。」

あれ～、龍可が出る気まんまんだし。完全に原作崩壊してない？それも絶対俺のせいだよね。

「駆ももちろんでるよね。」

「あ、うん。」

「ちぇっ。まぁいいや。2人とも頑張って。俺応援するから。」

「うん。それよりご飯食べよ。さめちゃうよ。」

「そうね。」

それから晩飯を食って1人ずつ風呂に入ってしばらくして寝る・・・はずだった。

ガッシャーン！

「何か今変な音しなかった？」

「うん。」

「行ってみる？」

「そうだね。」

俺たちは音のした方へ向かった。あれ？これってもしかして・・・。

「あそこに誰か倒れてるよ。」

うん、どう見ても原作主人公の遊星です。ということは原作開始か。

「意識がないな。」

「どうする？」

「とりあえず俺たちの家に運ぼう。」

「そうだね。」

それから遊星と遊星が乗っていたDホイールを運んだ。それから遊星は明日には目を覚ますだろうということでそのまま寝た。

次の日、遊星は起きそのまま俺がいるってこと以外ほとんど原作通りに進んだ。

（詳しくは５Ｄ，ｓ１３話を見てください。）

それから数日がたち、

「今日がフォーチュン・カップ開催の日だよね。」

「うん。」

「準備はいい？」

「いいわよ。」

「じゃあ行きますか。」

「うん。」

ということで途中遊星たちと合流し、大会が開催されるスタジアムへ向かい開会式の準備をしている。

今はスタジアムの地下で大会に出る俺と龍可、遊星と待機中だ。

「しかし緊張するな。こんな大舞台でデュエルするの初めてだし。」

「私も久しぶりだから緊張する。」

前の世界じゃこんな大勢人がいる前でデュエルとかしなかったもんなぁ。

「俺は楽しみだな。２人がどんなデッキを使うのか。」

さすが遊星だな。こんなときに緊張すらしてない。

「そろそろだな。」

それから開会式がおこなわれた。この後、１回戦のカードが発表されたんだが、

第１試合　山岸駆ｖｓエックス

第２試合　不動遊星ｖｓボマー

第３試合　十六夜アキｖｓ来宮虎堂
第４試合　龍可ｖｓフランク

原作からかなり変わってるな。だいたい俺の対戦相手のエックスって誰？聞いたことないぞ。そして龍可はいきなりフランク戦、そして遊星とアキは原作では準決勝で当たる相手じゃん。どんだけ変ってるんだよ。

「駆は第１試合だね。頑張って。」

「うん。頑張るよ。」

こうしてフォーチュン・カップが開幕した。

## 第４話　大会準備　原作崩壊！？（後書き）

どうでしたか？

次回は駆ｖｓエックスです。

それではご指摘やご感想お待ちしています。

## 第５話　ＨＥＲＯの絆　デッキ破壊を打ち破れ！（前書き）

今回は駆ｖｓエックスです。

すでに予想してた方もいましたがエックスはＧＸでててきたあのエックスです。デッキは少々異なるうえに口調がおかしいと思いますがご了承ください。

ではどうぞ。

## 第5話　ＨＥＲＯの絆　デッキ破壊を打ち破れ！

龍可ｓｉｄｅ

「デッキ破壊？」

私は今控室にいる。隣で駆が開幕戦のデュエルの準備をしている。近くには遊星と氷室さんがいる。あ、氷室さんは遊星の仲間ね。そして氷室さんが俺の対戦相手のことを話しているところよ。

「あぁ。奴はデッキ破壊で、しかも奴とデュエルした人はデュエルをする気力を失うという噂を聞いたことがある。どちらにしろやっかいな相手だな。」

デッキ破壊かぁ。嫌な相手ね。

「はぁ、面倒な相手だな。」

「だが、相手は元プロだ。気を引き締めてかかれよ。」

「うん。情報ありがとう氷室さん。」

「あぁ。お前のデュエル楽しみにしている。じゃあ俺は客席で見ている。頑張れよ。」

そう言って氷室さんは客席に行った。

「さぁていきますか。」

「頑張ってね。」

「うん。」

「・・・大丈夫かな駆。」

「さぁな。でも俺も駆のデュエルは楽しみだ。」

頑張って。駆。

駆ｓｉｄｅ

俺は今スタジアムの地下でコールされるのを待っている。

しかし相手はデッキ破壊か・・・面倒だな。ん？デッキ破壊のエックス？アニメで聞いたことがあるようなないような。気のせいか。

（実際にＧＸでてます。詳しくはＧＸ第７２話を見てください。）

ＭＣがなんごちゃごちゃ言ってるからそろそろ出番かな。

「さぁ、このフォーチュン・カップの記念すべき開幕戦を戦う２人のデュエリストを紹介しよう。まず１人目は年齢はまだ１２歳。ゴドウィン長官から直々に選ばれたその実力はどれほどのものか～！？、山岸駆～！」

いやいや、全員ゴドウィンが選んだんじゃないのか？まぁいいや。

コールを受けて俺はデュエルフィールドへと向かう。

しかしこんな大勢の観客の目の前でデュエルするの！？緊張するなぁ。

「対する2人目のデュエリストは恐怖のデッキデス使い、エックス～！」

MCのコールにエックスという人も上がってきた。

「君が駆くんか。悪いけどこのデュエルが終わった後あなたは2度とデュエルできなくなる。精々最後のデュエルを楽しむんだな。」

いきなり何言ってるんだこいつ。そういえば氷室さんが言ってたなぁ。こいつとデュエルした人はデュエルする気力を失うって。でもそう簡単に気力って失われるものなのか？まぁいいや。

「そう簡単には負けませんよ。」

「ほざけ。」

「さぁ開幕戦の始まりだ！」

さぁいくぜ！

「「決闘！」」

駆　ＬＰ４０００

エックス　ＬＰ４０００

「先行は私だドロー！」

ついに始まった。

「私はモンスターを裏側守備表示でセット。さらにカードを４枚伏せてターンエンド。」

いきなり４枚も伏せやがったよ。まぁ、デッキ破壊なら無理ないか。

「俺のターン、ドロー。」

でも４枚も伏せるか？もしかしてあのモンスターはメタモルポットか？なんにしろデッキ破壊に長期戦は禁物。ここは攻めるぜ。

「俺は手札から融合を発動。手札のフェザーマンとバーストレディを融合。Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマンを融合召喚！」

ＧＸでおなじみの十代の初期のフェイバリットが登場した。

ＡＴＫ／２１００

「さらにカードを２枚伏せる。バトル！フレイムウィングマンで裏守備モンスターを攻撃。フレイムシュート！」

出てきたモンスターはメタモルポットだった。予想大当たりかよ。

ＤＥＦ／６００

龍の顔みたいなところからでた炎がメタモルを焼き尽くした。ってお前風属性だよな。なんで炎だしてんだよ。

「フレイム・ウイングマンの効果発動。戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。」

「くっ。」

エックス　ＬＰ４０００→３３００

「だがメタモルポットの効果発動。お互いの手札をすべて捨て、その後お互いにカードを５枚ドローする。」

「俺はさらにカードを２枚伏せてターンエンドだ。」

何気に俺もカード４枚伏せてるし。まぁいっか。

「私のターン、私は手札断札を発動。お互いに手札からカードを２枚捨て、２枚ドローする。」

手札交換カードか。妥当だな。

「さらに私は二重召喚を発動。このターン私は２回通常召喚できる。私は２体モンスターをセットさらに魔法カード手札抹殺を発動。」

始まったな。デッキ破壊の真骨頂が。

「さらに伏せていた魔法カード太陽の書を発動。セットモンスターを表にする。セットモンスターはニードルワームだ。ニードルワームの効果で相手はデッキの上からカードを５枚墓地に送る。さぁ、墓地に送ってもらおうか。」

ＡＴＫ／７５０

くっ、わかってたけどデッキ破壊はうざい。超うざい。

「さらに墓地のＡＤチェンジャーの効果発動。このカードを除外することでフィールド上のモンスターの表示形式を変更する。私はもう1体のセットモンスターを表にする。まぁニードルワームだがね。」

またかよ。気持ち悪い。

「ニードルワームの効果発動。デッキの上から5枚墓地に送ってもらおうか。さらにリバースカード皆既日食を発動。フィールド上のモンスターをすべて裏側守備表示にする。」

「なっ。」

これってまだ続くパターン？やばくない？

「さらに墓地の2枚のＡＤチェンジャーの効果発動。2枚のニードルワームを表に。ニードルワームの効果で１０枚デッキの上から墓地に送ってもらおう。」

やばい！俺のデッキ枚数が。

「さらにリバースカード皆既日食！2枚のニードルワームを裏に。そして手札から2枚の太陽の書を発動。」

なっ。なんでそう都合よく手札にあるかなぁ。それはともかく本当にやばい。

「2枚のニードルワームを表に。リバース効果でデッキからカードを１０枚墓地に送ってもらおう。これでお前のデッキはすべてなくなった。さらにエンドフェイズに皆既日食のもう1つの効果を発動。

相手フィールド上のモンスターをすべて表にし、表になったモンスターの数だけ相手はドローする。しかしお前のデッキは0だ。ドローできないから私の勝ちだ。どうだね、デッキをすべて墓地に送られた気分は？はっはっは。」

・・・なんか勝手に勝利宣言してるけど。

「ねぇ。」

「うん？何だね？敗者はとっとと消えてほしいのだが。」

「勝手に勝った気分でいますけど、まだ俺のデッキ2枚残ってますよ。」

「何！？まさかお前。」

「今の戦略４０枚デッキが相手だと確かに終わりです。けど俺のデッキはあいにく４６枚だったんですよ。」

「ちっ！まぁいい。皆既日食の効果でカードをドローするからお前のデッキはのこり1枚。次のターンでお前は終わりだ。」

まだ勝った気分でいるみたい。決めた。こいつ潰す。完膚なきまで叩き潰してやる。

「次のターンがくればいいですけどね。俺のターン！」

うわぁ、最後に残ってたのこいつだったんだ。俺の勝つ確率が上がったな。

「俺は伏せていた魔法カードサイクロン発動。お前の残っている伏せカードを破壊する！」

伏せカードは攻撃の無力化だった。これで墓地で発動するモンスターがいないかぎり俺の勝ちだな。

「俺は墓地のネクロダークマンの効果を発動。このカードが墓地にあるとき、１度だけＥ・ＨＥＲＯをリリースなしで召喚することができる。俺は手札からＥ・ＨＥＲＯエッジマンを召喚。」

金色の体をしたモンスターが現れた。

ＡＴＫ／２６００

「さらに手札から融合を発動。手札のバブルマンとザ・ヒートを融合。Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺｅｒｏを融合召喚。」

氷をまとったヒーローが現れた。

ＡＴＫ／２５００

「さらに伏せカードオープン。ミラクルフュージョンを発動。」

「何だと！」

「このカードは場または墓地から融合素材を除外し融合召喚する。俺は墓地のクレイマンとエアーマンを除外し融合。Ｅ・ＨＥＲＯガイアを融合召喚。」

今度は土をまとったヒーローが現れた。

ＡＴＫ／２２００

「ガイアの効果発動。このカードが融合召喚に成功したとき、相手フィールド上のモンスター１体の攻撃力を半分にし、ガイアの攻撃力をエンドフェイズまで下げた数値分アップする。」

ニードルワーム　ＡＴＫ／７５０→３７５
ガイア　ＡＴＫ２２００→２５７５

うわぁ。ガイアが凄い中途半端な数字に。でもまだまだいくよ。

「俺は伏せていた２枚目のミラクルフュージョンを発動。場のアブソルートＺｅｒｏと墓地のスパークマンを除外し融合。Ｅ・ＨＥＲＯＴｈｅシャイニングを融合召喚。」

今度は光を身にまとったヒーローが現れた。

ＡＴＫ／２６００

「Ｚｅｒｏの効果発動。このカードがフィールドを離れた時、相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する。」

「何っ！」

「さらにシャイニングの攻撃力は除外されているＥ・ＨＥＲＯ１体につき攻撃力が３００ぽいんとアップする。除外されているＥ・ＨＥＲＯは４体。よって１２００ポイント攻撃力アップ！」

ＡＴＫ／２６００→３８００

「さらに最後のリバースカードオープン。装備魔法団結の力をエッジマンに装備。」

ＡＴＫ／２６００→５０００

「３体で直接攻撃。」

「うわぁぁぁぁぁ。」

エックス　ＬＰ３３００→０

「決まったーっ！残りデッキ枚数１枚からの逆転勝利！開幕戦を勝利したのは山岸駆だー！」

我ながらすごいオーバーキルだったな。総攻撃力１１３７５、８０７５のオーバーキルだ。やりすぎたかな？

龍可ｓｉｄｅ

「凄い。」

私はそうつぶやいた。だって残りデッキ１枚からの逆転勝利よ。やっぱり駆は強いわ。

「そうだな。俺もあいつと対戦するのが楽しみになってきたな。」

隣で遊星がデュエルの準備をしている。そっか、次は遊星の番だったわね。遊星はＤホイールを持っているからライディングデュエルになるのかな。

と、そこに控室の扉が開いて駆が入ってきた。

「お疲れ、駆。」

「うん。勝ってきたよ。」

「凄いね駆。あの状況から勝つなんて。」

「いやぁ、あれはたまたま手札がよかっただけだよ。」

「それも駆のデッキが応えてくれたということだろう。」

「遊星・・・、うんそうかもね。」

絶対そうだと思う。駆がデッキを信じた結果だと私は思う。

「次は遊星の番だね。頑張ってね。」

「あぁ。そろそろ行ってくる。」

そう言って遊星は控室から出て行った。

「遊星のデュエル楽しみだね。」

「うん。」

なんか今からが楽しみだなぁ。

## 第5話　ＨＥＲＯの絆　デッキ破壊を打ち破れ！（後書き）

いかがでしたか？

次回は第２、第３試合は飛ばして第４試合龍可ｖｓフランクになると思います。

それと明日から本格的にテストが始まるので更新がちょっと止まると思います。

それではご指摘やご感想お待ちしています。

## 第６話　遊星とアキの戦い　そして天才少女出陣！（前書き）

テスト期間中だというのに更新しました。

それではどうぞ。

## 第6話　遊星とアキの戦い　そして天才少女出陣！

駆side

俺は今龍可と一緒に控室にいる。スタジアムでは第2試合遊星vsボマーの真っ最中だ。まぁ、もう終わるがな。

「パワーギア・フィスト！」

「ぐぉぉぉぉ！」

ボマー　LP0

「遂に決着！1回戦第2試合、この激戦を勝ち抜いたのはサテライトの流れ星、不動遊星だー！」

「遊星も勝ったわね。」

「うん。さすがだな。」

最後は本当にチートドローだったな。遊星の最後のターンを簡単に説明すると手札0、場がジャンク・シンクロンだけのときにチューニング・サポーターを引き召喚してシンクロ、アームズ・エイドを出す。チューニング・サポーターの効果でドロー、その引いたカードを使用してジャンク・ウォリアーを召喚。アームズエイドをジャンク・ウォリアーに装備して相手モンスターに攻撃。

流れはこんな感じだ。本当にチートドローですね。さすが主人公。

「遊星・・・、見事だった。私の完敗だ。」

「え？ボマーさんの声？」

始まったな。ボマーの復讐が。

「私は負けた。だが、私の使命は終わってはいない！」

「え！？」

みんな驚いてるね。

「私はこの大会に優勝し、式典でゴドウィンが行った事実を公にするつもりだった。だが、今になってはそれは叶わぬ夢・・・ならば、この場で復讐を果たすまで！」

「復讐？」

「これを見よ！無に帰した我が村を！」

モニターにとある村が写し出された。これがボマーの故郷・・・。

「これが私の村だ！故郷だ！ゴドウィンは赤き龍を復活させようと我が村を実験材料にした・・・。そして私の村は・・・。」

そこまで言った瞬間村が大爆発を起こし、村が一瞬にして焼け野原となった。ひどいな・・・。

「村人全員が行方不明。その中に私の姉弟もいた。」

「それじゃあ、お前の姉弟は・・・。」

「遊星、ジャック！奴を信じるな！ゴドウィンに赤き龍を渡してはならない！」

そう言ってボマーはＤホイールに乗り、アクセルを回した。

「ボマー！？」

「奴とはこの俺が決着をつける！この悲しみを２度と繰り返さないために！」

ボマーはコースの傾斜を利用してゴドウィンのいるところへ飛んだ。このままいくとおもいきや、遊星が同じように飛びボマーと衝突した。

そしてあとには、

「あああああー！」

ボマーの叫び声が木霊するだけだった・・・。

その後、ボマーはセキュリティによって連行され、スタジアムでは第３試合アキｖｓ虎堂のデュエルが始まっていた。俺と龍可、それから遊星は控室で龍可のデッキ調整を手伝いながらその試合を見ていた。

のだが・・・。

「罠カードカース・オブ・ローズを発動。相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力が変化したとき、変化した数値分のダメージを相手に与える。・・・やれ。」

「ぐわぁぁぁぁ！」

虎堂　ＬＰ０

「決着！早く救護班を！」

「何今の！？」

龍可はびっくりしてるね。それもそうか、あんなものを見せられたらね。あ、アキのサイコパワーのことね。

「遊星。」

「何だ？」

「彼女のカードをどう見た？」

「拒絶と怒りと・・・、だがまだ何かが潜んでいる。」

「そっか。」

アキとはあたりたくないなぁ・・・。それはそうと次は龍可の番。原作とは大きくデッキが異なる龍可だけど、フランク相手にどう戦うかな？それとも原作通りになってしまうのかな。

「次は龍可だね。頑張れ！」

「自分のデッキを信じろ。そうすればデッキはおのずと応えてくれる。」

「う、うん。わかった。頑張る。」

そう言って龍可は控室を出た。

「龍可大丈夫かな。」

「まだ小学生だからな。緊張するのは当然だろう。それより龍可のデッキはどういうデッキなんだ？」

「基本的には天使デッキだよ。ちょっとシモッチバーンがはいってるけど、すっごく強いよ。」

「そうか楽しみだな。」

さぁ、天才少女出陣！てか。

龍可ｓｉｄｅ

いよいよ私の番。駆も遊星も勝ったんだし、私も勝たなきゃ。・・・緊張するなぁ。

「さぁいよいよ1回戦もこれが最後の試合だー！第４試合、まず１人目は参加最年少、舞い降りたデュエルの天才少女、龍ー可ー！」

何か勝ってに名前がのばされてる・・・、しかも天才少女って・・・。私そんなんじゃないのに。

と思いつつも私はデュエル場に上がる。

「対するは、デュエルカウンセラーの異名を持つプロフェッサーフランク！」

反対側から私の対戦相手フランクさんが出てきた。

「初めまして龍可さん。」

「は・・・はぁ。」

「さぁ、このデュエルであなたの深層意識に隠された本当のあなたを見つけましょう。」

な、なんなのこの人？なんか嫌な感じ。そんな気持ちの中、

「クリリン…。」

クリボン・・・あなたも嫌な感じがするのね。

私はデュエルディスクを起動させた。

「「決闘！」」

龍可　ＬＰ４０００

フランク　ＬＰ４０００

このデュエルさっさと終わらせよう・・・。じゃないと嫌な予感がする。

「私のターン、ドロー、」

でも手札が悪い。ここは様子見しかない。

「私はシャインエンジェルを守備表示で召喚。」

頭に輪がある天使が現れた。

ＤＥＦ／８００

「カードを１枚伏せてターン終了。」

「私のターンです。ドロー、私はシンメトリー・ロールシャッハを攻撃表示で召喚。」

蝶々のような像が現れる。

ＡＴＫ／１２００

「あなたはロールシャッハテストというのはご存じですよね。」

何それ・・・。

「このモンスターをどのように感じるかによってあなたの抱える心配、不安、問題を解き明かすための手掛かりを得るための心理テストです。さぁ、龍可さん、あなたにはこのモンスターは何に見えますか？」

何なのこの人？そんなことといきなり言われても・・・。

「あなたは何に見えます？さぁ答えてください。」

「何って・・・。」

「さぁさぁ、何に見えます？」

ていうかデュエル中にこんなことしててていいの？と思った瞬間シンメトリー・ロールシャッハが形を変え、シャインエンジェルのような形になった。

「よ、妖精？」

すると突然シンメトリー・ロールシャッハの顔が怖い顔になった。

「スパイラル・マインド」

オーラのような物が流れてきたと思えば、シャイン・エンジェルが破壊されていた。

「え？」

「フフフ・・・、これはあなたが心の奥底で恐れていたものを露わにするものだったのです。あなたは妖精や精霊を恐れている。違いますか？」

「そんなことは・・・。」

いったい何なの？

「大丈夫ですよ、このデュエルであなたが抱えていた悩みを解き明かし、解放してあげましょう。」

だから何なの！？私に悩みなんて・・・。

「そのためにも勇気を持ってあなたの深層意識に住むもう1つの世界・・・デュエルモンスターズの精霊世界へと旅立っていくのです。」

「デュエルモンスターズの精霊世界？」

「知っていますよ、あなたは精霊の言葉を感じることができる。」

な！ど、どうしてそのことを。このことは龍亞と駆しか知らないはずなのに。

「だったら、デュエルモンスターズの精霊世界があったって不思議じゃないでしょう。」

そんな世界があるなんて・・・。

「シンメトリー・ロールシャッハの効果発動。相手モンスターを破壊した時、相手のデッキの1番上のカードを表向きにすることができる。ピーピング・マインド。」

デッキの1番上のカードを表向きにする。でてきたのは、

「クリリン。」

クリボン・・・。あなただったのね。

「可愛い精霊のカードですね。もしや、その子の声も聞こえてるんじゃないですか？」

確かに私は精霊の声を聞くことができる。でも・・・、と、その前にやることが。

「シャインエンジェルの効果発動、シャインエンジェルが戦闘によって破壊され墓地に送られたとき、デッキから攻撃力１５００以下の光属性モンスターを１体特殊召喚できる。私はマシュマロンを特殊召喚。」

ＡＴＫ／３００

何？なにかぼんやりとしてきた・・・。

「カードを２枚伏せてターンエンドです。あなたのターンですよ。」

「私の・・ターン・・・。マシュマロンを守備表示に変更・・・。」

ＡＴＫ／３００→ＤＥＦ／５００

「クリボンを攻撃表示で召喚・・・。クリボン・・来て・・・。」

ＡＴＫ／３００

「この瞬間、リバースカードをオープン、深層へと導く光。相手はデッキから５枚カードを墓地に送り、６枚目のカードをお互いに確

認しあい、手札に加えます。このターン、そのカードをプレイしなかった場合、相手プレイヤーは２０００ポイントのダメージを受けます。さぁ、デッキからカードをめくって下さい。」

光・・・、私はぼんやりとしながらカードを引いていく。そして６枚目は・・・古の森だった。

「ほぉ・・・それはフィールド魔法、古の森ですか。全てのモンスターは攻撃表示となり、守備表示で召喚することも、守備表示に変更することも出来なくなる。攻撃を行ったモンスターはバトルフェイズ終了時に破壊される。フッフッフッ、全てをあからさまに、そして決して争う事を許さない世界、さぁ・・・デュエルモンスターズの精霊世界へ。」

そして私の意識は精霊世界へと旅立った・・・。

## 第６話　遊星とアキの戦い　そして天才少女出陣！（後書き）

どうでしたか？

遊星とアキのデュエルを詳しく見たい人はアニメ５Ｄ，ｓの第２０話から第２２話をご覧ください。

次回は龍可ｖｓフランクの決着です。そして駆も精霊世界に？

ではご指摘やご感想お待ちしています。

## 第７話　精霊世界突入！　龍可の怒り（前書き）

今回は龍可ｖｓフランクの決着です。

ではどうぞ。

## 第7話　精霊世界突入！　龍可の怒り

駆ｓｉｄｅ

龍可がフランクとデュエルを始めたばかりのころの控室。

ここには今俺と遊星しかいない。

「ちょっといいか駆？」

「何？遊星。」

「さっきから気になったがあの2人がデュエルモンスターズの精霊世界とか言っているがお前は何か知っているか？」

そのことか・・・。う～ん・・・、遊星になら言ってもいいかな。信頼できるし。

「信じられないかもしれないけど龍可はデュエルモンスターズの精霊が見えてるんだ。俺もだけど。」

「お前も？」

「うん。そしてその精霊たちが住んでいるのが精霊世界なんじゃないのかな。詳しくはまだ俺もわからないけど。」

「そうか・・・。」

困惑してるね。まぁ無理ないか・・・。

『クリクリ～。』

ん？ハネクリボー？

「どうしたの？ハネクリボー。」

「ハネクリボー？お前の言う精霊のことか？」

「うん。」

「そうか。俺には見えないが。」

そりゃそうだよね。普通の人には見えないからね。何故俺が見えるのかは疑問だが。

『クリクリー。』

ハネクリボーが指してるところを見ると、そこにはモニターが・・・って、龍可の様子が変だ。デュエル中なのにぼーっとしてる。まさか・・・。

「まさか龍可が精霊世界に行っちゃった？」

『クリクリー。』

ハネクリボーが小さく頷いた。やっぱりか・・・。

「何があった？駆。」

「龍可の精神が精霊世界に行っちゃったらしい。」

「何っ！？」

どうしようか・・・。うん？もしかしたら。

「ハネクリボー、もしかして俺も精霊世界に行ける？」

『クリクリー。』

またも小さく頷いた。だったら。

「遊星。」

「何だ？」

「遊星は龍可の様子を見に行ってくれない？俺は精霊世界に行って龍可を助けてくる。」

原作通りだったらちゃんと帰ってこれるけどこの大会はもうすでに原作なんて関係なくなってる。だから何が起こるか分からないからね。

「できるのか？」

「多分大丈夫だと思う。」

「そうか。気をつけろよ。」

「うん。ありがとう。」

「じゃあ俺はフィールドに行ってくる。」

そう言って遊星は行った。

「じゃあハネクリボー、精霊世界に案内して。」

『クリクリー』

そして俺の精神も精霊世界に流れて行った。

「・・・ここは？」

目を開けてみるとそこは暗い街・・・ってここはヒーローシティ！？ってことは来たんだね。精霊世界に。

「ようこそヒーローシティへ。」

「え？」

後ろを振り返ってみるとそこにはフェザーマンとスパークマンがいた。

「よく来てくれましたマスター」

マスターって・・・。そこは置いといて。

「ねぇ、俺龍可を探してるんだけど。どこにいるか知らない？」

「龍可？一緒に暮らしてる娘のことですか？」

「まぁそうだね。」

「その娘でしたらおそらくは森のほうにいるんじゃないでしょうか。」

やっぱり森のほうか。

「俺達も一緒に行ってもいいでしょうか？」

う～ん・・・、人数は多い方がいいかな。

「いいよ。迷惑じゃなけりゃ。」

するとヒーローシティの向こうにある森が枯れ始めた・・・。

「まずいね。急いで行かなきゃ。行くよ」

そう言って俺とフェザーマンとスパークマン、そしてハネクリボーは森の方に走り始めた。

しばらく走ると人影が見えてきた。間違いない。龍可だ。それとフランク！？何であいつが！ってあいつも来るんだったな。赤き龍のせいで。

「龍可！」

「駆！？どうしてここに？」

「どうしてって助けに来たにきまってるじゃん。」

「そうなんだ。ありがとう。」

「ほぉ～、あなたも精霊が見えるんですね。駆くんだったかな。」

「そうだよ。あなた、いったい何を企んでるの？」

「私は何も企んじゃいないよ。ただ、お前たちの、そして精霊世界の苦悶する表情を見れればそれでいいんだよ。」

な！こいつ！

「さぁ、デュエルを再開しようか。お譲ちゃん。」

な！この状況でデュエルを再開するだと！ふざけやがって！

「大丈夫よ駆。」

「龍可・・・？」

「私がそんなことさせない！絶対にこの精霊世界を守ってみせる。私のターン！」

ここでフィールドを整理しようか。

龍可　ＬＰ１２００
手札４枚
光神テテュス　ＡＴＫ／２４００

クリボン　ＡＴＫ／０
セットカード３枚

フランク　ＬＰ３６００
手札２枚
超魔神イド　ＡＴＫ／２２００
永続罠　ゲシュタルト・トラップ（クリボンに装備）
装備魔法　不死のホメオスタシス（クリボンに装備）
永続魔法　悪意の波動

テテュスがもういるだと！本気だな龍可。

「テテュスの効果発動。ドローしたカードが天使族だった場合、そのカードを相手に見せることでもう１枚カードをドローすることができる。神聖なる魂を見せてドロー、ヘカテリスを見せてドロー」

ありゃりゃ、思ったよりひかなかったね。

「だがこの瞬間不死のホメオスタシスの効果発動。クリボンの攻撃力が変わっていることにより３００ポイントのダメージを受けてもらおう。」

龍可　ＬＰ１２００→９００

「手札から魔法カード癒しの風を発動。フィールド上のモンスター１体につきライフを２００ポイント回復する。」

龍可　ＬＰ９００→１５００

「罠カード発動！妖精の風。フィールド上に表側表示で存在するこ

のカード以外の魔法カード、罠カードを破壊する。」

「何！？」

クリボンについていた首輪が破壊され、古の森も消えた。

クリボン　ＡＴＫ／０→３００

「そして互いのプレイヤーは破壊されたカード１枚につき４００ポイントダメージを受ける。」

龍可ＬＰ１５００→３００

フランクＬＰ３６００→２４００

「私はヘカテリスを召喚。」

ＡＴＫ／１５００

「そして墓地のシャインエンジェルとマシュマロンを除外し、神聖なる魂を特殊召喚。」

ＡＴＫ／２０００

決まった！これで全部の攻撃が決まれば龍可の勝ちだ。

「バトル！光神テテュスで超魔神イドに攻撃！」

「く！」

フランク　ＬＰ２４００→２２００

「神聖なる魂とヘカテリスで直接攻撃！」

「ぐわあぁぁぁ！」

フランク　ＬＰ２２００→０

やった！龍可が勝った。

「龍可。」

気づいたらエンシェント・フェアリー・ドラゴンがそこにいた。

「私はまだ捕われてる。あなたの力で私を封印した者を倒しておくれ。」

「え？それはどういう・・・」

そのまま龍可は消えていった。多分現実世界に帰ったんだろう。そしておそらく俺ももうすぐ・・・。

「駆、あなたは別のドラゴンを救っていただきたい。」

え？別のドラゴン？

「そのドラゴンのな・・・。」

そこで俺の精神は現実世界に帰っていった。

俺は控室で目を覚ました。

モニターを見ると龍可も目を覚ましたみたい。今は遊星と一緒にいる。

あ、そういえばこのとき龍亞も倒れるんじゃなかったっけ。

ま、いっか。氷室さんたちがなんとかしてるだろうし。

それにしても別のドラゴンを助ける？どういうことだ？

「白熱した大会1日目はこれで終了だ！」

おれが考えているとMCの声が聞こえてきた。

「そして明日の準決勝の対戦カードはこれだ！」

モニターに明日の対戦カードが発表される。

第1試合　不動遊星ｖｓ十六夜アキ

第2試合　龍可ｖｓ山岸駆

おれは龍可とか。まさかこの大会で龍可と対戦することになるとはね。楽しみだよ。

こうして大会第1日目が終了した。

## 第7話　精霊世界突入！　龍可の怒り（後書き）

どうでしたか？

駆が最初に行ったヒーローシティにつきましてはフォーチュンカップが終わった後にまただす予定です。

あと、テストがやっと終わったのでこれからどんどん更新したいと思います。といってもサークルとかであんまり更新できないときがあるかもしれませんが。

ということでこんな不定期更新ですがこれからもよろしくお願いします。

## 第8話　準決勝前夜　駆と龍可の思い（前書き）

今回はデュエルはありません。

初の恋愛話（？）です。

それではどうぞ。

## 第8話　準決勝前夜　駆と龍可の思い

駆ｓｉｄｅ

あれから遊星に家に送ってもらい、そのまま遊星は泊まることになった。

今は晩飯を食い終わってベランダでくつろいでいる。そこに遊星と龍可も来て3人で話している。龍亞は風呂に入っている。ちなみに3人とも風呂にはもう入っていて今日は珍しく龍亞が最後である。

「遊星は明日の準決勝は十六夜アキとだね。」

「あぁ。駆と龍可は直接対決だな。」

「うん。なんかすごく楽しみ。」

「私も凄く楽しみ。」

「そうか。」

遊星って結構無口なんだよね。口数も少ないし。

「遊星、お願いがあるんだけど。」

「何だ。」

「彼女を・・・十六夜アキを救ってほしい。」

「・・・どうしてだ？」

「彼女は・・・俺と似ているような気がするから。」

「「似ている？」」

「うん。みんなに避けられてるところがね。」

「避けられてる？私達は駆を避けたことなんてないよ。」

「・・・昔は避けられてたんだ。俺。ていうかいじめられてた。」

「「え！？」」

「だからあの人の気持ちがわかるんだ。」

「駆・・・。」

「本当だったら俺がやりたかったんだけどね。」

そう。俺はアキさんと準決勝でやりたかった。アキさんを助けるために。原作崩壊になるけど、この大会にそんなことは関係ない。

「駆、お前の気持ちはよくわかった。俺もできる限りのことはする。」

「ありがとう遊星。」

「じゃあ俺は部屋に行ってる。」

そう言って遊星は部屋に入っていった。

「駆。」

「何？龍可。」

「明日のデュエルは思いっきり楽しもう。あんな観客の前でデュエルなんてめったにないんだし。」

「そうだね。今日のデュエルは全然楽しめなかったし。明日は普段以上に楽しいデュエルになりそうだね。」

「うん。お互い頑張ろう。」

「ああ。そろそろ寝よう龍可。」

「うん。」

その時、

ドカーン！

雷が近くに落ちた。

「きゃあ！」

龍可が抱きついてきた。

「雷が怖いの？」

「うん・・・。」

やっぱり小学生だからな。雷は怖いか。それにしても今も雷は鳴ってるのに雨が全然降らないな。

「ねぇ、今日一緒に寝ていい？」

「え？・・・まぁ、別にいいけど・・・。」

「じゃあ今から行くね。」

そう言って龍可は枕をとりに部屋に戻って行った。

「・・・ま、いっか。」

そう言って俺も部屋に戻った。

しばらくして龍可が部屋に入ってきた。

俺たちはベッドを半分ずつ使い、入った。まだ雷が鳴っていたせいか、龍可はベッドに入ってからすぐに抱きついてきた。よっぽど怖いんだな。

「ごめんね駆。迷惑かけちゃって。」

「大丈夫だよ。迷惑なんて思ってないし。それに俺は龍可たちの世話係だしね。」

だけどこういうときの龍可って可愛いんだよな。だからって恋愛感情は持たないけどね。ていうかそもそも恋愛感情がどういうのか全

然わからないがな。

対する龍可はちょっとばかし顔が赤くなっていた。

「（こういうときの駆ってかなりやさしいんだよね。駆はああ言ってるけど私はかなり嬉しい。あれ？この気持ち、もしかして私、駆のこと好きになっちゃった？そ、そんなことないよね。うん気のせいだよね。よし。今日はもう寝よう。）」

そう心の中で思いながら龍可は寝た。

そしていまだに龍可に抱きつかれてる駆も龍可が寝たので、そのまま寝た。

次の日

めずらしく龍可が駆より先に起きた。

「あ、私駆の部屋で寝たんだっけ。って私、駆に抱きついて寝てたの！？」

ほんのりと顔があかくなる龍可。

その時、駆も目を覚ました。

「ん、あ、おはよう龍可。」

「お、おはよう。」

「さ、起きよう。朝飯作らなきゃ。」

「そうね。」

それからいろいろと準備し俺たちはスタジアムへと向かった。あ、朝飯はちゃんと食べたからね。

龍亞たちと別れ控室に向かう途中ばったりとアキさんと会った。

アキさんが遊星を見て右腕を押さえる。

「なぜ、忌むべき印だ？痣はお前にとって何なんだ？」

突然遊星がこうアキさんに話す。

「私はこの痣を持つ者を憎む・・・。嫌悪する。」

アキさんは目をそらしながら答える。

龍可はアキさんを見て少し悲しい表情をしている。

「ヒッヒッヒッヒ。」

不気味な笑い声が聞こえてきた。この声はイェーガーだね。

「これはこれは十六夜様。準決勝を前にゴドウィン長官が一言労いの言葉をと申しています。ご一緒して頂けますでしょうか。」

相変わらず変な口調だね。

「それは困りますね。」
アキの後ろからディヴァインとその他複数の人が現れた。
「あなたは？」
「アキの保護者・・・とでも言っておきましょうか。もっともあなたがたの方でもう調べはついているのでしょうが。」
そう言ってアキさんを連れて去っていく。
「アキさん・・・。」
「どうしたの？龍可。」
「うん、あの人を見てるとこの腕と心が痛くてズキズキする・・・。」
「龍可・・・。」
龍可の気持ちはわかる。けど・・・。
「今は・・・遊星を信じよう。きっと遊星があの人を救ってくれる。」
「・・・うん。」
そう言って俺たちは控え室に入る。ちなみに遊星は別の部屋でデュエルの準備をしている。

しばらくしてＭＣの声が聞こえてきた。

「さぁ、いよいよ大会２日目。今日の第１試合からは準決勝。まず１人目は１回戦の衝撃が生々しい、黒薔薇の魔女、十六夜アキ！」

アキさんがフィールドに姿を現した。とたんに観客からブーイングの嵐だ。・・・アキさんがかわいそう。

「対するはサテライトの流れ星、不動遊星！」

遊星がフィールドに姿を現すとブーイングから歓声へと変わった。ま、大方魔女を倒せとしかたなく応援してるんだろうけど。なぜなら昨日は遊星に対してはブーイングだったからね。

「全ての時が今ここに交わる。デュエル・オブ・フォーチュン・カップ準決勝第１試合。スタート！」

「「決闘！」」

いよいよ準決勝が始まった。

## 第８話　準決勝前夜　駆と龍可の思い（後書き）

どうでしたか？

恋愛話って結構難しいですね。恋愛話になってるかどうかわかりませんけど・・・。

次回は遊星ｖｓアキの予定です。

ではご指摘やご感想お待ちしています。

## 第9話　隠された感情　黒薔薇の戦慄（前書き）

今回は遊星ｖｓアキ前編です。

長かったので２つに分けました。

ではどうぞ。

## 第9話　隠された感情　黒薔薇の戦慄

駆side

「「決闘！」」

遊星　ＬＰ４０００
アキ　ＬＰ４０００

「私のターン、ドロー。」

遂に準決勝が始まった。

「私はアイヴィ・ウォールを守備表示で召喚。」

ＤＥＦ／１２００

「カードを1枚伏せてターンを終了。」

「俺のターン、スピード・ウォリアーを召喚。」

ＡＴＫ／９００

「スピード・ウォリアーは召喚したターン、攻撃力が2倍となる。」

ＡＴＫ／９００→１８００

「バトル！スピード・ウォリアーでアイヴィ・ウォールに攻撃！」

「アイヴィ・ウォールが攻撃対象になったとき、相手フィールドにアイヴィトークンを1体守備表示で特殊召喚する。」

DEF／0

「ソニックエッジ！」

スピード・ウォリアーがアイヴィ・ウォールを蹴り飛ばし、破壊した。

「ターン終了。」

「私のターン、ドロー。リバースカードオープン、永続罠カースド・アイヴィを発動。その効果により、墓地からアイヴィモンスターを特殊召喚できる。私はアイヴィ・ウォールを呼び戻す。」

DEF／1200

「カースド・アイヴィはアイヴィ・ウォールに装備され、フィールドから無くなった時、装備モンスターも破壊される。ターンを終了。」

「2人とも慎重ね。」

「そうだね。」

そう、今はね。でもこれは嵐の前の静けさ、ここから激しい攻防が始まる。

「俺のターン、ドロー。戦士族のスピード・ウォリアーをリリース

して、ターレット・ウォリアーを特殊召喚。」

ＡＴＫ／１２００

「ターレット・ウォリアーは、リリースした戦士族モンスターの攻撃力分、攻撃力をアップする。」

ＡＴＫ／１２００→２１００

「バトル！ターレット・ウォリアーでアイヴィ・ウォールに攻撃。」

「アイヴィ・ウォールが攻撃対象になったとき、相手フィールドにアイヴィトークンを１体を守備表示で特殊召喚。」

ＤＥＦ／０

「リボルヴィング・ショット！」

ターレット・ウォリアーがアイヴィ・ウォールを撃ち、破壊した。

「アイヴィ・ウォールが破壊された事によってカースド・アイヴィも破壊されるが、このカードが墓地に送られた時、相手フィールド場にアイヴィトークンが２体守備表示で特殊召喚される。」

ＤＥＦ／０

「ターンエンド。」

「遊星の場が埋め尽くされたわね。これがアキさんの戦略なのかしら？」

「そうみたいだね。」

そう。これがアキさんの戦略。ここからアキさんの猛攻が始まる。遊星、耐えて。

遊星ｓｉｄｅ

俺の場に４体のアイヴィトークン。このトークンが破壊された時、おれは３００ポイントのダメージを受ける。だがこれで何をしようと・・・。

「私のターン、ドロー。手札から魔法カード偽りの種を発動。手札からレベル２以下の植物族モンスターを１体特殊召喚できる。現れよダーク・ヴァージャー。」

ＤＥＦ／１０００

「そしてダーク・ヴァージャーをリリース！ローズ・テンタクルスをアドバンス召喚！」

ＡＴＫ／２２００

「バトル！ローズ・テンタクルスでターレット・ウォリアーを攻撃。ソーン・ウィップ！」

「くっ！」

遊星　ＬＰ４０００→３９００

僅か１００ポイントのダメージだったためか、衝撃が弱かった。

「まだだ。」

「何！？」

「ローズ・テンタクルスはバトルフェイズ開始時に相手フィールドに存在する植物族モンスター分、攻撃回数を増やす。そして、植物族モンスターを戦闘で破壊した時、相手に３００ポイントのダメージを与える。」

「な！」

つまり俺の場には植物族モンスターが４体もいる。つまりあと４回も攻撃することができる。ローズ・テンタクルスの効果で１体につき３００ポイント、アイヴィトークンの効果でさらに３００ポイント、つまり合計で２４００ポイントのダメージを俺は受けることになるのか。

「ローズ・テンタクルスでアイヴィトークンに攻撃！ソーン・ウィップ１！」

遊星　ＬＰ３９００→３３００

「なっ！？」

ローズ・テンタクルスのツタが俺の右腕に巻きついただと！

「ソーン・ウィップ２！」

遊星　ＬＰ３３００→２７００

今度は右足が巻きつかれた。何をしようと・・・。

「ソーン・ウィップ３！」

遊星　ＬＰ２７００→２１００

今度は左足が巻きつかれた。

そして拒絶と・・怒り・・確かにこの痛みは十六夜の叫び・・だが感じる・・お前のもう一つの感情。

「はぁ・・はぁ・・はぁ・・これが・・ラスト・ソーン・ウィップ！」

今度は俺の腰に巻きつくと宙に浮かべていった。

俺はアキの表情を見る。すると彼女は・・・笑っていた。

「お前・・まさか・・うわぁ！」

そのまま俺は地面に叩きつけられた。

遊星　ＬＰ２１００→１５００

会場には大きな衝撃が襲っていた。

それよりも彼女のあの表情・・・。そういうことか・・・。

「俺の・・ターン・・シールド・ウォリアーを・・守備表示で・・召喚。」

ＤＥＦ／１６００

「カードを２枚伏せて・・ターンエンド。」

「ようやくわかった。お前の拒絶や怒り・・その先にあるもう一つの感情を・・十六夜アキ、お前は破壊を、その力を楽しんでいる。その力に優越を感じている。」

「私が・・破壊を楽しんでる？」

駆ｓｉｄｅ

「私が・・破壊を楽しんでる？」

そう、アキさんは破壊を楽しんでる。でもそのことにアキさんは気づいていない。

「私のターン、ドロー、永続魔法アイヴィ・シャックルを発動。相手フィールドに存在する全てのモンスターは、私のターンの間は植物族とすることができる。お前のシールド・ウォリアーを戦士族から植物族に変更する。」

そういえばこのころアイヴィ・シャックルって永続罠じゃなくて永

続魔法だったなぁ。

「そして、ローズ・テンタクルスの効果、バトルフェイズ開始時に相手フィールドに存在する植物族モンスター1体につき1回攻撃回数を増やすことができる。よってローズ・テンタクルスは2回の攻撃が出来る。ローズ・テンタクルスでシールド・ウォリアーを攻撃！ソーン・ウィップ！」

ローズ・テンタクルスがツタでシールド・ウォリアーを突き刺し、破壊した。そしてその衝撃が会場に響いている。

「現在、シールド・ウォリアーは植物族。ローズ・テンタクルスは植物族モンスターを破壊した時、相手に３００ポイントのダメージを与える」

ローズ・テンタクルスが遊星を叩きつけた。

「くっ・・・。」

遊星　ＬＰ１５００→１２００

そしてやはりアキは笑っていた。

「やはりお前はそうなのか。」

「？」

そしてアキさんはまだそのことに気が付いてない。

「ローズ・テンタクルスで2回目の攻撃。相手プレイヤーに直接攻

撃！」

「トラップカードオープンカード・ディフェンス。手札のカード１枚をコストに、相手のモンスターのダイレクトアタックを無効にし、カード１枚ドローする。」

「ターンを終了する。」

「十六夜・・お前は痛みを与える事を喜んでいる。」

「やめろ。何を言っている？」

「・・・俺のターン、手札よりジャンク・シンクロンを召喚。」

ＡＴＫ／１３００

「ジャンク・シンクロンの効果により、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスターを守備表示で特殊召喚する。スピード・ウォリアーを特殊召喚！」

ＤＥＦ／４００

「そして、Ｌｖ２のスピード・ウォリアーにＬｖ３のジャンク・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚、出でよ！ジャンク・ウォリアー！」

ＡＴＫ／２３００

出た！ジャンク・ウォリアー。これも序盤の遊星のデュエルで毎回出てくるモンスター。

「さらに手札から装備魔法ジャンク・アタックをジャンク・ウォリアーに装備する。ジャンク・ウォリアーでローズ・テンタクルスに攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーが勢いよくローズ・テンタクルスに殴り込み、破壊した。

アキ　ＬＰ４０００→３９００

「さらに、ジャンク・アタックの効果、装備モンスターがバトルによってモンスターを破壊した時、その攻撃力の半分のダメージを与える。」

アキ　ＬＰ３９００→２８００

「ターンエンドだ。」

アキさんにダメージが与えられたことで観客が盛り上がっている。・・・ったく観客の奴らは。

「（遊星はただ戦ってるだけじゃない。あの人に何かを・・・。）」

「私のターン、ドロー。永続魔法アイヴィ・シャックルの効果により、ジャンク・ウォリアーを戦士族から植物族に、そしてチューナーモンスターコピー・プラントを召喚。」

ＤＥＦ／０

「コピー・プラントは１ターンに１度、フィールド場に存在する植

物族モンスターを選択し、レベルを同じにする事ができる。ジャンク・ウォリアーのレベルをコピー。」

コピー・プラントの姿がジャンク・ウォリアーへと変わっていった。

「墓地に眠るダーク・ヴァージャーの効果を発動。植物族のチューナーを召喚した時、墓地より特殊召喚できる。」

ＡＴＫ／０

来る！アキさんのエースモンスターが。

「Ｌｖ２のダーク・ヴァージャーにＬｖ５のコピー・プラントをチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚、現れよ！ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ＡＴＫ／２４００

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果、墓地の植物族モンスター１体を除外することで、このターンの間、相手モンスターの攻撃力を０にすることができる。アイヴィ・ウォールを除外。ローズ・リストリクション」

「ジャンク・ウォリアー！」

ＡＴＫ／２３００→０

「ブラック・ローズ・ドラゴンでジャンク・ウォリアーを攻撃！ブラック・ローズ・フレア！」

「墓地からシールド・ウォリアーの効果を発動！墓地にあるこのカードを除外することで、モンスターの戦闘による破壊を無効にする。」

「だが、戦闘ダメージは発生する」

「トラップカードオープン！スピリット・フォース。プレイヤーが受ける戦闘ダメージを1度だけ0にする！その後墓地にある守備力１５００以下のモンスターを手札に加える。」

遊星はジャンク・シンクロンを手札に加えた。

「カードを2枚伏せてターンを終了。」

「魔女よ消えろ！」

「消え失せろ！」

「魔女の巣に帰れ！」

観客のやろう・・・どこまでひどい言葉をかければ気が済むんだよ！

「そうよ・・その通りよ・・私は魔女・・痛みを与えて・・それを楽しむ恐ろしい女！楽しいわ、私を孤独に追いやる者どもに私の力によって痛みを与えるのが・・本当に楽しい！」

アキさん・・・。確かに楽しんでるように見える。でも何か違和感がある。遊星、アキさんを助けて。

遊星ｓｉｄｅ

楽しんでいる・・だが、その喜びを彼女自身は・・・。

「俺のターン。」

プリベント・スター、モンスターを守備表示にして装備し、相手モンスターの動きを封じるカード、この流れならば。

「手札よりジャンク・シンクロンを召喚。」

ＡＴＫ／１３００

「ジャンク・シンクロンの効果でスピード・ウォリアーを特殊召喚！」

ＤＥＦ／４００

ジャンク・ウォリアーの効果でスピード・ウォリアーの攻撃力がジャンク・ウォリアーに加算される。

ＡＴＫ／２３００→３２００

スターダスト・ドラゴン・・力を・・貸してくれ！

「Ｌｖ５のジャンク・ウォリアーにＬｖ３のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし願いが、新たに輝く星となる、光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよスター・ダスト・ドラゴン！」

白銀の龍が現れる。

ＡＴＫ／２５００

ここに２体のシグナーの龍が激突する。

## 第９話　隠された感情　黒薔薇の戦慄（後書き）

どうでしたか？

まぁ、アニメと同じ展開なのでアニメを見ている人はもう展開がわかってると思いますが。

次回は遊星ｖｓアキの後編、そしてたぶん駆ｖｓ龍可がちょっとはいると思います。

ではご指摘やご感想をお待ちしております。

## 第１０話　星屑の龍ｖｓ黒薔薇の龍　そして大天使降臨！？（前書き）

遊星ｖｓアキ後編、そして遂に最年少対決が始まります。

ではどうぞ。

## 第１０話　星屑の龍ｖｓ黒薔薇の龍　そして大天使降臨！？

龍可ｓｉｄｅ

スターダスト・ドラゴン。遊星のエースモンスターがこの大会で初めて登場した。

スターダストとブラックローズが睨みあってる。

頑張って・・遊星。

遊星ｓｉｄｅ

「忌むべき印・・・。」

突然、十六夜が右腕を押さえながらしゃべりだした。

「私はこの印を憎む・・この力が無ければ私は・・」

「力に喜びを感じる事は無かった。痛みに快楽を得ることも。」

「そう・・この痣は、そんな人を超えた怪物に刻印された忌むべき印。だから、私は私を憎む・・抑えきれない破壊への思いに・・私は生きてはいけないとさえ思った。でも、想いが募れば募るほど、それは破壊への衝動に添加されていった。そして私は私であることをやめた。もう1人の自分を作り上げた。仮面の私は私じゃない。破壊を楽しんでも、痛みを笑っても構わない。そんな時、ディヴァ

インが教えてくれた。仮面など必要無いと・・そのままの私で良いんだと・・私はその言葉で救われた。ただ生きているだけで良い、もう考えない、ただ感じるだけ・・。」

「考えろ！お前自身が。」

「どうでも良い。ディヴァインが考えてくれる」

「逃げるな十六夜！」

「どうしようもない・・私にはどうすることも出来ない」

「出来る！その喜びを否定するお前がいる。その想いがある限り、やり直せる。お前自身を救い出す事が出来る！」

「うるさい・・・。」

届かせる・・このデュエルで彼女の心に。

駆ｓｉｄｅ

「スター・ダスト・ドラゴンでブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃！」

スター・ダスト・ドラゴンが攻撃する瞬間、シグナーの全員の痣が疼きだした。

そして・・・、

「っ！」

なぜか俺の右腕も疼きだした。見てみると俺にも赤き龍の痣があった。

「駆、その腕。」

「まさか、俺もシグナーなの？」

しかもそれは6人目のシグナーの痣、つまりいずれ龍亜にでるはずの痣が俺にでていた。

「何で・・俺に。」

そう言ってる間にスター・ダスト・ドラゴンの攻撃によってブラック・ローズ・ドラゴンは破壊された。

アキ　ＬＰ２８００→２７００

どうなってるの？何で俺に痣が・・・。でも俺にシグナーの龍は・・・はっ！

『駆、あなたは別のドラゴンを救っていただきたい。』

まさか、俺のシグナーの龍はエンシェント・フェアリーが言ってたあのドラゴンのことか！

とりあえず今はこのデュエルだ。頑張れ遊星。

遊星ｓｉｄｅ

「私は・・ただ感じるだけ。お前から・・痛みを・・苦しみを・・。」

そう言って、十六夜は仮面を着けてしまった。

「十六夜・・・。」

「私のターン、ドロー、魔法カードマジック・プランターを発動。フィールドに存在する永続魔法を墓地に送る事で、デッキからカードを２枚ドローする。」

十六夜はアイヴィ・シャックルを墓地に送った。

「永続罠ウィキッド・リボーン。８００ポイントのライフを支払い墓地のシンクロモンスターを特殊召喚する。」

アキ　ＬＰ２７００→１９００

「私は、ブラック・ローズ・ドラゴンを復活させる！ウィキッド・リボーンはブラック・ローズ・ドラゴンの装備カードとなる。装備モンスターはこのターン攻撃は出来ない、そして装備カードがフィールドに存在しなくなった場合、そのモンスターを破壊する。さらに、装備モンスターがこの効果以外で破壊されたターンのエンドフェイズに特殊召喚される。ブラック・ローズ・ドラゴンの効果！特殊召喚に成功した時、フィールド場の全てのカードを破壊するブラック・ローズ・ガイル。」

不味い・・・。

「スター・ダスト・ドラゴンの効果を発動！破壊する効果が発生した時、このカードをリリースする事で無効にし、破壊する。ヴィクテム・サンクチュアリ！」

スター・ダスト・ドラゴンがブラック・ローズ・ドラゴンを羽で包み込み共に消えていった。

「まだだ、フェニキシアン・シードを召喚。」

ＡＴＫ／８００

「フェニキシアン・シードの効果によりこのカードをリリースし、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚する。」

ＡＴＫ／２２００

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスで、スピード・ウォリアーに攻撃、フレイム・ペタル！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスがスピード・ウォリアーを縛り付けて破壊した。

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスは攻撃した後、自らを破壊する。スキャッター・フレイム。」

大きな爆発音とともにフェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊された。

「そして相手に８００ポイントのダメージを与える。」

「ぐっ・・・。」

遊星　ＬＰ１２００→４００

「フフっ・・、カードを１枚伏せる。」

「スター・ダスト・ドラゴンは効果を発動したこのターンのエンドフェイズに復活する！」

ＡＴＫ／２５００

「ウィキッド・リボーンの効果により、このターンのエンドフェイズにブラック・ローズ・ドラゴンを特殊召喚。そして永続罠オーバー・デッド・ラインを発動。墓地から特殊召喚した私のモンスターは攻撃力が１０００ポイントアップする。」

ＡＴＫ／２４００→３４００

「そして、フェニキシアン・クラスター・アマリリスも効果により守備表示で特殊召喚する。ターンを終了。」

「俺のターン。」

コズミック・ブラスト・・このカードは、自分フィールドのドラゴン族のシンクロモンスターがフィールドを離れたとき、その攻撃力分のダメージを与える・・・よし、勝利の方程式が完成した。

「スター・ダスト・ドラゴンを守備表示に変更。」

ＡＴＫ／２５００→ＤＥＦ／２０００

「手札から装備魔法プリベント・スターをスター・ダスト・ドラゴンに装備、このカードはモンスターが守備表示になった時にモンスターに装備する。１ターンに１度相手モンスターを選択する。そのモンスターは攻撃出来ず、表示変更も出来ない。俺はフェニキシアン・クラスター・アマリリスを選択！」

「罠カードシンクロ・バック。自分フィールドのシンクロモンスターを１体をエクストラデッキに戻す。私はブラック・ローズ・ドラゴンを選択。」

ブラック・ローズ・ドラゴンがアキのエクストラデッキの中に戻っていった。

「カードを１枚セットしてターンエンド。」

「私のターン、ドロー、シンクロバックの効果により、ブラック・ローズ・ドラゴンを復活させる！」

ブラック・ローズ・ドラゴンが再度現れた時、十六夜が右腕・・・痣があるところを押さえた。

「くっ・・・。」

「楽しくないんだろう？」

「うるさい・・・。」

「苦しいんじゃないのか？」

「（どうして・・どうしてこの痣が疼く・・どうして楽しくない・・どうして苦しい・・。）」

「お前自身が、変わる時がやってきたんだ。」

「！？」

「お前を苦しめてきた破壊への喜び・・その痛みが、同じ痣を持つ俺達に共有する痛みに変わって来たんじゃないのか？俺達を導くこの印・・この痛みは何かを訴えている。その答えを得るには自分で考えなければいけないんだ。その答えをこの痣は持っているんじゃないのか？考えを預けるな！お前自身で考えるんだ！」

「魔女の私が・・何を考えるの・・ディヴァインが私を導いて、愛してくれればそれで・・。」

「違う！お前がお前を愛するんだ！」

「そんな事が出来れば・・出来れば・・出来ないから苦しんでるんじゃないか！」

十六夜がつけていた髪飾りが落ちた。

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動！ブラック・ローズ・ガイル！」

ブラック・ローズドラゴンから突風が起こり、大きな衝撃が会場を

襲う。

「フィールドの全てのカードを破壊する！」

「何度でも受け止めてやる！全部吐き出せ！お前の悲しみを！ヴィクテム・サンクチュアリ！」

スター・ダスト・ドラゴンがブラック・ローズ・ドラゴンを包み込み共に消えた。

「・・！痛みが薄らいでいく・・これでプリベント・スターからの呪縛からフェニキシアン・クラスター・アマリリスが解放される。お前のフィールドはがら空き、ダイレクトアタックが決まれば私の勝ちだ。全て無くなれば良い・・考えさせるな・・お前はやはり・・忌むべき敵。」

「だったら、どうして泣く？」

「！？」

「トラップカードコズミック・ブラスト！俺のフィールドのドラゴン族のシンクロモンスターがフィールドを離れたとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。」

アキ　ＬＰ１９００→０

「た・・す・・け・・て・・。」

「十六夜！」

俺は十六夜に話しかけようとしたが、観客の声によってかき消されてしまった。

「ざまぁみろ！魔女！」

「魔女の巣に帰れ！二度と来るな！」

十六夜の後ろからさっきの男・・・十六夜の保護者（？）がやってきた。

「よくやったねアキ。さぁ、一緒に戻ろう。」

そう言って一緒に退場していった。

「勝者決定！不動遊星！」

十六夜・・アキ・・。

駆ｓｉｄｅ

原作通り遊星が勝ったね。それにしてもアキさん・・大丈夫だろうか・・。

それより次は俺と龍可のデュエル。この大会で初めてじゃないかな。何の障害もない純粋に楽しむことのできるデュエルは。

ちなみに龍可は遊星とアキさんのデュエルが終わった瞬間に俺とのデュエルの準備のために別の控室に行った。

さてと行きますか。

龍可ｓｉｄｅ

次は私と駆のデュエル。

１回戦は精霊界とかなんやかんやで全然楽しめなかったから、このデュエルはもう純粋に楽しいデュエルをしよう。駆もそれを望んでるはず。

『クリリン。』

「クリボン、今日もよろしくね。」

『クリリン！』

ふふ、クリボンも楽しみにしてるわね。

じゃ、そろそろ行きますか。

駆ｓｉｄｅ

ＭＣの紹介も終わり、俺と龍可はフィールドで対峙している。

「いくよ龍可。」

「ええ。」

「さぁ、今大会の最年少対決、勝つのはどっちだ！準決勝第２試合、スタート！」

「「決闘！」」

駆　ＬＰ４０００
龍可　ＬＰ４０００

先行は俺だ。

「俺のターン、ドロー！」

・・・ここは守りに専念するか。

「俺は手札から融合を発動。手札のバブルマンとクレイマンを融合！Ｅ・ＨＥＲＯマッドボールマンを融合召喚！」

ＤＥＦ／３０００

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

これでいいかな。守備力３０００だったらそう簡単に越えられないだろうし。

「私のターン、私は手札から永続魔法神の居城ーヴァルハラを発動！」

え？いきなりかよ。

「ヴァルハラの効果発動！自分フィールド上にモンスターが存在しない時、１ターンに１度手札から天使族モンスターを１体特殊召喚できる。私はこの効果で大天使クリスティアを攻撃表示で特殊召喚！」

「な！」

ＡＴＫ／２８００

まずい。いきなりクリスティアを召喚されてしまった。これじゃあ融合が使えない。今はマッドボールマンで凌ぐしか・・・。

「さらに私は勝利の導き手フレイヤを召喚！」

ＡＴＫ／１００

「フレイヤが場にいる限り、私の天使族モンスターの攻撃力と守備力は４００ポイントアップする。」

ＡＴＫ／２８００→３２００
ＡＴＫ／１００→５００

ま、まずい。

「バトル！クリスティアでマッドボールマンを攻撃！」

「くっ！」

クリスティアからだされた光でマッドボールマンは破壊された。

「さらにフレイヤで駆に直接攻撃！」

「ぐっ・・。」

駆　ＬＰ４０００→３５００

「カードを１枚伏せてターンエンドよ。さぁ駆、この状況をどうやって打開する？」

くっ・・、非常にまずい展開だな。まさかマッドボールマンがこうもあっさり倒されるなんて。クリスティアがいる今、この伏せカードは使えない。くそっ！

でも俺はまだ諦めない！デュエルはまだ始まったばかりだ！

## 第１０話　星屑の龍ｖｓ黒薔薇の龍　そして大天使降臨！？（後書き）

どうでしたか？

次回は龍可ｖｓ駆決着！クリスティアを倒す意外な方法とは？そして一進一退の攻防に決着をつけるモンスターとは。

あと、１週間ぐらい実家に帰るのでその間は多分更新できないと思います。ご了承ください。

では、次回もお楽しみに。ご指摘やご感想お待ちしています。

## 第１１話　決着！駆ｖｓ龍可　ハネクリボー進化！（前書き）

お待たせいたしました。駆ｖｓ龍可決着編です。

題名の通りハネクリボーが進化します。

それとこの話から漫画やＴＦのオリカを使います。ご了承ください。

それではどうぞ。

## 第１１話　決着！駆ｖｓ龍可　ハネクリボー進化！

駆ｓｉｄｅ

状況は最悪だ。龍可の場にはクリスティアと勝利の導き手フレイヤと伏せカードが１枚。こっちの場にはクリスティアのおかげで使えない伏せカードが１枚。お互いに手札は２枚ずつ。しかも俺の手札はネクロダークマンとネクロ・ガードナー。次のドロー次第では次の龍可のターンで終わる可能性もある。

「俺のターン！」

引いたのは・・・これならまだ希望はある。

「俺は手札から速攻魔法手札断札を発動。お互いに手札を２枚捨て２枚ドローする。」

！？このカードは・・・。これならクリスティアを倒せる。でもそれにはあのモンスターが必要。ここはこれで耐えるしかない。

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

「私のターン。」

さぁどう来る？

「私はコーリング・ノヴァを召喚。」

ＡＴＫ／１４００→１８００

「バトル、クリスティアで直接攻撃！」

「カウンター罠攻撃の無力化発動！その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる。」

「ならこれでターンエンドよ。」

ふぅ～。なんとか耐えた。けどあのカードを引かなきゃ次のターンにやられる。なんとしてもこのターンで引かなきゃ。

「俺のターン、ドロー！」

これじゃない！けどこれならまだいける。

「俺は手札から魔法カードＨＥＲＯの遺産を発動。墓地にＬｖ５以上のＨＥＲＯが２体以上いるとき３枚ドローできる。」

「え？でも墓地に上級モンスターはマッドボールマンだけのはずだけど。」

「いいやマッドボールマンのほかに手札断札の効果で墓地に送ったネクロダークマンがいるよ。」

「！？いつの間に。」

「よって俺は３枚ドロー！」

来た！

「俺はバーストレディを召喚。」

ＡＴＫ／１２００

「そして手札から魔法カードバースト・インパクトを発動！自分フィールド上にバーストレディがいるとき、フィールド上に存在するバーストレディ以外のモンスターを破壊し、破壊されたモンスターのコントローラーに破壊したモンスターの数×３００ポイントのダメージを与える。」

「嘘！？きゃあ！」

龍可　ＬＰ４０００→３１００

「クリスティアはフィールド上から墓地に送られる時、墓地にはいかずデッキの１番上に戻る。」

これで龍可の場はガラ空き！

「バトル！バーストレディで龍可に直接攻撃！」

「きゃっ！」

龍可　ＬＰ３１００→１９００

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

よし！これで状況は俺の方が優位になった。だけど龍可はこれで終わるような奴じゃない。ここから反撃してくる。

「私のターン、私は手札から魔法カード天空の宝札を発動。手札の天使族・光属性モンスターを除外して２枚ドローする。ただしこのターン私は特殊召喚できず、攻撃することもできない。私はクリスティアを除外して２枚ドロー。」

クリスティアを除外！？何を企んでいる？龍可。

「私はムドラを召喚。」

ＡＴＫ／１５００

「ムドラは自分の墓地に存在する天使族モンスター１体につき攻撃力が２００ポイントアップする。私の墓地には２体の天使がいる。よって４００ポイント攻撃力アップ。」

ＡＴＫ／１５００→１９００

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン！」

手札にムドラを倒せるカードはない。仕方ない守りを固めるか。

「バーストレディを守備表示に変更。」

ＡＴＫ／１２００→ＤＥＦ／８００

「ワイルドマンを守備表示で召喚。」

ＤＥＦ／１６００

「これでターン終了。」

「私のターン。（このカードを使うしかないわ。駆の手札を増やすことになるけど。）私は手札から魔法カード壺の中の魔術書を発動。互いのプレイヤーはカードを３枚ドローする。」

思わぬところで手札補充ができた。これはラッキーだけど。

「・・・ふっ。」

笑った！？まずい！何か仕掛けてくる。

「私は手札から光神化を発動。手札から天使族モンスターを攻撃力を半分にして特殊召喚する。私は手札からジェルエンディオを特殊召喚。」

ＡＴＫ／１７００→８５０

「さらにジェルエンディオの効果！天使族・光属性モンスターをアドバンス召喚する時、２体分のリリースとすることができる。ジェルエンディオを生贄に、降臨せよＴｈｅ　ｓｕｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ！」

な！ＶＥＮＵＳだと！？

ＡＴＫ／２８００

ムドラ　ＡＴＫ／１９００→２１００

「ＶＥＮＵＳの効果で天使族以外のモンスターは攻撃力、守備力が５００ポイントダウンする。」

バーストレディ　ＤＥＦ／８００→３００
ワイルドマン　ＤＥＦ／１６００→１１００

「バトル！２体でバーストレディとワイルドマンに攻撃！」

バーストレディとワイルドマンが破壊された。でもこっちもただじゃ終わらない。

「罠発動！ヒーローシグナル。自分のモンスターが戦闘で破壊されたとき、デッキまたは手札からＬｖ４以下のＥ・ＨＥＲＯを特殊召喚できる。俺はデッキからＥ・ＨＥＲＯフォレストマンを守備表示で召喚。」

ＤＥＦ／２０００→１５００

「・・・やっかいなモンスターを残しちゃったわね。これでターンエンドよ。」

なんとか耐えた。ＶＥＮＵＳは予想外だったな。でもさっきの壺の中の魔術書のおかげで手札は十分。こっから反撃だ！

「俺のターン！スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。デッキまたは墓地から融合のカードを１枚手札に加える。俺はデッキから融合を手札に加える。そして融合を発動！手札のスパークマンとオーシャンを融合。Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺｅｒｏを融合召喚！」

ＡＴＫ／２５００→２０００

「さらにミラクル・フュージョンを発動！場のアブソルートＺｅｒｏと墓地のスパークマンを融合。」

「（やばいわ、この展開は・・・。）」

「Ｅ・ＨＥＲＯＴｈｅシャイニングを融合召喚！」

ＡＴＫ／２６００

「アブソルートＺｅｒｏの効果発動！このカードが場を離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターをすべて破壊する。」

ムドラとＶＥＮＵＳが凍りつき、破壊された。

「そしてＴｈｅシャイニングの効果！シャイニングは除外されているＥ・ＨＥＲＯ１体につき攻撃力が３００ポイントアップする。除外されているＥ・ＨＥＲＯはアブソルートＺｅｒｏとスパークマンの２体。よって６００ポイント攻撃力がアップする。」

ＡＴＫ／２６００→３２００

「バトル！シャイニングで龍可に直接攻撃。オプティカルストーム！」

シャイニングが出した光が龍可を襲う。これが通れば俺の勝ちだ！

「リバースカードオープン！聖なる天啓！相手が直接攻撃してきた時、デッキからＬｖ４以下の天使族モンスター２体を墓地に送りそ

の戦闘を無効にする。私は聖なるあかりとウィクトーリアを墓地に送る。」

防がれたか・・・。さすが龍可。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

「私のターン！・・・駆！このターンで終わらせるわ！」

何！？つまりこのターンでシャイニングを倒すということだよね。そんなことが・・・。

「私は手札からおろかな埋葬を発動。デッキから堕天使スペルビアを墓地に送る。」

堕天使だと！？今まで龍可は堕天使を使っていなかったぞ！まさか・・・、

「そう、このデュエルの直前にこのカードをデッキに入れたのよ。」

心を読まれた！？いや、そんなこと言ってる場合じゃ・・・。

「リバースカードオープン！リビングデットの呼び声。この効果で墓地から堕天使スペルビアを特殊召喚！」

ＡＴＫ／２９００

だけど攻撃力はシャイニングの方が・・・。

「スペルビアの効果発動！このカードが墓地からの特殊召喚に成功

した時、墓地の天使族モンスターを1体特殊召喚できる。」

な！そんな効果があったなんて・・・。

「墓地からＴｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳを特殊召喚！」

ＡＴＫ／２８００

「ＶＥＮＵＳの効果でシャイニングの攻撃力は５００ポイントダウンするわ。」

ＡＴＫ／３２００→２７００

まずい。これで攻撃力５００以上のモンスターを出されたら・・・、

「さらに神秘の代行者アースを通常召喚。」

ＡＴＫ／１０００

「神秘の代行者の効果でデッキから奇跡の代行者ジュピターを手札に加える。」

俺の・・・負け・・・。

俺は力なく下を向いた。

「バトル！スペルビアでシャイニングを攻撃！」

駆　ＬＰ３５００→３３００

「これで終わりよ！ＶＥＮＵＳとアースで駆に直接攻撃！」

駆　ＬＰ３３００→０

これで・・俺の・・負け・・・・・・・・・・じゃないんだよね。

「え！？」

駆　ＬＰ１００

「嘘！？何でＬＰが１００に・・・。今の総攻撃で０になったはずじゃ。」

龍可も客席のみんなも驚いてるね。じゃ、そろそろ種明かし。

「俺はこの罠カードヒーロー・ソウルを発動させた。」

「ヒーロー・ソウル？」

「そう。ヒーロー・ソウルはＨＥＲＯが破壊されたターン、プレイヤーのＬＰが０になった時、ＬＰを１００にする。」

「な！？そんなカードがあったなんて・・・。」

それは龍可も同じだよ。堕天使を持ってるなんて知らなかったし。

と、このカードを発動させなきゃ。

「リバースカードオープン！ショック・ドロー。このターン受けたダメージ１０００ポイントにつき1枚カードをドローする。俺が受けたダメージは３０００を超えている。よって3枚カードをドロー

！」

「ここにきてドローカード！？くっ、私はこれでターンエンドよ。」

ふぅ～。何とか耐えたものの今の俺の手札に逆転のカードはない。

このドローにすべてがかかっている。

「俺の・・ターン！」

！？このカードは・・・。そう、あんたが決着をつけてくるんだね。

「俺はカードを3枚伏せてターンエンド。」

「伏せカードのみ！？」

このカードにすべてを託す。

「私のターン！私はサイクロンを発動！」

な！ここでサイクロン！？なんつうドローだよ。

「真ん中の伏せカードを破壊する。」

破壊されたのは・・・神の宣告。助かった。重要な2枚のカードが残った。

「いくわよ駆！ＶＥＮＵＳで直接攻撃！」

攻撃してきた・・。でもそれが命取りだよ。龍可。

「速攻魔法クリボーを呼ぶ笛を発動！デッキからハネクリボーを特殊召喚する！」

『クリクリー』

ＤＥＦ／２００

「構わないわ。そのままハネクリボーに攻撃！」

「いくよハネクリボー！」

『クリクリー！』

「リバースカードオープン！進化する翼！手札２枚をコストにハネクリボーを進化させる。ハネクリボーＬｖ１０を特殊召喚！」

ＡＴＫ／３００

「ハネクリボーＬｖ１０の効果発動！このカードをリリースすることで相手フィールド上の攻撃表示モンスターをすべて破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。」

「そんな・・・。」

「これで終焉だよ龍可！行けぇハネクリボー！」

『クリクリー！』

「きゃあああ！」

ハネクリボーから出された光で龍可の場のモンスターがすべて破壊された。

龍可　ＬＰ１９００→０

「決着！準決勝第２試合、最年少対決を制したのは、ＨＥＲＯ使いの山岸駆だー！」

危なかった。最後進化する翼を引かなかったら俺の負けだったな。たいがい俺もチートドローだな。とにかく、

「ありがとう。ハネクリボー。」

『クリクリー』

さてと、

「龍可、大丈夫？」

「駆・・うん、大丈夫。それにしてもハネクリボーにやられるなんて思わなかったわ。ハネクリボーってあんな効果があったのね。」

『クリクリー』

「今回はハネクリボーに助けられたね。あそこで進化する翼を引かなかったら負けてたもん。」

「そうなの？とにかく決勝進出おめでとう駆。次も頑張ってね。遊星とのデュエル。」

「うん。」

さぁ、次は待ちに待った遊星とのデュエルだ！

## 第１１話　決着！駆ｖｓ龍可　ハネクリボー進化！（後書き）

どうでしたか？

次回はフォーチュンカップ決勝戦、駆ｖｓ遊星です。

ではご指摘やご感想お待ちしています。

## 第１２話　駆ｖｓ遊星（前編）遊星の猛攻（前書き）

題名通り駆ｖｓ遊星前編です。

それではどうぞ。

## 第１２話　駆ｖｓ遊星（前編）遊星の猛攻

駆ｓｉｄｅ

いよいよフォーチューンカップも決勝戦。相手は当然ながら遊星。・・・この試合勝っていいのだろうか？

もし俺が遊星に勝ってしまえば当然ながらジャックと戦うのは俺になる。だがそうなったらいくら俺がシグナーの痣（何故あるかは知らないけど。）を持ってるとはいえシグナーの龍を持っていない俺がデュエルしても赤き龍は現れないんじゃないか？あれはなんだかんだいって大事なイベントだからな。

だから俺はこの決勝戦勝ってはいけないことになる。・・・ていうかあの遊星のチートドローに元から勝てる気がしないかけどな。よし！決めた。この試合も全力でいく。じゃないと遊星に失礼だし、こんなこと言いながらもうすでに原作崩壊させまくってるしな。

さて、行きますか。決勝の舞台に。

場所は変わってデュエルフィールド。

そこにはすでに遊星と駆が対峙していた。

「駆、俺はお前とのデュエルを楽しみにしていた。」

「俺も遊星とのデュエルは楽しみだったよ。」

「遠慮はいらない。全力で来い！」

「望むところだよ遊星。楽しいデュエルをしようぜ！」

「あぁ。行くぞ！」

会話が終わり俺も遊星もデュエルディスクを構える。

「さぁこのデュエルに勝ってジャックとのスペシャルデュエルに駒を進めるのはどっちだ！デュエル・オブ・フォーチュン・カップ決勝戦。スタート！」

「「決闘！」」

駆　ＬＰ４０００
遊星　ＬＰ４０００

「俺の先行、ドロー！」

げ！通常召喚できるモンスターがいねぇ。ここはこれで。

「魔法カード発掘作業を発動。手札を１枚墓地に送り、１枚ドローする。俺は手札のネクロダークマンを墓地に送り、１枚ドロー！」

また上級モンスター。でも、

「墓地のネクロダークマンの効果発動。このカードが墓地にある時、１度だけＥ・ＨＥＲＯをリリースなしで通常召喚できる。おれはエッジマンを通常召喚。」

ＡＴＫ／２６００

「攻撃力２６００・・・最初から飛ばしてるな、駆。」

いやいや、ただ単に手札が事故ってるだけですから。むしろ発掘作業があってラッキーだっただけですよ。

「カードを３枚伏せてターンエンド。」

それにしてもいきなりエッジマンを召喚できるなんてラッキーだった。さぁ、どう来る？遊星。

「俺のターン、俺は魔法カード希望の転生を発動。手札のモンスター２枚を墓地に送り、２ターン目の自分のスタンバイフェイズにデッキからモンスターを１枚手札に加える。」

希望の転生？何だそれ？そんなカード遊星使ってたっけ？

（注：駆は遊戯王の映画を観る前に転生したので映画でしか出てないカードは知りません。）

「そして俺はジャンク・シンクロンを召喚。」

ＡＴＫ／１３００

「ジャンク・シンクロンの効果発動。このカードが召喚に成功した時、墓地のＬｖ２以下のモンスターを守備表示で特殊召喚できる。俺はチューニング・サポーターを特殊召喚。」

ＤＥＦ／３００

「さらに墓地のボルト・ヘッジボッグの効果を発動。自分フィールドにチューナーがいる時、墓地から特殊召喚できる。来い！ボルト・ヘッジボッグ。」

ＤＥＦ／８００

「さらにモンスターの召喚に成功したターン、このモンスターは特殊召喚できる。ワンショット・ブースターを特殊召喚！」

ＡＴＫ／０

凄い遊星。１ターンで４体のモンスターを召喚した。相変わらずの展開力だね。って感心してる場合じゃない！

「Ｌｖ１のワンショット・ブースターとＬｖ１のチューニング・サポーターにＬｖ３のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ＡＴＫ／２３００

「ジャンク・ウォリアーの効果！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上にそんざいするＬｖ２以下のモンスターの攻撃力分アップする！」

ＡＴＫ／２３００→３１００

攻撃力がエッジマンを上回った！？

「さらにチューニング・サポーターがシンクロ素材として墓地に送られた時、カードを１枚ドローする。」

そしてドロー・・・まったく隙がないね遊星は。

「まだだ！手札のモンスターカードレベル・ウォリアーを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

ＡＴＫ／７００

クイック・シンクロンだと！？まさか・・・、

「Ｌｖ２のボルト・ヘッジボッグにＬｖ５のクイック・シンクロンをチューニング！集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

ＡＴＫ／２８００

１ターンに２回のシンクロ召喚だと！？どこまで飛ばす気だよ！

「バトル！ジャンク・ウォリアーでエッジマンに攻撃！」

くっ！俺の伏せカードに攻撃を防ぐカードはない。でもこれでライフだけは・・・。

「リバースカードオープン！エレメンタル・チャージ。自分フィールドにそんざいするＥ・ＨＥＲＯ１体につきライフを１０００ポイント回復する。」

駆　ＬＰ４０００→５０００

「だが攻撃は止まらない！行け！ジャンク・ウォリアー。スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーの拳でエッジマンが破壊された。

駆　ＬＰ５０００→４５００

「さらにニトロ・ウォリアーで駆に直接攻撃！ダイナマイト・ナックル！」

「罠発動！ヒーロースピリッツ。このカードはＥ・ＨＥＲＯが戦闘で破壊されたターンに発動可能。相手モンスター１体からの戦闘ダメージを０にする。」

「・・・さすがだな。俺はこれでターンエンドだ。」

なんとか耐えた・・・。けどなんつう猛攻だよ。初めから２体のシンクロモンスターはさすがに予想外だ。おまけにエッジマンはあっさりやられたし。とにかくこのドローで何とかしないと。

「俺のターン、ドロー！」

くっ！これじゃ駄目。耐えることしかできない。

「カードを２枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン、遠慮なくいかせてもらう。ジャンク・ウォリアーで直接攻撃！」

「リバースカードオープン！残留思念。墓地のモンスターを2体除外してこのターンの戦闘ダメージを0にする。俺はエッジマンとネクロダークマンを除外！」

「凌いだか。カードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン。」

！？このカードは・・・。

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

このカードに未来を託す。

「俺のターン、このスタンバイフェイズ希望の転生の効果でデッキからモンスターカードを1枚手札に加える。俺はデブリ・ドラゴンを手札に加える。デブリ・ドラゴンを召喚。」

ＡＴＫ／１０００

「デブリ・ドラゴンの召喚に成功した時、墓地から攻撃力５００以下のモンスターを特殊召喚できる。レベル・ウォリアーを特殊召喚。」

ＡＴＫ／３００

「さらに罠発動、エンジェル・リフト。墓地のＬｖ２以下のモンスターを特殊召喚する。チューニング・サポーターを特殊召喚。」

ＡＴＫ／１００

まずい！この展開は・・・。

「Ｌｖ３のレベル・ウォリアーとＬｖ１のチューニング・サポーターにＬｖ４のデブリ・ドラゴンをチューニング！集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！」

ＡＴＫ／２５００

スターダスト・ドラゴン・・・・・近くで見ると綺麗だな・・・って見とれてる場合じゃない！

ぐっ！・・・分かってたけど・・・右腕の痣が・・・疼く・・・・。

「いくぞ駆。ジャンク・ウォリアーで直接攻撃！スクラップ・フィスト！」

「罠発動！ガード・ブロック。戦闘ダメージを０にし、カードを１枚ドローする。」

「だがまだ攻撃は残っている。ニトロ・ウォリアーで直接攻撃！ダイナマイト・ナックル！」

「罠発動！屍の沼。相手攻撃モンスターの攻撃力を半分にする。」

ＡＴＫ／２８００→１４００

駆　ＬＰ４５００→３１００

「スターダスト・ドラゴンで直接攻撃！響け！シューティング・ソニック！」

「ぐわぁぁぁ！」

駆　ＬＰ３１００→６００

「耐えたか。俺はこれでターンエンドだ。」

はぁ・・はぁ・・何とか耐えた。そう簡単にこのデュエルを終わらすわけにはいかないしね。後は・・・、

「俺のターン！」

このカードに賭ける！

「カードを２枚伏せる。そして罠発動！希望の未来。手札が０の時、墓地のカードをすべてデッキに戻し、カードを２枚ドローする。」

お願い・・・来て。

「ドロー！」

・・・これじゃないけどまだ何とかなる。

「魔法カード弱者の贈り物を発動。手札のＬｖ３以下のモンスターを除外してカードを２枚ドローする。俺はＬｖ３のフェザーマンを除外して２枚ドロー！」

来た！これでいける。

「魔法カード平行世界融合を発動！除外されている融合素材モンスターをデッキに戻し、融合召喚する。」

「何！？」

これが俺の起死回生のカード。

「俺は除外されているフェザーマンとエッジマンをデッキに戻し融合！Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯを融合召喚！」

ＡＴＫ／２８００

「ＴＯＲＮＡＤＯの効果発動！このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上の全てのモンスターの攻撃力・守備力を半分にする。」

「何だと！」

ジャンク・ウォリアー　ＡＴＫ／３１００→１５５０　ＤＥＦ／１３００→６５０

ニトロ・ウォリアー　ＡＴＫ／２８００→１４００　ＤＥＦ／１８００→９００

スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ／２５００→１２５０　ＤＥＦ／２０００→１０００

「バトル！ＴＯＲＮＡＤＯでジャンク・ウォリアーを攻撃！スーパーセル！」

「ぐっ！」

ＴＯＲＮＡＤＯが起こした風によりジャンク・ウォリアーが破壊された。

遊星　ＬＰ４０００→２７５０

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

よし！やっと遊星のライフを削った。

「ふっ。やるな駆。」

「やられぱっぱなしじゃ終われないからね。勝負はここからだよ遊星！」

「あぁ、望むところだ。来い！駆！」

## 第１２話　駆ｖｓ遊星（前編）遊星の猛攻（後書き）

どうでしたか？

次回は駆ｖｓ遊星後編です。

なかなか会話文が思いつかない今日このころ・・・。どうしよう・・・。

ではご指摘やご感想お待ちしています。次回もお楽しみに。

## 第１３話　駆ｖｓ遊星（後編）融合ｖｓシンクロ（前書き）

～前回のあらすじ～

遂にはじまった駆と遊星の決勝戦。序盤は遊星のシンクロモンスターの猛攻で駆のライフを大幅に削るが防戦一方だった駆がＴＯＲＮＡＤＯを融合召喚し反撃開始！果たしてこのデュエルに勝ちジャックとのスペシャルデュエルに駒を進めるのはどっちだ！

## 第１３話　駆ｖｓ遊星（後編）融合ｖｓシンクロ

駆ｖｓ遊星　フィールドの状況

駆　ＬＰ６００
手札０枚
伏せカード３枚
Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ　ＡＴＫ／２８００
ＤＥＦ／２２００

遊星　ＬＰ２７５０
手札０枚
伏せカード０枚
スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ／２５００→１２５０　ＤＥＦ／
２０００→１０００
ニトロ・ウォリアー　ＡＴＫ／２８００→１４００　ＤＥＦ／１８
００→９００
（２体ともＴＯＲＮＡＤＯの効果で攻守半分）

駆ｓｉｄｅ

「俺のターン！」

なんとかフィールドでは逆転したが、俺のライフは残り６００。下手すれば一撃で終わるライフだ。ましては相手は遊星。遊星ならこのぐらいすぐに逆転してくる。

「俺はスターダスト・ドラゴンとニトロ・ウォリアーを守備表示に変更。」

スターダスト・ドラゴン　ＤＥＦ／１０００
ニトロ・ウォリアー　ＤＥＦ／９００
「カードを１枚伏せてターンエンド。」
いくら遊星といえども手札がドローしたのだけじゃまだ無理か。なら遠慮なくいかせてもらう。
「俺のターン、ドロー！」
引いたのはモンスターじゃないか・・・仕方ない。
「ＴＯＲＮＡＤＯでスターダスト・ドラゴンに攻撃！スーパーセル！」
「罠発動！くず鉄のかかし。相手モンスター１体の攻撃を無効にする。」
ＴＯＲＮＡＤＯの攻撃はくず鉄で作られたかかしによって防がれた。
「さらに発動後このカードを再びセットする。」
ここにきてくず鉄のかかしか・・・やっかいだな。
「カードを１枚伏せてターンエンド。」
しかしこのデュエル、なかなかモンスターを引かないな・・・。
「俺のターン・・・カードを１枚伏せてターンエンド。」

遊星はまだ動けないみたいだね。

「俺のターン！」

またモンスターじゃない・・・。このまま攻撃してもくず鉄のかかしで防がれるだけ。

「俺はこのままターンを終了する。」

「俺のターン、俺はシールド・ウィングを守備表示で召喚し、ターンエンドだ。」

ＤＥＦ／９００

またやっかいなモンスターを。あいつは１ターンに２度まで戦闘では破壊されないという優秀な壁モンスターじゃないか。貫通があるなら話は別だが・・・。

「俺のターン！」

やっとモンスターを引いたか。

「レディ・オブ・ファイアを召喚。」

ＡＴＫ／１３００

「バトル！レディ・オブ・ファイアでスターダスト・ドラゴンに攻撃。」

レディ・オブ・ファイアから出された炎によってスターダストは破壊された。

くず鉄のかかしを使わなかったね。確かにＴＯＲＮＡＤＯの方が攻撃力は高いからくず鉄は使わなくてもいいけど、それは俺も予想済み。

「ＴＯＲＮＡＤＯでニトロ・ウォリアーを攻撃。」

「罠発動！くず鉄のかかし。」

そう何度も使わせないよ。

「罠発動！エレメントの加護。自分フィールド上のＥ・ＨＥＲＯ１体を除外し、相手の魔法・罠の発動を無効にし破壊する。」

「何！？」

さっきはスターダストがいたから使えなかったんだよね。

「俺はレディ・オブ・ファイアを除外し、くず鉄のかかしを破壊する。」

「くっ！」

「バトル続行！」

ＴＯＲＮＡＤＯが出した風でニトロ・ウォリアーが破壊された。

「エンドフェイズにエレメントの加護で除外されたレディ・オブ・

ファイアが戻る。そしてレディ・オブ・ファイアの効果を発動。エンドフェイズに自分フィールドに存在するＥ・ＨＥＲＯ１体につき２００ポイントのダメージを与える。俺の場にＥ・ＨＥＲＯは２体。よって４００のダメージを受けてもらうよ。」

遊星　ＬＰ２７５０→２３５０

「これでターンエンド。」

「俺のターン！・・・ふっ。」

笑った！？何かキーカードでも引いたのか。

「俺はロード・シンクロンを召喚。」

ＡＴＫ／１６００

「さらに罠発動、リミット・リバース。墓地の攻撃力１０００以下のモンスターを特殊召喚する。よみがえれ！チューニング・サポーター！」

ＡＴＫ／１００

チューニング・サポーター・・・このデュエル３回目の登場。お疲れ様です・・・って言ってる場合じゃない！

「チューニング・サポーターはシンクロ素材となる時、Ｌｖを２として扱うことができる。Ｌｖ２となったチューニング・サポーターとＬｖ２のシールド・ウィングにＬｖ４のロード・シンクロンをチューニング！集いし希望が、新たな地平へ誘う。光差す道となれ！

シンクロ召喚！駆け抜けろ！ロード・ウォリアー！」

ＡＴＫ／３０００

「チューニング・サポーターの効果で１枚ドロー。バトル！ロード・ウォリアーでレディ・オブ・ファイアを攻撃！」

まずい！このままじゃ負ける！

「罠発動！ディフェンド・ヒーロー。攻撃対象を別のＨＥＲＯに変更できる。ＴＯＲＮＡＤＯに攻撃対象を変更。くっ！」

駆　ＬＰ６００→４００

「俺はこれでターンエンドだ。」

「俺のターン。」

・・・モンスター引く確率低いなぁ。こんなときもあるか。

「俺はレディ・オブ・ファイアを守備表示に変更。」

ＡＴＫ／１３００→ＤＥＦ／１０００

「カードを１枚伏せる。エンドフェイズ、レディ・オブ・ファイアの効果発動。俺の場にＥ・ＨＥＲＯは１体。よって２００ポイントのダメージを与える。」

遊星　ＬＰ２３５０→２１５０

「ターン終了。」

「俺のターン、俺はロード・ウォリアーの効果を発動。１ターンに１度デッキからＬｖ２以下の戦士族または機械族モンスターを１体特殊召喚できる。俺はスピード・ウォリアーを特殊召喚。」

ＡＴＫ／９００

「バトル！ロード・ウォリアーでレディ・オブ・ファイアを攻撃。」

ロード・ウォリアーの爪でレディ・オブ・ファイアは破壊された。

「スピード・ウォリアーで直接攻撃！」

くっ、これを防ぐにはこれしかない！

「速攻魔法クリボーを呼ぶ笛を発動。デッキからハネクリボーを特殊召喚。」

ＤＥＦ／２００

「ソニックエッジ！」

スピード・ウォリアーの回し蹴りでハネクリボーが破壊された。

「カードを２枚伏せてターンエンドだ。」

「俺のターン！俺は魔法カード発掘作業を発動。手札を１枚墓地に送り、カードを１枚ドローする。」

！？このカードは・・・これに賭けるしかない。

「俺は魔法カード融合誕生を発動。デッキの上からカードを５枚墓地に送り、その中に融合素材が揃っていれば融合召喚できる。」

「何！？」

「墓地に送られたのはスパークマン、バブルマン、ヒーローシグナル、増援、フェザーマン。俺はスパークマンとバブルマンとフェザーマンを融合！現れろ！Ｅ・ＨＥＲＯテンペスター！」

ＡＴＫ／２８００

「バトル！テンペスターでスピード・ウォリアーを攻撃！カオステンペスト！」

テンペスターから出された光線でスピード・ウォリアーは破壊された。

遊星　ＬＰ２１５０→２５０

「俺はテンペスターの効果発動。俺の伏せカードを墓地に送ることでテンペスターは戦闘によっては破壊されなくなる。ターンエンド。」

これで次のターンロード・ウォリアーの攻撃されても俺のライフは余る。テンペスターの攻撃力を超えるモンスターが出ない限り俺は耐えられる。

「俺のターン！俺はジャンク・シンクロンを召喚。」

ＡＴＫ／１３００
２枚目だと！？しかもこの状況で引き当てるなんて・・・。
「ジャンク・シンクロンの効果でスピード・ウォリアーを特殊召喚。」
ＤＥＦ／４００
「さらにロード・ウォリアーの効果でニトロ・シンクロンを召喚。」
ＡＴＫ／３００
またシンクロ召喚！？このデュエル何回目だよ。
「Ｌｖ２のスピード・ウォリアーにＬｖ２のニトロ・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚！いでよ！アームズ・エイド！」
ＡＴＫ／１８００
「さらにＬｖ４のアームズ・エイドにＬｖ３のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし叫びが、こだまの矢となり空を裂く。光差す道となれ！シンクロ召喚！いでよ！ジャンク・アーチャー！」
ＡＴＫ／２３００
ここにきてジャンク・アーチャー・・・。
「ジャンク・アーチャーの効果発動！１ターンに１度相手モンスタ

ーをエンドフェイズまで除外できる。俺はテンペスターを除外する。
ディメンジョン・シュート！」

ジャンク・アーチャーから放たれた矢によりテンペスターは除外された。

そう・・・俺の・・・

「ジャンク・アーチャーで駆に直接攻撃！スクラップ・アロー！」

・・・負け・・・。

駆　ＬＰ４００→０

駆と遊星の対決は遊星に軍配が上がったのであった。

## 第１３話　駆ｖｓ遊星（後編）融合ｖｓシンクロ（後書き）

どうでしたか？

今回から前書きに前回のあらすじを書いてみました。

次回は遊星ｖｓジャック。といってもかなり飛ばし飛ばしになると思います。

それではご指摘やご感想をお待ちしています。次回もお楽しみに。

## 第１４話　赤き龍が導く未来　フォーチュン・カップ決着！（前書き）

～前回のあらすじ～

フォーチュン・カップ決勝戦駆ｖｓ遊星。ＴＯＲＮＡＤＯで反撃を開始した駆だが、その後は一進一退の攻防となり、テンペスターで遊星のライフを大幅に削るもののジャンク・アーチャーでテンペスターを除外されてしまい、駆は無念の敗北を喫することになった。

## 第１４話　赤き龍が導く未来　フォーチュン・カップ決着！

駆ｓｉｄｅ

「決着！フォーチュン・カップ決勝戦、一進一退の攻防を制し、ジャックとのファイナルデュエルに駒を進めたのは、不動遊星だー！」

負けたか・・・さすが原作主人公・・・強い・・・。

「いいデュエルだったな。」

いつの間にか遊星が目の前にいた。

「うん。楽しいデュエルだった。でも次は負けないよ。」

「あぁ。楽しみにしている。」

そう言って俺と遊星は握手をした。

その後、俺と遊星は龍可たちのところに合流した。そこで・・・、

「皆、早くこの会場から出るんだ。」

「しかしあんちゃんはキングとの対決があるだろ？」

「この会場にはシグナーが４人いる。これ以上シグナー同士で戦うのは危険だ。俺とアキのデュエルを見てて分かるだろう。」

本当は5人だけどね。俺も痣があるから。まだ誰も知らないと思うけど・・・いや、ゴドウィンはもう気づいてるかも。

「でも、遊星のお友達が・・・。」

「ゴドウィンとは俺が話をつける。みんなは早くここから離れろ。」

そう言って遊星はゴドウィンのところに走って行った。

「あんちゃんがああ言ってるんだ。わしらも退散するとしよう。ちょっと残念だけどね。」

ということで会場を出る俺たち。ま、あいつらが出させてくれないと思うけどね。

と思った瞬間、案の定変な奴らに取り囲まれた。そして・・・、

「ヒッヒッヒッヒ。」

不気味な笑い声とともにイェーガーが姿を現した。・・・その笑い声はなんとかならないのか？

「お前は・・・。」

「残念ながらあなたたちを帰すわけにはまいりません。ヒッヒッヒッヒッヒ。」

「なら腕ずくで通らせてもらう！」

と言って氷室がイェーガーの胸ぐらを掴んだがイェーガーが何かを言った途端氷室が驚き、舌打ちをして手を離した。

「仲間想いのあなたがたのことだ、そんなことはできませんね。さぁ、早く席にお戻りください。」

これに従い、俺たちは席に戻る。ま、氷室が言われたのは遊星の友達のことだろうけど、すぐに解放されることになるんだよね。

だから、あの場を強行突破することもできたんだよね。この時計型麻酔銃を使えばね。・・・あ、この時計型麻酔銃はある日俺の鞄の中に入ってたんだ。一緒に神と名乗る奴からの手紙が入ってたけど、自由に使っていいとのこと。他にはデュエルディスク型麻酔銃や蝶ネクタイ型変声器とかが入っていた。・・・どっかのアニメじゃあるまいし・・・。

ともかくこれと俺の武術で突破することも可能だったけど、遊星ＶＳジャックのイベントはこのアニメでは重要だからね。だから、ここは素直に従うことにしたってわけ。

その後、遊星ＶＳジャックのファイナルデュエルが始まった。

デュエルは一進一退の攻防だったがジャック優勢で進んでいた。

そしてジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンと遊星のスターダスト・ドラゴンが激突した時、遂にその時が来た。

そう、赤い雷とともに赤き龍が姿を現した。
会場は騒然としている。そりゃそうだろうね。誰も召喚してないはずのモンスターが現れたんだから。
「何？痣が・・・熱い・・・・。」
龍可の痣が輝きだした。
「大丈夫龍可？」
「・・・うん。大丈夫。」
「そう。ぐっ！・・・・」
俺の痣も輝きだしたか。
「か、駆！？その痣、もしかして。」
「そう、赤き龍の痣だよ。」
「う、嘘！？駆が5人目のシグナーだったの？」
「たぶんね。」
5人目ではなく6人目だろうけどね。5人目の痣はおそらくは・・・。ぐっ！また痣が・・・。横を見ると龍可も同じような状況だった。
その時、赤き龍から突風が発生し、俺の目の前は真っ白に・・・。

気がつくと俺は赤き龍が作り出した空間にいた。俺のまわりには赤い膜がおおっていて、目の前の光の道を走る遊星とジャックについて行っている。

「やっぱりここに連れてこられたか。」

ふと周りを見ていると俺と同じように赤い膜でおおわれた龍可とアキがいた。

「龍可！」

「駆！ここはどこ？」

「多分、赤き龍が作り出した空間だと思う。」

多分じゃなくてそうだけどね。

すると、目の前に祭壇が見えてきた。そして祭壇の下の方にたくさんの人々が跪いて何かをお願いしている。また、上の方では６人の人が手を大きく広げていた・・・６人！？原作では５人だったはずじゃ！まさか・・・、

と思い、すれ違いざまによく見ると、６人の腕に龍の痣があり、その中に俺が持っている痣もあった。

「やっぱり・・・・。」

祭壇を過ぎていくと今度はネオドミノシティとサテライトが現れた。

「あれは・・・ネオドミノシティとサテライト！」

だが、サテライトの所々に青い炎が出てきて、建物が崩壊していった。

「何！？どうしたの？」

と龍可が言ってるうちに青い炎は蜘蛛の地上絵の形になった。

「これが・・・未来・・・。」

「これが未来なの！？じゃあサテライトは滅びる運命にあるってこと？」

「今のところはね。でもそれは俺達次第で変わる。」

「変わるんだ。なら良かった。」

龍可、ホッとしているようだけど、それはあなたも入ってるからね。

デュエルの方は続行するようになったらしくジャックが2枚カードを伏せてターンエンドした。

デュエルはまたも一進一退の攻防だったが、逆転で遊星が制した。そして決着がついた瞬間、また目の前が真っ白になり、気がつくと会場に戻っていた。

会場の俺と龍可以外の人は何が起きてるか分からないみたいになっていた。

「何が起きた？」

「赤い龍が飛んだと思ったら、目の前が光になっちまったよ。」

「あ、あれ見て！」

龍亞が指している方を向くとジャックのライフが０になっていた。

「ジャックのライフが。」

「このデュエル・・・「遊星が勝ったわ（よ）。」」

「「えぇ！」」

周りのみんなは驚いてるね。そりゃそうか。キングが負けたんだから。

「つ、遂に決着！ウィナー！不動遊星！キングのジャック・アトラスの無敗神話は打ち破られ、ここに新たなキングの誕生を我々は見る！新たななるキング！その名は不動遊星！ニューキングは不動遊星！サテライト出身のキングの誕生だ！」

ということでフォーチュン・カップは遊星がキングになるという波乱の展開（アニメ的には普通だが。）で幕を閉じた。

## 第１４話　赤き龍が導く未来　フォーチュン・カップ決着！（後書き）

最初に遊星ｖｓジャックのデュエルを飛ばしてすみません。詳しく見たい人はアニメ５Ｄ，ｓの第２５話、２６話をご覧ください。

次回は・・・未定です。すみません。多分駆が精霊世界に行く話になると思います。

では、ご指摘やご感想お待ちしています。次回もお楽しみに。

## 第１５話　駆の新しい力　シグナーの龍が明らかに（前書き）

今回は本当にぐたぐたな文になりました。

今回からオリカがでます。といっても今回デュエルはないので精霊としての登場だけですけどね。ご了承ください。

～前回のあらすじ～

フォーチュン・カップ決勝で遊星に敗退した駆は、そのままスタンドで遊星ｖｓジャックのデュエルを観戦。赤き龍の空間に飲み込まれたりとハプニングは起こったがデュエルは激しい死闘のすえ、遊星に軍配があがり遊星がキングとなったのであった。

## 第１５話　駆の新しい力　シグナーの龍が明らかに

駆ｓｉｄｅ

俺は今スタジアムの地下にいる。あの後、遊星に記者達が殺到し、この地下を使って辛くものがれたというわけだ。

「それにしてもすげぇぜあんちゃんよ！本当にキングになっちまうんだからな。」

「遊星なら必ずキングになるって信じてたよ！」

「うんうん。」

まぁ、遊星の実力ならキングになっても不思議じゃないと思うけど。

「そんな呑気な事も言ってられないぞ。遊星の仲間を誘拐した連中だ。何をしてくるかしれたもんじゃねぇ。」

確かにね。

「とりあえずは雑賀の隠れ家で大人しくしてるしかねぇな。龍亞と龍可と駆も一緒にいた方が安全だろう。」

「本当！？やったー！また遊星と一緒にいられる！」

喜んでるな龍亞。それに対して龍可は・・・。

「遊星・・私見てた。遊星とジャックのデュエルをあの光の中で。」

「え？」

「サテライトが・・その・・。」

蜘蛛の地上絵が出たあの映像のことだね。

「あれはいったい・・。」

「わからない。ただ、あの光景がサテライトの未来なら絶対に阻止する。」

「・・シグナーって何なの？」

「じゃ～ん！そういう話はわしの出番だ！良いかい龍可ちゃん、シグナーってのは・・おぉっと！その前に世界を股に掛けたわしの冒険の数々を話せばならんの！いひひひひ。」

その後、雑賀の隠れ家に着いた駆達は本題の赤い竜の話を聞いていて、矢薙のじいさんが赤い竜の痣の集合体の絵を描いていた。

「もう随分と昔の話になるからな～。うろ覚えだがこんな感じだ。」

完成した絵を見るとそこには原作通りの絵が出来上がっていた。だが１つ違うところがあった。それは、

「（俺の痣もある・・・。）」

そう、本来なら龍亜が覚醒した後に出るはずの６人目の痣がすでに描かれていた。

「この尻尾が・・。」

「どうしたの遊星？」

遊星は皆に自分の痣を見せた。

「「「「あぁ！」」」」

それは絵の尻尾にあたる部分と同じ痣だった。

「龍可、お前のも。」

龍可も自分の痣を皆に見せた。

「龍可はこの手の部分・・どういう事なの？」

「わしが聞いた星の民の伝説では、赤い竜の頭、翼、手、足、尻尾の５つの部分がそれそれ別れてシグナーと呼ばれる人達に痣となって封印されたの事じゃった。」

「待てよ・・今わかってるシグナーは遊星、龍可、ジャック、それに十六夜アキの４人、でもあの赤い竜が現れたって事は・・。」

「５人目もどこかにいたのかもしれんの～。」

「その５人目って駆のことじゃないの？」

「「「「え？」」」」

全員驚いてるね。そりゃそうか。龍可とアキさん以外は誰も知らなかったんだし。

「駆もシグナーだったの！？」

「うん。でも俺は残ってる頭の痣じゃなくて、この手の部分にあるこの痣だよ。」

そう言って自分の痣を皆に見せた。

「これは・・・わしが知ってる限りじゃこんな痣は知らんの～。」

「これって俺は5人目じゃなく6人目のシグナーなんじゃない？」

「そうかもな～。」

ていうかそうなんだけどね。ま、知らなくても無理ないか。

「俺もどっかに痣がないかな～。」

龍亞は痣がないか体中を調べている。ていうかみんな右腕にあるんだから右腕を調べれば十分だと思うんだけど・・・。

そんなこと思ってると、龍可が突然倒れそうになったが矢薙のじいさんがなんとか支えた。

「どうした龍可！？」

「大丈夫。ちょっと疲れただけ。」

「無理もないな。この2日はいろいろありすぎたからな。」
確かにね。って思ってると俺もふらふらっとなった。
「駆！？」
そのまま俺の精神は昨日と同じく強制的に精霊世界へと旅立った。

「・・・またここか。」
目が覚めるとそこは昨日来た時と同じヒーローシティにいた。
「クリクリー」
横にはハネクリボーもいる。そして、
「ようこそマスター。」
前回出迎えてくれたフェザーマンとスパークマンもいた。それにしても、
「昨日から思ってたが何故俺がマスターなんだ？」
「それはもちろんマスターがＨＥＲＯ使いだからです。」
そういうこと。でも、

「ＨＥＲＯデッキ使ってる人なんて他にもいるんじゃないの？」
「いいえ。マスターのほかにはいません。私達の精霊のデッキを使ってる人は。」
「は！？俺のＨＥＲＯデッキって精霊が宿ってるの？」
「はい。だが、人間界で実体化できるのはそこにいるハネクリボーとごくわずかな精霊だけです。なので私達みたいな人達はこの精霊界でしかマスターと会うことはできないのです。」
へぇ～。そうなんだ。
「ところでなぜ俺はここにいる？」
「それは、「私があなたをここに呼びました。」えっ？」
フェザーマンとスパークマンの後ろからエリクシーラが現れた。
「私がここの王であるエリクシーラです。」
・・王か・・・。確かに４体融合の上に元々の攻撃力が１番高いから妥当だけど・・・正直デュエルであんまりでないんだよなぁ。
「で、俺をここに呼んだ理由は？」
「それは城で話をします。ついてきてください。」
城？ここにそんなものがあるのか？見たところそんなものは見当た

らないが・・・。

とりあえずエリクシーラについて行っているが、行く先々でＨＥＲＯたちが俺に尊敬の眼を向けてくる。俺がこいつらを使ってるからか？

しばらくするとヒーローシティのど真ん中にその城はあった。そしてその中に入った。すると、

「「「お待ちしておりました。マスター。」」」

・・・見たことないやつが俺を待っていた。３人とも妖精みたいなやつだ。３人とも似ているがちょっとずつ違う。まずは、

「私はＥ・ＨＥＲＯエンジェル・シャイアの精霊です。」

こいつは髪の色が黄色い。

「私はＥ・ＨＥＲＯエンジェル・ウィングの精霊です。」

こいつは髪の色が緑色だ。こいつだけ翼が大きい。

「私はＥ・ＨＥＲＯエンジェル・アルドの精霊です。以後お見知りおきを。」

こいつは髪の色が青色だ。こいつだけ妖精のくせに杖を持っている。

って説明してるけどなんだこいつら？

「マスターにはこの３人のカードを渡そうと思いまして来てもらい

ました。」

そう言って渡される４枚のカード・・・４枚？

「あぁ、１枚はこの３人に関係する融合モンスターです。」

なるほどね。しかしこの融合モンスターは結構使えるかもな。そして後の３枚は・・・って！

「ちゅ、チューナー！？」

そうこいつらはＥ・ＨＥＲＯのチューナーモンスターだった。

「そうですよ。」

「じゃあＥ・ＨＥＲＯのシンクロモンスターっているの？」

「残念ながらそれはいません。」

いないんだ。ま、いっか。しっかしよく効果をみているとこいつらもなかなか使える。これはおもわね戦力アップだな。

「ちなみに私達は人間界でも実体化できるのでマスターについて行きます。」

え？

「「「ということでマスターよろしくお願いします。」」」

あはははは・・賑やかになりそうだな。ま、龍可が喜びそうかな。

「まっ、いっか・・・っ！」

いきなり痣がひかりだした。もう遊星がダークシグナーと戦ってるってことかな。

「！？マスター、その痣は・・まさかマスターがシグナーだったとは。」

「・・・どうしたの？」

「しかもその痣ということはマスターがムーン・ライト・ドラゴンの本当の所持者。」

！？ムーン・ライト・ドラゴン？

「それが俺が救うドラゴンの名前なの？」

「そうだ。」

月光の龍か。ていうか名前そのまんまじゃん。

「本来なら今すぐにでも救いに行ってもらいたいのだが、時期的に今は駄目だ。時期が来たらまた呼ぶ。」

「呼ぶのはいいけどいきなりはやめてくれ。」

「・・分かった。その時はアルドに連絡しよう。」

「助かる。」

・・まったくいきなりここにくるのは嫌だよ。龍可たちも心配するだろうし。って俺、確か倒れてそのままこっちに来たから今現在龍可たちが心配してるじゃん。

「人間界のことが心配か。」

心を読まれた！？

「まぁ、もう用は終わったしいつでも人間界に帰ってもいいぞ。」

「でもどうやってか・・・。」

そこで俺の精神は人間界へと帰って行った。

「・・・戻ったか。」

それにしてもいきなり戻すなよなぁ。

「起きたんだね。」

ふと隣を見てみると龍可がいた。って、一緒に寝てたってこと？

「・・・心配かけたみたいだね。」

「うん。っていっても私も起きたのはついさっきだけどね。」

外を見てみるともう朝だった。

デッキを見てみると精霊界で渡された４枚のカードがちゃんと入っていた。デッキ組み直すか。

『・・・私達のこと忘れてません？』

「・・・いたんだ。」

気配がないから気付かなかったよ。

「うわ～、妖精みたい。駆の新しい精霊？」

「うん。実は寝ている間に精霊界に行ってその時貰ったんだ。みんな、龍可に挨拶して。」

『うん。エンジェル・シャイアです。よろしく～。』

『エンジェル・ウィングです。よろしく。』

『エンジェル・アルドです。よろしくお願いします。』

「うん、よろしくね。それにしても可愛い！」

あはは、本当に嬉しそうだな。

と、こんな感じで駆は新しい力を手に入れたのだった。

## 第１５話　駆の新しい力　シグナーの龍が明らかに（後書き）

どうでしたか？

ぐたぐたな文章ですみません。全然思いつかなくてこんな感じになってしまいました。

オリカのほうはデュエルで出てきしだいこの後書きのほうで紹介させていただきます。

次回はアルカディアムーブメントに突入。駆がみんなを守るために動き出す！？

それではご指摘やご感想をお待ちしています。次回もお楽しみに。

# 第１６話　突入！アルカディアムーブメント　Ｖ・ＨＥＲＯ降臨！（前書き）

お待たせしました。第１６話です。

駆がちょっと暴れます。

～前回のあらすじ～
フォーチュン・カップ終了後、突如精霊世界に連れて行かれた駆。
そこでＨＥＲＯのチューナーという新しい力を手に入れた駆。精霊も駆について行き、賑やかになったところでダークシグナーが暗躍を始める？

# 第１６話　突入！アルカディアムーブメント　Ｖ・ＨＥＲＯ降臨！

駆ｓｉｄｅ

・・・はい。ただいま何故かアルカディアムーブメントにいる駆です。

何故アルカディアムーブメントにいるかというと、龍亞がアキさんに協力してもらおうよって言い出し、俺と龍可以外の人がみんな賛成に、俺と龍可もしぶしぶついてきたというわけです。

ま、いいけどね。これからアルカディアムーブメントを殲滅しようと思っていた俺には好都合だね。だけど他の人は巻き込みたくなかったなぁ。ま、いっか。

「面白い話ですね。そのダークシグナーと呼ばれる連中がこの童実野シティを狙っていると。」

で、今ディヴァインが目の前にいて龍亞が話をしている。

「そう！そいつらと戦うためのシグナーなんだ！だからアキ姉ちゃんの力を貸して欲しいんだ。きっと同じ痣を持っているお姉ちゃんなら遊星を助けられるよ。」

「それで、遊星君からの連絡は？」

「まだだ。」

「ん～・・・良いでしょう。我々の力を全面的にお貸ししましょう。

」

「本当!?」

あらら・・・龍亞以外びっくりしてるよ。ま、こんな簡単に承諾されるとは思ってもみなかっただろうからね。

「アルカディアムーブメントは純粋にサイコデュエルの研究を行っているのですが、最近は変な噂を立てられて困っていたのです。我々が皆さんのお役に立てるなら喜んで。」

「やった!」

「良かった!」

「そうだ!彼女を呼びましょう。すぐに戻ります。失礼。」

そう言って龍亞は出て行った。

「どうよ!俺の思った通り。あの人悪い人じゃないって!」

「こんなにトントン拍子で話が進むとはの〜。」

「意外だな:だが油断しない方がかも良いかもしれん。」

「あぁ〜あ〜やだやだ、大人は疑い深くって。」

「それより料理は?俺お腹減っちゃった!」

「龍亞、静かに座って。」

と言った瞬間部屋に催涙ガスが充満し、俺以外の全員が眠ってしまった。

その時、扉が開き、マスクをつけたディヴァインと隊員４人が入ってきた。

「！？何故お前は眠っていないんだ？」

ディヴァインは俺が起きてることに驚いてるようだ。

「催涙ガスなんかが俺に通用するとでも？」

と返しておいた。ま、催涙ガスは前の世界で何度もやられたからね。耐性がついたみたい。

「まぁいい。ならこれで眠ってもらおうか。」

と言って俺にサイコパワーでファイアーボールを当ててきた。だけど、

「だからそんなんじゃあ俺は倒せないよ。」

いやぁ、それ以上のやつを食らったことがあるからね。この程度は平気だよ。

「あれを耐えるか。なら力ずくでもお前を眠らせてもらおうか。行け！お前ら。」

そう言って隊員４人が俺に突っ込んできた。しかし、

～１０秒後～

隊員４人の屍がそこに転がっていた。武術も多少心得てるからね。

「何！？お前何者だ？」

「何者って俺はただの中学生だけど。」

嘘つけという突っ込みはなしね。

「くっ！なら俺とデュエルしてもらおうか。」

「別にいいですよ。」

最初からそのつもりだったけどね。

「まぁお前もサイコパワーがあるか確かめたいとこだったからな。好都合だな。」

もしかして俺をアルカディアムーブメントに入れるつもりか？入る気はさらさらないがな。ていうか今から潰れるところに誰が入るかっつーの。

「ではいくぞ。」

「「決闘！」」

駆　ＬＰ４０００

ディヴァイン　ＬＰ４０００

「私のターン、私はクレボンスを召喚。」
ＡＴＫ／１２００
「カードを１枚伏せてターンエンドだ。さぁかかってくるがいい。」
「様子見ですか？」
「さぁね。さぁ、あなたの力を見せてみろ。」
「じゃあ要望通りに。俺のターン。」
何だこの手札は？このターンで終わらせろといってるようなもんだ。
さてまずはあのリバースカード、原作なら龍亞戦の時はバトル・テレポーテーションだったけど・・・。
「手札から速攻魔法サイクロンを発動。そのリバースカードを破壊する。」
「何！？」
破壊されたのは・・・次元幽閉だと！？危ねぇ。ま、これで俺の勝ちは確定かな。
「さてこのターンであんたを終わらすよ。」
「何！？１キル宣言だと！？（それは無理だクレボンスは８００ポイントライフを払うことで攻撃を無効にすることができる。このタ

ーンで決着をつけることは不可能だ。）」

「俺は融合を発動。手札のワイルドマン、スパークマン、オーシャンを融合。現れろ！Ｖ・ＨＥＲＯトリニティー！」

ＡＴＫ／２５００

「３体融合だと！？」

「トリニティーは融合召喚に成功したターン攻撃力が倍になる。」

「何だと！？」

いちいち驚きすぎだよ。

ＡＴＫ／２５００→５０００

「バトル！トリニティーでクレボンスに攻撃！」

「クレボンスの効果発動。このカードが攻撃対象になった時、８００ポイントライフを払うことで攻撃を無効にすることができる。」

ディヴァイン　ＬＰ４０００→３２００

「これで１キルはなくなったな。」

「何勘違いしてんの？第一、クレボンスの効果ぐらい知ってるし。トリニティーは１度のバトルフェイズに３回攻撃ができる。」

「何！？」

だからいちいち驚きすぎだって。

「いけ！トリニティー！２回目の攻撃。」

「クレボンスの効果発動。」

ディヴァイン　ＬＰ３２００→２４００

「３回目の攻撃。」

「クレボンスの効果発動。」

ディヴァイン　ＬＰ２４００→１６００

「さぁこれで攻撃はしゅうｒ「速攻魔法融合解除発動！」何！？」

スパークマン　ＡＴＫ／１６００
ワイルドマン　ＡＴＫ／１５００
オーシャン　ＡＴＫ／１５００

「バトル続行！オーシャンで攻撃！」

「くっ！クレボンスの効果発動。」

ディヴァイン　ＬＰ１６００→８００

「これでクレボンスの効果はもう使えない。いけ！ワイルドマン！ワイルドスラッシュ！」

「くっ！」

ディヴァイン　ＬＰ８００→５００

「これで最後だ！スパークマンで直接攻撃！スパークフラッシュ！」

「ぐわあぁぁぁ！」

ディヴァイン　ＬＰ５００→０

はい。この世界で初の１キル達成。弱いなこいつ。

「くそ・・・だがこれで終わると思うｎふにゃふにゃ・・・。」

麻酔銃を当ててやった。ったく、またファイアーボールを当てようとしただろこいつ。

『見事でしたね。駆。』

アルドが話しかけてきた。

「まぁね。ところでその敬語口調はなんとかならないのか？」

あの後、精霊にマスターと呼ばれるのは恥ずかしいから普通に駆って呼んでいいぞって言って、ついでに敬語口調じゃなく普通に話しかけていいからと言ったんだが、アルドだけはまだ敬語口調になっている。

『・・・努力します。』

精霊世界ではシャイアとウィング以外この敬語口調が主に使ってたらしいからな。しょうがないか。

「・・・あれ？俺は寝てたのか？」

氷室さんが起きたようだね。

「駆、これは何だ？」

「こいつら催涙ガスで眠らせて龍可と俺をアルカディアムーブメントに入れ、氷室さんたちはどこかに閉じ込めるつもりだったんですよ。」

「何！？やっぱり油断ならん奴らだな。ところでお前はどうして眠ってない？」

「催涙ガスなんて俺には効きませんよ。」

「・・・そうか。何か納得できないがこの際どうでもいいだろ。で、こいつらはお前がやったのか。」

「はい。４人は気絶しててディヴァインはデュエルで片した後、麻酔銃で眠らしました。」

「麻酔銃って・・・。まぁいい。」

「とにかくこの3人を起こしてここから脱出しましょう。」

「そうだな。」

その後、他の3人を起こし、さっきの説明をし、ここから脱出を試みた。

が、

「あなた達は・・・。」

逃げる途中でアキさんに出会ってしまった。ってちょうどいいか。この人が目的なんだし。

「どうしてここに？」

「アキ姉ちゃんに協力してもらうためだよ。」

「協力？」

と龍亞がアキさんを説得してたが、

「ここにいたのね。」

ダークシグナーとなったミスティが現れてしまった。

～同じころアルカディアムーブメント内ディヴァインの部屋～

「ではさらばだ。いけ！サイココマンダー！」

「きゃあああああ！」

カーリー　ＬＰ４００→０

「う・・そ・・。」

カーリーはビルから転落し、死んだかに見えた。が、

紫色の何かがカーリーを包み込み、カーリーはダークシグナーとなった。

ここアルカディアムーブメントでダークシグナーが暗躍する。

## 第１６話　突入！アルカディアムーブメント　Ｖ・ＨＥＲＯ降臨！（後書き）

どうでしたか？

次回はアキとミスティのデュエルを描くつもりです。原作とはちょっと変える予定です。

ではご指摘やご感想お待ちしています。次回もお楽しみに。

## 第１７話　ダークシグナー暗躍！憎しみの炎（前書き）

お待たせしました。第１７話です。

パソコンの調子がかなり悪くてちょっと投稿が遅れました。

では第１７話の始まりです。

～前回のあらすじ～

アキに協力を求めるため、アルカディアムーブメントに行った駆達。だが、ディヴァインの罠で駆以外が眠ってしまった。だが、駆は罠をもろともせず、デュエルでディヴァインを打ち破った。危険だからと逃げようとする最中にアキと出会った駆達だがそこにダークシグナーのミスティが現れてしまった。そしてディヴァインにより殺されたはずのカーリーは・・・。今、アルカディアムーブメントでダークシグナーの暗躍が始まる。

## 第17話　ダークシグナー暗躍！憎しみの炎

駆side

そんな馬鹿な！何故ミスティが現れる！？確かミスティが現れるのは地震の後だったはず。なのに何故・・・？

その時、建物が揺れ、地震が起こった。

「な、何だ！？」

「遂に目覚めたのね。カーリー。」

そうミスティがつぶやいたのを聞いたのは俺だけだった。

「何なんだ今の地震は！？みんな大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ。」

「こっちも大丈夫よ。」

「そうか。」

それにしてもミスティが現れるのが早いのは何故？やっぱりイレギュラーの俺が来たからか？

だとしたらもう遠慮することはないね。早くミスティに真実を伝えなきゃ。

～その頃アルカディアムーブメント内ディヴァインの部屋～

カーリーと対峙するディヴァイン。

「そんな馬鹿な・・・あの高さから落ちて無事なはずは・・・。」

「ディヴァイン・・・私はお前を葬るために蘇った。」

「何だと!?」

「この痣が疼くのさ・・・薄汚いお前の魂を生贄にしろとね。受けるがいい・・・私の闇のデュエルを。」

「闇のデュエルだと?」

その時、カーリーの痣が光だし、カーリーを包み込んだ。

「な、何だ!?」

そして中からダークシグナーとなった姿のカーリーが現れ、笑いながらデュエルディスクを起動する。

「貴様がどんな仕掛けで無事だったかは知らんが、私にデュエルを挑んでくるとは身の程を知らないおろか者だな。」

「ほざきなよディヴァイン。今度はさっきのようにはいかないよ。

貴様の腹の底に渦巻く欲望ごとお前を闇の世界に放り込んでやる！」

「わけのわからんことを。いいだろう、受けてやる貴様のデュエルを。もう1度とくと味わえ！サイコデュエルの力を！」

「「決闘！」」

ディヴァインとカーリーの闇のデュエルが始まった。

駆ｓｉｄｅ

「私はアルカディアムーブメントを潰しに来た。あなたは私と戦うしか道はない。」

「いいわ。あなたが私の何を恨んでるかは知らないけど、相手になってあげる。」

そう言ってアキさんは壁の穴からデュエルディスクを取り出し、セットした。

「ここが私の帰るべき場所。ここをなくすというなら、あなたとは戦うしかない。」

え？話が飛びすぎだって？詳しくはアニメ５Ｄ，ｓの第３８話を観てね。まぁ簡単に説明するとミスティが復讐とか言ってアキさんにデュエルを挑んだ。ただそれだけだよ。簡単に説明しすぎたかな？

ってそんなこと言ってる場合じゃない。早くミスティに真実を伝えなきゃ。でも2人ともデュエルディスクを起動している。なら、

「待って！そのデュエル俺もやる。」

「駆！？」

俺自身もこのデュエルに加わるしかない。

「・・・あなたはフォーチュン・カップで決勝に進出した山岸駆ね。いいわ2人でかかってきなさい。あなたもシグナーみたいだし。」

「あなた・・・何故？」

「もちろんアキさんを助けるためだよ。」

ということにしておこう。本題は違うけどね。

「助ける？私みたいな化け物を？」

「あなたは化け物じゃない。それよりデュエルが始まりますよ。」

「・・・。」

「いくわよ。」

「「「決闘！」」」

アキ＆駆　ＬＰ４０００

ミスティ　ＬＰ４０００

（順番はアキ→ミスティ→駆→ミスティの順です。アキと駆の場は共有です。ほとんどＴＦと同じと思ってくれればいいです。）

「私のターン、夜薔薇の騎士を召喚。」

ＡＴＫ／１０００

「夜薔薇の騎士の効果発動。このカードが召喚に成功した時、手札からＬｖ４以下の植物族モンスターを特殊召喚できる。現れよ！ロード・ポイズン。」

ＡＴＫ／１５００

「Ｌｖ４のロード・ポイズンにＬｖ３の夜薔薇の騎士をチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚、現れよ！ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ＡＴＫ／２４００

いきなり飛ばしてるねアキさん。ただ、ダークシグナー相手にそれが通用するか・・・。

「ブラック・ローズ・ドラゴン・・・十六夜アキ、これがあなたがシグナーである証。」

「私はカードを３枚伏せてターンエンド。」

「私のターン、手札からフィールド魔法サベージ・コロシアム発動。

」

あたりの風景がコロシアムに変化した。

「このカードがある限り攻撃表示モンスターは攻撃しなければならない。そして戦闘したモンスター1体につきプレイヤーは３００ポイントライフを回復する。更に私はもう1枚永続魔法を発動。フィールドバリアの効果により、フィールド魔法を破壊すること、新たなフィールド魔法を発動することはできない。」

「（フィールド魔法を守るカード？）」

なるほどね。地縛神を使うにはフィールド魔法が必要だからフィールド魔法を守るには最適のカードってわけね。

「私はレプティレス・ゴルゴーンを召喚。」

ＡＴＫ／１４００

げ！そういえばミスティが使うカードってレプティレスだっけ。忘れてた・・・。

「そして手札から装備魔法アタック・フェロモン。このカードを装備したモンスターが相手モンスターを攻撃した時、そのモンスターの表示形式は攻撃表示となる。私はこのカードをレプティレス・ゴルゴーンに装備。更に新たな装備魔法モルティング・エスケープを発動！このカードは1ターンに1度装備した爬虫類族モンスターをバトルの破壊から守ることができる。そしてこの効果を使った時、装備モンスターの攻撃力は１００ポイントアップする。」

レプティレスならではの装備魔法だね。あいつらの効果ってやっかいだからなぁ。

「レプティレス・ゴルゴーン！ブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃！」

「馬鹿な！？攻撃力１４００で攻撃力２４００のブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃するなんて。自滅行為！」

いや、自滅行為じゃない。これがレプティレスの戦法。

そう思ってる間に互いの攻撃がぶつかり合った。

ミスティ　ＬＰ４０００→３０００

「モルティング・エスケープの効果により、１ターンに１度爬虫類族モンスターはバトルの破壊から免れ、攻撃力が１００ポイントアップする。」

ＡＴＫ／１４００→１５００

「これでブラック・ローズ・ドラゴンは封印できたも同然。」

「「「「「封印？」」」」」

俺以外みんな驚いてるね。

そしてブラック・ローズ・ドラゴンは石化した。

「ブラック・ローズ・ドラゴンが石に！？」

「レプティレス・ゴルゴーンの効果により、レプティレス・ゴルゴーンとバトルしたモンスターは攻撃力が０になり、表示形式の変更ができなくなる。」

「何ですって！」

「何だよその効果！反則じゃん。」

反則って・・・。

ＡＴＫ／２４００→０

「フィールド魔法サベージ・コロシアムの効果発動。バトルしたモンスター１体につき３００ポイントライフを回復する。」

ミスティ　ＬＰ３０００→３３００

「レプティレス・ゴルゴーンと戦うものはすべて石となって朽ち果ててゆく。果たしてあなたは生き残れるかしらね。十六夜アキ。」

「私は守る。私の帰るべき場所を！」

「そう、でもどうかしらね。今頃あなたが崇めているディヴァインも消えているころよ。」

「ディヴァインが？」

「彼を助けたいのならこの私を倒してからいくことね。もっとも、倒せたらの話だけどね。」

「・・・ていうか、俺のこと忘れられてない？」

「・・・ごめんなさいね。完全に忘れてたわ。」

・・・この決闘、干渉しないほうがよかったかな？

「さぁ、あなたのターンよ。坊や。」

坊や扱いかよ。まぁ、中学生だからしょうがないか。

「俺のターン、アキさん、ブラック・ローズ・ドラゴン使っていい？」

「・・・いいわ。」

「ありがとう。助かる。俺は手札から魔法カード魔術師の書庫を発動。デッキから魔法カードを1枚手札に加える。俺は融合を手札に加え発動。手札のスパークマンと場のブラック・ローズ・ドラゴンを融合！」

「「「ブラック・ローズ・ドラゴンを融合！？」」」

何で驚くの！？俺のデュエル見てたら分かるはずだよ。アキさんはしょうがないにしても。

「E・HEROノヴァマスターを融合召喚！」

ATK／2600

「なるほど。ブラック・ローズ・ドラゴンは炎属性。ノヴァマスターはＥ・ＨＥＲＯと炎属性の融合で召喚できるモンスター。それを上手く利用したというわけか。」

説明ご苦労様です。氷室さん。

「・・・見事ね。」

「ありがとうございます。」

魔女状態のアキさんに褒められた。なんか違和感あるなぁ。

「バトル！ノヴァマスターでレプティレス・ゴルゴーンに攻撃！」

「くっ！」

ミスティ　ＬＰ３３００→２２００

「モルティング・エスケープの効果により、レプティレス・ゴルゴーンはバトルでは破壊されず攻撃力が１００ポイントアップする。」

ＡＴＫ／１５００→１６００

「更にレプティレス・ゴルゴーンの効果によりノヴァマスターの攻撃力は０になる。」

ＡＴＫ／２６００→０

「あぁ、ノヴァマスターも攻撃力が０になっちゃったよ。」

それも想定済み。

「サベージ・コロシアムの効果により俺は３００ポイントライフを回復する。そしてカードを１枚伏せてターンエンド。」

アキ＆駆　ＬＰ４０００→４３００

「私のターン、バトル！レプティレス・ゴルゴーンでノヴァマスターに攻撃！」

甘いよ！

「リバースカードオープン！速攻魔法マスク・チェンジ発動！このカードは自分フィールド上のＨＥＲＯを墓地に送り、墓地に送ったモンスターと同じ属性のＭ・ＨＥＲＯを特殊召喚する。」

「「「Ｍ・ＨＥＲＯ？」」」

フォーチュン・カップで使ってないから知らないのも無理ないか。でも龍亞は目の前で使ったんだから知ってるはずだろ！

「俺はノヴァマスターを墓地に送り、Ｍ・ＨＥＲＯ剛火を特殊召喚！」

ＡＴＫ／２２００

「剛火は墓地のＨＥＲＯ１体につき攻撃力が１００ポイントアップする。墓地にはスパークマンとノヴァマスターの２体。よって２００ポイント攻撃力アップ！」

ＡＴＫ／２２００→２４００

「くっ！サベージ・コロシアムの効果により攻撃表示モンスターは必ずバトルしなければならない。いけ！レプティレス・ゴルゴーン！」

「迎え討て！剛火！」

剛火が出した炎がレプティレス・ゴルゴーンに直撃した。

ミスティ　ＬＰ２２００→１４００

「モルティング・エスケープの効果によりレプティレス・ゴルゴーンは破壊されず、１００ポイント攻撃力がアップする。」

ＡＴＫ／１６００→１７００

「さらにレプティレス・ゴルゴーンの効果により剛火は石となる。」

ＡＴＫ／２４００→０

「そしてサベージ・コロシアムの効果により私は３００ポイントライフを回復する。」

ミスティ　ＬＰ１４００→１７００

「私はターンを終了するわ。さぁ、あなたのターンよ。黒薔薇の魔女。」

「私のターン、罠発動！シンクロ・スピリッツ。このカードは墓地

のシンクロモンスターをゲームから除外し、そのシンクロ召喚素材モンスターを墓地より復活させる。私はブラック・ローズ・ドラゴンをゲームから除外し、夜薔薇の騎士とロード・ポイズンを特殊召喚。」

夜薔薇の騎士　ＡＴＫ／１０００
ロード・ポイズン　ＡＴＫ／１５００

「更に罠発動、次元回帰。ゲームから除外されたモンスターをすべてデッキに戻す。これでブラック・ローズ・ドラゴンはデッキに復帰。」

またブラック・ローズ・ドラゴンを呼ぶつもりだね。そしてあの効果を使うってところかな。

「・・・あなたの剛火、破壊してしまうけどいいかしら？」

!？魔女状態のアキさんが俺を気遣った？魔女状態でもタッグパートナーには気遣いを見せるんだね。ちょっと驚きだな。

「剛火を破壊するってどうやって破壊するんだろう？」

ここまでやってわかんないの龍亞!？ダークシグナー戦が終わったら龍亞は勉強タイムだね。それはともかく俺の答えは、

「いいですよ。あなたの思っている戦略が今は最善の策だと思います。そのためにマスク・チェンジ以外何も伏せなかったんですから。」

「駆はアキ姉ちゃんが何をやるかわかってるみたいだけど何をやる

気なの？」

「わしもさっぱりわからんぞ。」

矢薙のじいさん・・・あなたもですか。

「そう、ならば遠慮なくいくわ。私はＬｖ４のロード・ポイズンにＬｖ３の夜薔薇の騎士をチューニング！冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚、現れよ！ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ＡＴＫ／２４００

「ブラック・ローズ・ドラゴンがシンクロ召喚に成功したときフィールドのすべてのカードを破壊する。」

ブラック・ローズ・ドラゴンから出た嵐でサベージ・コロシアム以外のすべてのカードが破壊された。

「私のフィールドを破壊するためなら自らのブラック・ローズ・ドラゴンを破壊することもいとわない。気分がいいわ。黒薔薇の魔女と呼ばれるあなたがそんなに必死になってくれるなんて。けれどブラック・ローズ・ドラゴンの効果を使ってもフィールド・バリアの効果により、サベージ・コロシアムのカードは破壊できない。」

「あなたが私にどんな恨みを持ってるのかは知らない。けど１つだけわかる。あなたは本気で私を殺そうとしている。ならば私も本気で戦うしかない。」

「これはずっとあなたがデュエルでしてきたことよ。」

「！？」

「どういうことだ？」

みんな驚いてるね。

「あなたは自分を救うという名目のために破壊だけを繰り返してきた。他人にどんな犠牲がでようがお構いなしに。今度があなたが他人に与えた絶望を自ら味わう番。」

「私が与えた絶望？」

「そう。あなたが私と弟に与えた絶望。」

「私はあなたの弟なんて知らない！」

「そうでしょうね。あなたにとって私の弟はとるに足らない存在。私の弟は・・・あなたに殺されたのよ！」

「！？・・何ですって！？」

言っちゃったね。衝撃の真実を。

ていうかまた俺のこと忘れられてるし・・・どうしよう？

## 第17話　ダークシグナー暗躍！憎しみの炎（後書き）

どうでしたか？

次回はアキ＆駆ｖｓミスティの決着。そしてディヴァインｖｓカーリーは？お楽しみに。

ご指摘やご感想お待ちしています。

## 第１８話　本当の真実　そして遂に地縛神降臨！（前書き）

お待たせしました。第１８話です。

パソコンの修理が終わりましたので執筆を再開いたします。

では第１８話のスタートです。

～前回のあらすじ～
アキ＆駆ｖｓミスティのデュエルが始まった。序盤にアキのエースのブラック・ローズ・ドラゴンが石化され、攻撃力が０になるも駆の融合コンボでミスティに大ダメージを与えたシグナー組。ブラック・ローズの効果で場も一掃したがその時、ミスティがアキにとって衝撃の真実を言ってしまう。

## 第１８話　本当の真実　そして遂に地縛神降臨！

アキｓｉｄｅ

「何ですって！？」

私がミスティの弟を殺した？

「私の弟はダイモンエリアにあなたのデュエルを見に行って死んだ。」

そんな・・・。

「知らない・・・私はあなたの弟など知らない。あのデュエル場で少年に会ったこともないわ！」

「あの子はあなたに憧れていた。まだ子供だった。」

・・・。

「あなたには力がある。他人を凌駕する、支配する。それは人を救うためにも使えたはず。」

「私に人を救う力なんてない！あったのはずっと私を苦しめ続ける・・呪われた力だけよ。」

そう、これは呪われた力。私に人を救う力なんてあるはずがない！

「あなたは愚かだわ。与えられた力を己のことにしか使わない愚か

な娘。あなたさえいなければあの子は・・・。私は許さない！私はあなたに復讐するために蘇ったのよ！」

復讐・・・。

「だったら復讐する相手が違うと思うけど。」

え？

駆ｓｉｄｅ

「だったら復讐する相手が違うと思うけど。」

「何！？」

そろそろ本当の真実ってやつをミスティに伝えなきゃね。原作ブレイクになるがもう今更だ。

「どういうこと？私の弟はこの十六夜アキに殺されたんじゃないって言うの！？」

「そうだよ。あなたが掴んだその情報はアルカディアムーブメント・・・いや、ディヴァインによって改ざんされた情報だよ。」

「何ですって！？じゃああなたは私の弟を殺した真犯人を知ってるの？」

「えぇ。アルカディアムーブメントにハッキングしたらすぐに出てきたよ。」

「ハッキングって・・・それって犯罪だよね？」

「そうだけどこんな人体実験やら犯罪まがいのことをしている組織にそんなことは関係ないね。」

「・・・そう。」

「待って。人体実験ってどういうこと？私そんなこと知らないわ。」

「ディヴァインは能力の高いものを選りすぐり、デュエル以外でも力を発揮できるように改造し、兵士として紛争地域に送り込む計画を立てていた。」

「な！？」

「そのために人体実験で有能な人材を探しだしていた。」

「う・・・そ・・・。」

「そしてその中にはアキさんも、そしてミスティさん、あなたの弟も含まれていた。」

「何！？」

「だがあなたの弟はディヴァインの人体実験に耐えられず命を落とした。」

「何ですって！？ということは私の弟を殺したのはディヴァインだったのね。」

よかった。あっさり信用してもらえて。信じてもらえなかったらミスティの弟の死の瞬間の動画を入手したからそれを見せようと思ったけどね。でもあんまり見せたくなかったからね。

「・・・十六夜アキ、ごめんなさいね。私の弟を殺したのはあなたじゃなかった。」

「ミスティ・・・。」

「もう・・このデュエルに意味はない。私はサ！？ぐっ・・・。」

「ミスティ！？」

まずい！ミスティがダークシグナーに乗っ取られようとしている。

「ぐぉぉぉぉぉ・・・シグナーを倒す！それが我の宿命！」

くっ・・・乗っ取られてしまったか。

「さぁシグナーよ。お前のターンだ。」

「私はカードを1枚伏せてターンエンド。」

「ふふふ、ではいくぞ。我のターン！我は手札より魔法カードレプティレス・スポーンを発動！このカードは墓地のレプティレスと名のつくモンスターをゲームから除外し、2体のレプティレストーク

ンを特殊召喚する。そしてこの２体のトークンをリリース！」

！？まずい！

「今こそ降臨せよ！地縛神コカライア！」

紫色の玉みたいなもの・・・街の人の魂が地縛神に吸収されていく。

そして、

「どこ？どこにいるの！あなたの召喚したモンスターは。」

「もうとっくにいるぞ。お前らの後ろにな！」

「え？」

そして後ろを見てみると・・・目しか映ってない地縛神だと！？大きいことは知ってたけどここまで大きいとは思わなかったぞ。

ＡＴＫ／２８００

「（何？このモンスターは？）」

１歩２歩下がるアキさん。そりゃそうか、あんなものを見たらそうなるよね。

「ははははは、このモンスターでお前達シグナーを蹴散らしてくれるわ！ははははは！」

「くっ！」

「ぐわぁぁぁぁぁぁ！」

！？この声は確かディヴァインの声。決着がついたのか。

～アルカディアムーブメント内ディヴァインの部屋～

その頃カーリーｖｓディヴァインはカーリーが地縛神アスラピスクを召喚しデュエルは終焉を迎えようとしていた。

「馬鹿な！こんな巨大なモンスターがいるのか！」

「消えなよディヴァイン。永遠の闇に。」

「ぐわぁぁぁぁぁぁ！」

そして地縛神アスラピスクがディヴァインに突撃し、そのモンスター効果でディヴァインのライフは０となった。

駆ｓｉｄｅ

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！」

そんなディヴァインの叫び声とともに瓦礫が落下してきた。それと一緒にディヴァインも落下し最下階まで落ちて行った。

「ディヴァイン！」

そしてアルカディアムーブメントは今にも崩壊しそうになっていた。

「くそ！」

氷室さんが龍可と龍亜を抱きかかえ安全なところへ避難させた。

「ちっ！お前達との勝負はお預けのようだな。次は完膚なきまでに叩き潰してやる。ははははは！」

そう言って操られたミスティは姿を消した。

「駆！十六夜！ここから早く逃げるんだ。」

「うん。アキさん、早く逃げよう。」

「ディヴァイン・・・。」

「アキさん！」

くそっ！このままじゃあ。

その時、駆とアキの上に大きな瓦礫が落下してきた。

「くっそー！」

俺ははアキさんを庇う格好になりそのまま俺とアキさんは瓦礫の下敷きになってしまった。

そして俺は意識を失った。

## 第１８話　本当の真実　そして遂に地縛神降臨！（後書き）

どうでしたか？

この話の関係上次のサテライトでのアキｖｓミスティも原作と少し違う戦いになると思います。

次回は・・・どうしよう？ということでまだ未定です。

ではご指摘とご感想をお待ちしています。次回もお楽しみに。

## 第１９話　アキと両親の和解（前書き）

今回はかなり短いです。

ではどうぞ。

～前回のあらすじ～

ミスティに本当の真実を伝える駆。それを信じたミスティだったが体がダークシグナーに乗っ取られ遂には地縛神を召喚されてしまう。ディヴァインのデュエルが終わったことでデュエルは中断になったが、アルカディアムーブメントは崩れ始め、駆はアキを庇う格好になりアキと共にその場で意識を失ってしまった・・・。

## 第19話　アキと両親の和解

駆side

「ん・・・ここは？」

俺が目を開けるとそこは・・・病院！？

そっか、俺、アルカディアムーブメントでアキさんを庇って意識を失ったんだ。

ドカーン！

！？な、なんだ今の音は！？

は、もしかして・・・

と思って隣の病室に行ってみると・・・思った通りアキさんと遊星がデュエルしてました。

しかも両方ともエースであるスターダストとブラック・ローズが場にいる。ま、当然か。そして俺が来たことに誰も気づいてない。ま、こんな騒ぎが起こってるんだからしょうがないか。

しかし他の病人たちはこの騒ぎに気付かないのかな？それとも黒薔薇の魔女といわれるアキさんが怖いのか・・・。

「やめて！」

ん？

「パパを傷付けたくない！」

そう言ってアキさんが念を込めると・・・サイコパワーが止まった。

もうこんな場面か。ということはもう終盤の方だな。

「・・・力を・・初めてコントロールできた。」

アキさんは驚いてるね。まぁ、初めてコントロールできたんだからそりゃ驚くわな。

「遊星、終わらせて。この戦いを。」

遊星はコクリとうなずくと残ってた伏せカードを発動させた。

「罠カードオープン！シンクロ・ヘイロー！シンクロモンスター1体が戦闘で相手モンスターを破壊できなかった時、そのシンクロモンスターは攻撃力を2倍にし続けてバトルすることができる。」

・・・よくこんなカードデッキに入れたな。シンクロをよく使う遊星だから使えたものの。ていうか破壊できなかった時ってあんまりないでしょ。そう考えてみればあんまり使いどころのないカードだな。

「今こそ魔女の呪縛を打ち破れ！スターダスト・ドラゴンでブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃！シューティング・ソニック！」

スターダストの攻撃でブラック・ローズは破壊され、アキさんのラ

イフは０となった。

その後アキさんは両親と和解した。やっぱりこの和解のシーンはいいね。あ、このシーンや遊星とアキさんのデュエルを見たい人はアニメ５Ｄ，ｓの第４０話、第４１話を見てね。

「やっぱりあの印は仲間の絆なんだよ。えへへ俺にはないけど。」

な～んて呑気なことを言ってる龍亜。ま、龍亜もその内その仲間に正式にはいることになるんだけどね。

「みんなこの痣に引き寄せられていく。そして仲間になっていく。忌むべき印じゃない。」

そしてその仲間の中心は遊星ってことだね。みんな遊星によって仲間になったもんだし。

「でも・・・でも私にはかつて信じた仲間がいた。その思いはまだ私の心の中にある。」

まだディヴァインを仲間と思ってるんだ。あんな真実を暴露したのにね。あの真実を受け止めきれてないのかな・・・。

「俺にもかつてそんな仲間がいた。やつの思いと俺の思いがすれ違い心を削っていく。」

・・・鬼柳のことだね。あれは可哀想だな。

「今は分からない。その思いがどんな決着を突き付けるのかは。だがかつて仲間と呼んだ同志ならその覚悟を背負い俺は進んでいく。」

「・・・遊星。」

本当に可哀想な運命だね遊星と鬼柳は。あれは鬼柳の勘違いから始まったんだっけ？それでも仲間だった人が敵にまわるなんてきついだろうな。

なんか俺にもそんなときが来そうな気がするな。現実世界で友達だった人が敵になって再開するということが。でも実際俺は恨まれても仕方ないような気がするけど・・・。あんなことにクラスのみんなを巻き込んだりしてしまったからね。

それにしても・・・まだ俺がいることに気づかないのね。そんなに俺存在が薄いのかな・・・。

「ところでお前はもう大丈夫なのか？」

「え？」

不意にジャックから声をかけられた。ってジャックは気づいてたんだ。

「「駆！？」」

・・・他の人は気づいてなかったみたいだね・・・。

「はい。もう大丈夫です。助けてくれてありがとうございます。」

「ふん、当然のことをしたまでだ。」

素直じゃないねジャックは。って今思わずジャックが助けてくれたみたいに口走っちゃったな。本当は知らないはずなのに。

「駆。」

今度はアキさんから声をかけられた。

「あの時私を助けてくれてありがとう。」

なんだそのことか。

「どういたしまして。それにしても両親と和解できてよかったですね。」

「えぇ。」

本当に嬉しそうだな。

こうして病院での一騒動（？）は幕を閉じた。

## 第１９話　アキと両親の和解（後書き）

どうでしたか？

今回はかなり短くてすみません。今週はあまり時間がなかったのでこうなりました。

次回はおそらくサテライトの方に行くと思います。赤き龍の説明のところは飛ばしたいと思います。

それと、お気に入り登録件数がいつの間にか１００件を超えてました。読んでくれた皆様ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

ではご指摘やご感想をお待ちしています。次回もお楽しみに。

## 第２０話　それぞれの思い　そして精霊世界へ（前書き）

今回はシグナー達の視点からも入れました。っていってもちょっとだけです。

けど難しいですね。シグナー達の視点って。

それではどうぞ。

～前回のあらすじ～

病院で目を覚ました駆は遊星とアキのデュエルを見ていた。そのデュエルは遊星が勝利し、アキは両親と和解した。これでシグナー５人が揃い、駆達はダークシグナーとの決戦に向けて備えるのであった。

## 第２０話　それぞれの思い　そして精霊世界へ

駆ｓｉｄｅ

アキさんが両親と和解して数日後、俺達シグナーはサテライトにいた。あれからゴドウィンから赤き龍についての話がありそれからサテライトに着き遊星ｖｓルドガーのデュエルが終わり今は明日のことについての作戦会議中だ。

しかしその雰囲気は重かった。何せ、さっきの遊星とルドガーのデュエルで遊星が世話になったマーサの魂が地縛神によって吸収され、ルドガーに操られた遊星の仲間のラリーは消えてしまったのだがら。

で、その会議の説明なんだけどサテライトの中心にある旧モーメントを制御する装置が４つあり、そこと旧モーメントでダークシグナーが待ってるらしいから誰がどの制御装置に向かうかってことを今話してるところ。

ちなみに４つの制御装置の名前は巨人、ハチドリ、トカゲ、猿（ケチュア語という言語らしいが・・・）。旧モーメントは蜘蛛（これもケチュア語らしい）という名前らしい。

「で、相手はどうするんだ？」

「おそらく巨人の紋章で待つのは鬼柳。そこには俺が行こう。」

今のは遊星。鬼柳との決着をつけに行くんだね。

「トカゲはミスティ。私はそこに向かう。」

今のはアキさん。ここは原作と違ってミスティがもう真実を知ってるからどうなるんだろう？

「猿はディマク。私はエンシェント・フェアリー・ドラゴンを取り返したい。」

「俺は龍可を応援する。」

今のは龍可と龍亜。ここは原作通りになるのだろうか？龍可のデッキが違ってるとはいえ、デュエルで使うのは龍亜のデッキだったはず。だったら関係ない・・・のか？

「ハチドリは・・・俺が行こう。」

今のはジャック。カーリーとのデュエルだね。

「駆はどうするの？」

「俺はみんなが出発した後に精霊世界に行く。シグナーの龍を取りにいかなきゃいけないしね。」

ムーン・ライト・ドラゴンの名前は伏せておいた。まだみんな知らないことだしね。

「そうか。」

「よーし、龍亜と龍可ちゃんは俺が車で運ぶぜ。」

「アキさんは私の車に。」

今のは牛尾さんに狭霧さん。

「俺はまた留守番か。ま、ガキ共の面倒は見といえやるから安心して行ってきな。」

今のは雑賀さん。

「よし、明朝いちばんに出発する。」

こうして会議は終わり、みんなは明日の決戦に向けて準備を始めた。

ジャックｓｉｄｅ

カーリー・・・何故だ・・・何故あいつがダークシグナーなんかに・・・。

それもこれも明日わかること。あいつの真意を確かめてやる！

アキｓｉｄｅ

いよいよ明日ねダークシグナーとの戦いは。私の相手はミスティ。

私に弟を殺され復讐のためにダークシグナーになった人。

でも駆によるとそれはミスティの勘違いらしく本当はディヴァインがミスティの弟を殺したという。

なんか私には信じられないけど今まで見てると駆はあんなところで嘘つくような人じゃない。

でもディヴァインがそんなことをするとも思えない・・・。

でもセキュリティで見たあのことは（アニメ５Ｄ，ｓ第４２話の冒頭部分）まぎれもない事実・・・。

私は・・・どうすればいいの？

遊星ｓｉｄｅ

鬼柳・・・。あいつは変わってしまった。あいつはあんな性格ではなかった。もっと仲間思いだったはず・・・。

あの時俺は間違った選択をしてしまった。そのせいで鬼柳は・・・。

鬼柳、明日のデュエルでお前の心を取り戻してやる！

龍亜ｓｉｄｅ

明日龍可がダークシグナーと戦う。でも大丈夫かな龍可のやつ。

もしものときは俺がダークシグナーと戦う。俺はシグナーじゃないけど、絶対に龍可を守るんだ！

そういえば龍可はどこに行ったんだ？

龍可ｓｉｄｅ

いよいよ明日、ダークシグナーとの戦いが幕を開く。私はまずエンシェント・フェアリー・ドラゴンを解放しにいかなくてはいけない。

でも私なんかにできるのかな・・・。なんか不安になってきた。いくらエンシェント・フェアリー・ドラゴンと約束したとはいえ・・・不安だなぁ。

「・・・大丈夫？」

「へ？う、うん。大丈夫。」

そうだったわ。今は駆の部屋にいたんだった。

「いよいよ明日だね。」

「そうね。」

「龍可はエンシェント・フェアリー・ドラゴンを解放しに行くんだよね。」

「うん。駆もシグナーの龍を解放しに行くんでしょう？」

「そうだよ。」

「お互いがんばらなくちゃね。」

「あぁ。」

こうして駆と話してるとなんか安心する。

でも何？このドキドキした気持ちは？

そう思いながらも私は頭を駆の肩に乗せる。

「どうしたの？」

「・・・何でもないわ。ただ、こうしてるとちょっと安心するから。」

「そう。」

そう言いながら駆は私の頭を撫でてきた。

どうしよう・・・このまま寝ようかしら・・・。

ってこれって恋人同士がすることよね。ってことは・・・

「駆。」

その時、駆の精霊の1人アルドが駆に話しかけた。

「そろそろ精霊世界に行きましょう。」

「え!?行くのって明日じゃないの?」

「その予定でしたけどエリクシーラー様が距離が長いから早めに行った方がいいと。」

そうなんだ。駆も大変なのね。

「そうか。わかった。ちょっと待ってて。」

「分かりました。」

「後、何べんも言うけど敬語口調じゃなくていいからね。ってそれはもう癖か?」

「はい。どうしても。」

「・・・なら仕方ないか。」

敬語口調が癖なんて・・・普段どんな生活してるのかしら?気になるわ。

「ということで精霊世界に行ってくるね龍可。」
「うん。みんなには私から言っとくわ。」
「お願い。じゃあ行ってくるね。」
「行ってらっしゃい駆。絶対に帰ってきてね。」
「もちろん。龍可も頑張ってね。」
そして駆は精霊世界に行った。
今ので分かったことがある。
私・・・駆のことが好きみたい。
だから絶対に帰ってきてよ。駆。

駆ｓｉｄｅ

「・・・で、まだムーン・ライトのところには着かないわけ？」
「はい。まだまだかかります。」
今、俺はムーン・ライト・ドラゴンのところにヒーローシティから

歩いてきてるわけだが、歩いて3時間はたっていた。
これだけ距離があるなら確かに昨晩のうちに出発しておいてよかったな。時間かかりすぎだ。
「で、そちらに預けた3体の妖精は元気にやってるでしょうか？」
ちなみにこいつはエリクシーラ。ヒーローシティで王をやっている。
「はいは～い元気にやってますよ。」
今のはシャイア。こいつはいっつもクリボンと龍可と遊んでる。
「同じく私も。」
今のはウィング。こいつもシャイアと同じくクリボンと龍可と遊んでる。ま、龍可が楽しそうだからいいけどね。
「私も同じく。」
今のはアルド。俺はこいつと1番よくしゃべるな。こいつはシャイアやウィングとは違い遊ぶという柄ではなくいつもシャイア達を見守ってたりする。まぁ、こいつがあの妖精3人組（俺が勝手につけた）の中では上司みたいなやつだからな。
「って俺が質問されたのに何でお前ら勝手に答えてんだよ！」
「だって事実じゃん。」
「・・・まぁそうだけど。」

「ははは、まぁ元気そうで何よりだ。」

ていうか俺のとこに来てからまだそうたってないけどね。

「ちくしょー・・・俺もそっちに行きてぇよぉ。」

とこんなことを言ってるのはフェザーマン。一応俺の精霊らしいが人間界にはいけないらしい。

「俺もだな。」

今のはスパークマン。こいつもフェザーマンと同じである。

「へへへ～いいでしょいいでしょ。」

「「おまえ～！」」

おいおいシャイア挑発するなよ。攻撃力ではお前が1番低いんだぞ。

そんなたわいのない話をしながら歩くこと2時間。

「あそこがムーン・ライト・ドラゴンが封印されているところです。」

着いたのはおおきなタワーだった。

「でっけ～。」

ほんとうにでかいな。だけど、

「ねぇあそこに門番みたいなのが立ってるけど。」

「・・・本当だ。ここに門番なんていないはず。」

そして近づいてみると、

「ふっふっふ、ここは通さんぞ。」

「お前は暗黒界の軍神シルバ！」

門番の正体はシルバだった。

「なぜおまえがここに！」

「はっはっは、今からここに封印されている龍は覇王様がいただくこととなったのだ。」

な！？覇王だと！それってまさか・・・。

「そこを通せ！その龍はこのものでないと封印は解けないぞ！」

「ほう、だったらその小僧をこっちに渡してもらおうか。」

なんでそうなる！？って当然か。まぁもちろん答えは、

「断る！」

「だったら力ずくでも連れていくのみだ。」

そう言ってどこからか持っていたデュエルディスクを起動するシルバ。ってこの世界ってデュエルで負けると死ぬんじゃないっけ？まぁいっか。勝てばいいんだし。

「いいだろう。受けてやる！そのデュエル。」

そう言って俺もデュエルディスクを起動させる。

「みんな、頼むよ。」

「「「「「はい！」」」」」

そう言って俺のデッキに戻る精霊たち。

さぁいくぜ！

「「決闘！」」

## 第２０話　それぞれの思い　そして精霊世界へ（後書き）

どうでしたか？

最近他の人の小説を見てて思ったんですけどみなさん１話１話が長いですね。どうしてそんなに長く書けるのか教えてほしいですね。まぁただ単に俺に文才がなくて俺のが短いのかもしれませんが・・・。

次回は駆ｖｓシルバです。お楽しみに。

ではご指摘やご感想をお待ちしております。

## 第２１話　ＨＥＲＯｖｓ暗黒界　信じる気持ち（前書き）

大変お待たせしました第２１話です。

ここまで長引いた理由は活動報告に書いています。

それではどうぞ。

～前回のあらすじ～

いよいよダークシグナーとの戦いが始まるその前夜、一足早くムーン・ライト・ドラゴンを解放しに精霊世界に行った駆。そこに立ちはだかる暗黒界の軍神シルバ。

今、ムーン・ライト・ドラゴンを解放するための試練のデュエルが幕を開ける。

## 第２１話　ＨＥＲＯｖｓ暗黒界　信じる気持ち

駆ｓｉｄｅ

「「決闘！」」

駆　ＬＰ４０００
シルバ　ＬＰ４０００

この決闘絶対負けられない！

先行は・・・あっちか。

まずいな。暗黒界相手に先行を取られたら・・・

「俺は魔法カード手札抹殺を発動。」

ほらいきなりきた。これは痛いな。ミラクル・フュージョンが落ちてしまった。

「俺は手札から捨てられた暗黒界の武神ゴルド、暗黒界の軍神シルバ、暗黒界の尖兵ベージ、暗黒界の術師スノウ、暗黒界の狩人ブラウの効果を発動。」

！？何つう手札してんだあいつは！

「ゴルド、シルバ、ベージはカード効果によって手札から墓地に送られた場合、墓地から特殊召喚する。」

ゴルド　ＡＴＫ／２３００
シルバ　ＡＴＫ／２３００
ベージ　ＡＴＫ／１６００

「そしてブラウの効果によりカード効果によって墓地に送られた時、カードを１枚ドローする。さらにスノウの効果により、カード効果により手札から墓地に送られた場合、デッキから暗黒界と名のついたカードを１枚手札に加える。この効果により俺は暗黒界の門を手札に加える。」

・・・もう何も言えない・・・。

「そして俺はフィールド魔法暗黒界の門を発動。」

シルバの後ろに門が現れた。

「これによりフィールド上に存在する悪魔族モンスターの攻撃力・守備力は３００ポイントアップする。」

ゴルド　ＡＴＫ／２３００→２６００
シルバ　ＡＴＫ／２３００→２６００
ベージ　ＡＴＫ／１６００→１９００

「さらに暗黒界の門の効果発動。墓地の悪魔族モンスター１体を除外しに送り手札から悪魔族モンスター１体を墓地に送る。その後カードを１枚ドローする。俺は墓地のスノウを除外し、手札からシルバを墓地に送り、カードを１枚ドローする。そしてシルバは自身の効果により特殊召喚される。」

ＡＴＫ／２３００→２６００

「そして暗黒界の騎士ズールを通常召喚。」

ＡＴＫ／１８００→２１００

「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ。さぁ、かかってこい小僧。」

・・・やばすぎるだろ。初ターンでモンスターが５体並んでるだと。いくらなんでも引きがよすぎるだろ！まぁグラファがいないのが唯一の幸いだな。

さぁてどうしようかな。ま、ここはある人の言葉を借りてドローしてから考えるか。

「俺のターン、ドロー！」

げ！あのフィールドに加えて手札に融合系のカードがない。ＨＥＲＯでこれは致命的だろ！まぁ融合がなくてもあのカードがすでに加わってるからそれで攻めるか。

「俺はＥ・ＨＥＲＯバーストレディを召喚。」

ＡＴＫ／１２００

「そして俺は手札から速攻魔法マスク・チェンジを発動。自分フィールド上のＨＥＲＯと名のついたモンスターを墓地に送り、墓地に送ったモンスターと同じ属性のＭ・ＨＥＲＯと名のついたモンスターを１体エクストラデッキから特殊召喚する。炎属性のバーストレディを墓地に送り、現れろ！Ｍ・ＨＥＲＯ剛火！」

ＡＴＫ／２２００

「このカードは墓地に存在するＨＥＲＯ１体につき攻撃力が１００ポイントアップする。墓地にはバーストレディと手札抹殺によって墓地に送られたエッジマンとスパークマンの３体。よって攻撃力は３００ポイントアップ！」

ＡＴＫ／２２００→２５００

「バトル！剛火でズールを攻撃！」

シルバ　ＬＰ４０００→３６００

「カードを２枚伏せてターンエンド。」

「その程度のモンスターでは俺を倒せんぞ。俺のターン。」

確かにその通りだ。でも今は・・・

「俺は魔法カード暗黒界の雷を発動。フィールド上に裏側表示で存在するカード１枚を破壊する。その後、自分の手札を１枚捨てる。俺はお前の左側の伏せカードを破壊する。」

ふっ、かかったな。

「今破壊されたヒーロー・メダルの効果発動。相手がコントロールするカードの効果によって破壊され墓地に送られた時、このカードをデッキに加えてシャッフルし、カードを１枚ドローする。」

「ちっ、しかし破壊はしたので手札のブラウを墓地に送る。そしてブラウの効果によりカードを1枚ドローする。」

まだグラファは来ないのか。もしかしてあのデッキにグラファは入ってない？

「バトルだ。ゴルドで剛火を攻撃！」

「その攻撃は通さない！罠発動！攻撃の無力化！」

「凌いだか。だがどこまでもつかな？俺はベージを守備表示にし、ターンエンドだ。」

ＡＴＫ／１９００→ＤＥＦ／１３００→１６００

ふぅ～、しかし凌いだとはいえ、形勢は俺の不利。なんとかしなきゃ。

「俺のターン、ドロー！」

くっ、これじゃあ打開できない。

「バトル剛火でベージを攻撃！」

剛火が放った炎によってベージは破壊された。

「俺はＥ・ＨＥＲＯクレイマンを守備表示で召喚。」

ＤＥＦ／２０００

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン、リバースカードオープン、暗黒界に続く結界通路を発動。墓地の暗黒界のモンスター1体を特殊召喚する。俺は暗黒界の騎士ズールを特殊召喚。」

ＡＴＫ／１８００→２１００

決めにきやがったなこれは。

「バトルだ。ゴルドで剛火に攻撃。」

駆　ＬＰ４０００→３９００

「シルバでクレイマンに攻撃。」

「くっ！」

「ズールで直接攻撃。」

「ぐわぁぁぁぁぁ！」

駆　ＬＰ３９００→１８００

何だこの痛みは？これが・・精霊世界での決闘。

「これでとどめだ！シルバで直接攻撃！」

まずい！これをくらったら負ける。だけど！

「墓地のネクロ・ガードナーの効果発動！このカードを除外することで攻撃を1度だけ無効にする。」

「また凌いだか。」

「さらに罠発動！ショック・ドロー！このターン受けたダメージ1000ポイントにつき1枚カードをドローする。このターン俺が受けたダメージは2000ポイントを超えている。よって2枚カードをドローする。」

「俺は1枚カードを伏せてターンエンドだ。」

なんとか凌いだ。けどこのままじゃあ次のターンでやられる。

『大丈夫？』

「・・・シャイアか。」

そっか。さっきのショック・ドローの時に引いたんだ。

「大丈夫だよ。」

『・・・そういう風には見えないけんだけど？』

・・・確かにきつい。精霊世界でのデュエルがここまで過酷なものだとは正直思ってなかった。しかも圧倒的不利なこの状況。

「俺は・・ここまでなのか・・・。」

『何弱気になってるのよ！』

「シャイア・・・。」

『駆がそんなんじゃあ勝てる決闘も勝てないよ！』

「でも・・・」

『こんなときこそ自分のデッキを信じなきゃ。』

！？そうだよね。こんなときにデッキを信じなきゃムーン・ライトもついてこないよね。

こんなときに俺は・・・。

「ありがとうシャイア。おかげで目が覚めた。」

『それでいいのよ。さぁ、行こう駆。』

「あぁ。いくよ！俺の・・ターン！」

来た！融合。これで決める！

「手札から速攻魔法サイクロン発動。その伏せカードを破壊する。」

「何！？俺のヘイト・バスターが。」

危な！けどこれで倒せる。

「手札から融合発動！手札のオーシャン、フェザーマンそしてエンジェル・シャイアの3体を融合！」

「3体融合だと！？」

「現れろ！Ｖ・ＨＥＲＯトリニティー！」

ＡＴＫ／２５００

「シャイアの効果発動！このカードが融合素材またはシンクロ素材として墓地に送られた時、このカード以外の融合素材またはシンクロ素材のレベル×１００ポイントライフを回復する。融合素材にしたオーシャンとフェザーマンのレベルの合計は7。よって７００ポイントライフを回復する。」

『受け取って！駆！』

駆　ＬＰ１８００→２５００

「そしてトリニティーは融合召喚に成功したターン、攻撃力は倍になる。」

ＡＴＫ／２５００→５０００

「攻撃力５０００だと！？だが攻撃されたとしてもライフは残るぞ。」

「残らないよ。トリニティーは1度のバトルフェイズで3回攻撃することができる。」

「何！？」

「バトル！トリニティーでシルバを攻撃！」
「ぐおおおおお！」
シルバ　ＬＰ３６００→１２００
「トリニティーの２回目の攻撃！２体目のシルバを攻撃！」
「馬鹿な！こんな小僧にぃぃぃぃ！」
シルバ　ＬＰ１２００→０
「はぁはぁはぁ。」
か、勝った。
『ごくろうさま駆。』
「ありがとうシャイア。」
『どういたしまして。』
シャイアも意外と礼儀正しいんだな。
「何の騒ぎだ？」
ムーン・ライト・ドラゴンが封印されているタワーが開き、そこにいたのは・・・
「そんな・・・馬鹿な・・・。」

確かに覇王という時点で予想できてたけど・・・なんでこの時代にいるんだ？

「覇王・・十代・・。」

## 第２１話　ＨＥＲＯｖｓ暗黒界　信じる気持ち（後書き）

～オリカ紹介～
Ｅ・ＨＥＲＯエンジェル・シャイア
光属性　天使族　Ｌｖ１
ＡＴＫ／１００　ＤＥＦ／１００
チューナー・効果
このカードが融合素材またはシンクロ素材として墓地に送られた時、このカード以外の融合素材またはシンクロ素材のレベル×１００ポイントライフを回復する。

どうでしたか？

次回は駆ｖｓ覇王十代の予定です。

そしてこんな間があいたにも関わらず登録件数が１５０件を超えました。本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

それではご指摘やご感想をお待ちしています。次回もお楽しみに。

## 第２２話　融合合戦！　駆ｖｓ覇王（前書き）

お待たせしました第２２話です。

Ｅ－ＨＥＲＯがよく分からずちょっと空いてしまいました。すみません。

このデュエルでは一部カードがアニメ効果になってます。対したことじゃありませんけど。

それでは第２２話のスタートです。

～前回のあらすじ～
ムーン・ライト・ドラゴンを解放しに精霊世界にやってきた駆。そこに立ちはだかった暗黒界の軍神シルバとのデュエル。序盤おされるもののトリニティーを出し一気に勝負を決めた。だが、次に立ちはだかるのは・・・。

## 第２２話　融合合戦！　駆ｖｓ覇王

駆ｓｉｄｅ

「覇王・・十代・・。」

何故だ？何故こいつがここにいる？

「・・何故ここにいるって顔だな。まぁ、俺も何故ここにいるかはわからんが。」

心が読まれた！？しかしこいつも何故ここにいるかは分からないんだな。でも何か引っかかる・・。

しかしこいつには何を言っても通してはくれないだろう。ならば・・

「・・ほぅ。この俺と戦うか。いいだろう。」

デュエルで勝って通るまで。ていうかこれしか覇王十代には通用しない。

「ならいくぞ。」

！？何だこれは！？これが覇王のプレッシャーか。とてつもないな。だがひるんでなんかいられない。この決闘に勝って、ムーン・ライトを解放するんだ！

「「決闘！」」

駆　ＬＰ４０００
覇王　ＬＰ４０００

「俺のターン、手札からエマージェンシーコールを発動。デッキからＥ・ＨＥＲＯを１体を手札に加える。俺はエアーマンを手札に加える。そしてエアーマンを召喚。」

ＡＴＫ／１８００

「エアーマンの効果発動。このカードが召喚、特殊召喚に成功したとき、デッキからＨＥＲＯと名のついたモンスター１体を手札に加えることができる。俺はレディ・オブ・ファイアを手札に加える。カードを１枚伏せてターンエンド。」

さて覇王のデッキはＥ－ＨＥＲＯだったなでもＥ－ＨＥＲＯは効果よく覚えてないんだよなぁ。

「ドロー、手札から悪魔族専用融合カードダーク・フュージョン発動。」

悪魔族？そういえばＥ－ＨＥＲＯって悪魔族だったっけ。

「手札のフェザーマンとワイルドマンを融合。いでよ！Ｅ－ＨＥＲＯワイルド・サイクロン！」

ＡＴＫ／１９００

「バトル、ワイルド・サイクロンでエアーマンを攻撃。サイクロン・スラッシュ！そしてワイルド・サイクロンが攻撃する時、相手は魔法・罠を発動できない。」

そんな効果があるのか・・。くっ！

駆　ＬＰ４０００→３９００

「そしてワイルド・サイクロンが相手に戦闘ダメージを与えた時、相手フィールド上にセットされた魔法・罠をすべて破壊する。」

そんな効果まであったのか。でも・・

「俺が伏せていたのはヒーロー・メダル。こいつは相手によって破壊され墓地に送られた時、このカードをデッキに加えてシャッフルし、カードを１枚ドローする。」

「・・こざかしいな。ターンエンドだ。」

ふぅ。他に伏せてなくてよかった。あんな効果があるとはね。じゃあ次はこっちの番。

「俺のターン！手札から融合発動！手札のレディ・オブ・ファイアとザ・ヒートを融合。来い！Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ブラスト！」

ＡＴＫ／２３００

「バトル！フレイム・ブラストでワイルド・サイクロンを攻撃！バーニング・ファイア！」

覇王　ＬＰ４０００→３６００

「俺はこれでターンエンド。」

しかし今回は珍しく罠カードがあんまりこないなぁ。まぁあんまり来ても困るけど。

「ドロー、手札からダーク・フュージョン発動。」

またかよ！こりゃこのデュエルは融合合戦だな。

「手札のスパークマンとクレイマンを融合。いでよ！Ｅ－ＨＥＲＯライトニング・ゴーレム！」

ＡＴＫ／２４００

「ライトニング・ゴーレムの効果発動。１ターンに１度フィールド上に存在するモンスター１体を破壊する。フレイム・ブラストを破壊する。ボルテック・ボム。」

な！コスト無しでその効果かよ！

「バトル、ライトニング・ゴーレムで直接攻撃！ヘル・ライトニング！」

「ぐわあぁぁぁ！」

駆　ＬＰ３９００→１５００

「ターンエンド。」

くっ、今のは効いたな。だがこっちも反撃だ！

「俺のターン！手札から融合発動！手札のオーシャンとフォレストマンを融合！来い！Ｅ・ＨＥＲＯジ・アース！」

ＡＴＫ／２５００

げ！調子に乗ってジ・アースにしちまった。ここはＺｅｒｏかガイアにしとくべきなのに。まぁいいや。

「バトル！ジ・アースでライトニング・ゴーレムに攻撃！アース・インパクト！」

覇王　ＬＰ３６００→３５００

「カードを１枚伏せてターンエンド。」

これで大丈夫かな。Ｚｅｒｏだったらもっと安心できるんだけど・・・失敗したなぁ。

「ドロー、Ｅ－ＨＥＲＯヘル・ブラットを特殊召喚。」

ＡＴＫ／３００

ヘル・ブラットは自分フィールド上にモンスターが存在しない時、手札から攻撃表示で特殊召喚できる。そしてヘル・ブラットを生贄にＥ－ＨＥＲＯマリシャス・エッジを召喚。」

ＡＴＫ／２６００

Ｌｖ７のモンスターを生贄１体で召喚だと！

「マリシャス・エッジは相手フィールドにモンスターが存在する時、生贄を1体減らすことができる。」

・・なんつうモンスターだよ。ていうか手札2枚がこの2体だったの!?チートドローめ。

「そしてヘル・ブラットの効果発動。このカードが墓地に送られた時、カードを1枚ドローする。ただしそのドローしたカードはこのターン使用できない。バトル、マリシャス・エッジでジ・アースに攻撃。ニードル・バースト。」

「くっ!」

駆　ＬＰ１５００→１４００

「ターンエンド。」

また覆された。しかも手札にあいつを手立てはない。このドローでなんとかしないと。

「俺のターン!」

きた!

「俺は手札から融合回収を発動!墓地に存在する融合と融合素材に使用したモンスター1体を手札に加える。俺は融合とレディ・オブ・ファイアを手札に加える。そして融合を発動。手札のフェザーマンとレディ・オブ・ファイアを融合。来い」!Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ!」

ＡＴＫ／２８００

「Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯの効果発動！このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの攻撃力・守備力を半分にする。タウン・バースト！」

ＡＴＫ／２６００→１３００　ＤＥＦ／１８００→９００

「バトル！Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯでマリシャス・エッジを攻撃！スーパーセル！」

覇王　ＬＰ３５００→２０００

「ターンエンドだ。」

これで俺が優勢。この状況を手札が１枚の状態でそう簡単に崩せは・・・

「ドロー。ダーク・コーリング発動。手札・墓地から融合素材モンスターをゲームから除外し、融合召喚する。」

ここでＥ－ＨＥＲＯ版ミラクル・フュージョン！？あんた一体どんなドローしてんだよ。って忘れてたな。あいつは覇王になってるとはいえ十代だ。チートドローができて当然だったな。

「墓地のマリシャス・エッジとワイルド・サイクロンを除外し融合。いでよ！Ｅ－ＨＥＲＯマリシャス・デビル。」

ＡＴＫ／３５００

攻撃力３５００だと！？

「バトル、マリシャス・デビルでＧｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯに攻撃。エッジ・ストリーム。」

「くっ！だがこれ以上ダメージをくらうわけにはいかない！リバースカードオープン！残留思念！墓地のモンスター２体を除外することでこのターン受ける戦闘ダメージを０にする。ジ・アースとフレイム・ブラストを除外！」

「ターンエンド。」

くそっ！手札は０、場も何もない。本当に絶望的だな。だけど俺はあきらめない！こいつに勝って、ムーン・ライトを解放するんだ！

「俺のターン！」

引いたカードは・・・

『かなり劣勢ね。駆。』

ウィングだった。

「まぁね。ウィング、力を貸して。」

『任せて。』

「俺はＥ・ＨＥＲＯエンジェル・ウィングを守備表示で召喚。これでターンエンドだ。」

ＤＥＦ／７００

「ドロー。バトル、マリシャス・デビルでその守備モンスターに攻撃。エッジ・ストリーム。」

マリシャス・デビルの攻撃がウィングに向かう。でもウィングはそう簡単にはやられないよ。

「ウィングの効果発動。このカードは１ターンに１度戦闘によっては破壊されない。耐えて！ウィング！」

『任せて。くぅぅぅ！』

「・・ターンエンド。」

「大丈夫？ウィング。」

『えぇ。ちょっときつかったけど問題ないわ。』

「そう。」

とは言ってるもののつらそうだな。早くあのモンスターをなんとかしないと。

「俺のターン！」

このカードか。覇王にも手札を与えることにはなるけど今はそんなこと言ってられない！

「俺は手札から壺の中の魔術書を発動。お互いのプレイヤーはカー

ドを３枚ドローする。」
きた！これなら勝てる！
「いくよウィング。」
『えぇ。』
「手札からミラクル・フュージョン発動！場のウィングと墓地のエアーマンを除外し融合！来い！Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング！」
ＡＴＫ／２６００
「シャイニングは除外されているＥ・ＨＥＲＯ１体につき攻撃力が３００ポイントアップする。除外されているＥ・ＨＥＲＯは４体。よって攻撃力は１２００ポイントアップ！」
ＡＴＫ／２６００→３８００
「攻撃力がマリシャス・デビルを超えただと！？」
「さらに速攻魔法収縮を発動！マリシャス・デビルの攻撃力を半分にする。」
「何！？」
ＡＴＫ／３５００→１７５０
「これでファイナルだよ！シャイニングでマリシャス・デビルを攻

撃！オプティカル・ストーム！」

覇王　ＬＰ２０００→０

はぁはぁはぁ勝った。これでやっとムーン・ライトのところにいける。

そして気がつけば覇王は消えていた。負けたから消えたのかな？

『見事なデュエルでしたよ。駆。』

！？突然声がしてタワーの方を向くと・・・

ムーン・ライト・ドラゴンが目の前にいた。何で？

『あの者たちはあなたを試すためにここに呼び寄せたのです。』

え？ということは、

「それじゃああの２人は」

『えぇ。別の世界から連れてきました。』

・・・納得した。それで覇王がいたんだね。しかし覇王を呼び寄せるとは・・・。って

「エリクシーラ達はこのことを知ってたの？」

『えぇ。』

にゃろう。あいつら後でとっちめてやろうか。

「それで試した結果は？」

『十分に合格です。今日から私はあなたの力となりましょう。』

・・・なんか呆気ないような気がするがまぁいいか。

するとタワーから石板が現れた。

『その石板に触れてください。その中に私のカードは入ってます。』

言われたとおりに石板に触れた。すると石板が光り、中からカードが出てきた。

「これが・・ムーン・ライト・ドラゴンのカードか。これからよろしくね。ムーン・ライト。」

『こちらこそ。』

しかし綺麗だなぁムーン・ライトって。

『さぁ駆、ダークシグナーを倒しに行きましょう。』

「そうだね。でもその前にエンシェント・フェアリー・ドラゴンのところに寄りたいんだけど。いい？」

『確かエンシェント・フェアリーのとこにもシグナーの子が封印を解放しにいってると聞いてますがその子の手助けに？』

「当たり。ちょっと心配だからね。」

『分かりました。では私の背中にお乗りください。私が道案内します。』

「助かる。」

こうして俺はムーン・ライト・ドラゴンを手に入れた。龍可の方は大丈夫かな？

## 第２２話　融合合戦！　駆ｖｓ覇王（後書き）

～オリカ紹介～
Ｅ・ＨＥＲＯエンジェル・ウィング
風属性　天使族　Ｌｖ２
ＡＴＫ／５００　ＤＥＦ／７００
チューナー・効果
このカードは１ターンに１度戦闘によっては破壊されない。このカードをシンクロ素材又は融合素材としたシンクロモンスター又は融合モンスターは１ターンに１度破壊されない。

覇王の口調ってこんなものだっけ・・・？ちょっと自信ないです。
次回は原作の方に戻ります。龍可はエンシェント・フェアリー・ドラゴンを解放できるのか？お楽しみに。
ではご指摘やご感想をお待ちしています。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9321u/

---

遊戯王～ＣＬＯＳＳ　ＨＥＲＯ～

2011年12月4日00時51分発行